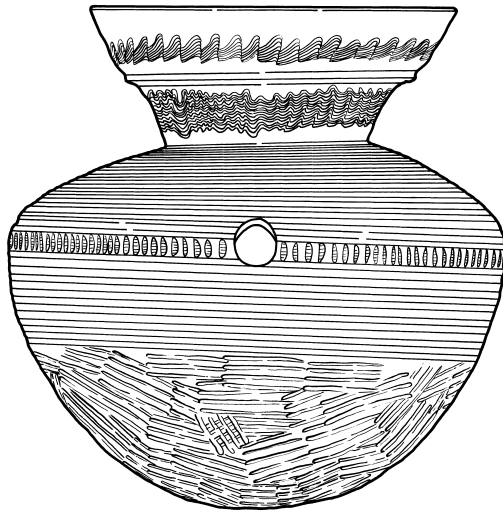


具同中山遺跡群 - 2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書



2001.11

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具同中山遺跡群 - 2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書

2001.11

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成4年度から高知県教育委員会が建設省四国地方建設局の委託を受けた中村宿毛道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。高規格道路である中村宿毛道路が計画されている四万十川の支流中筋川流域は、縄文時代以降の遺跡が密集する地域であり、幡多郡の中心的な地域でもあります。

本書は、平成11年度後半期に実施した中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群Ⅲ－2の発掘調査報告書です。本書は平成12年度に刊行されました具同中山遺跡群Ⅲ－1の発掘調査報告書に続くものであり、今回の調査では弥生時代、古墳時代、古代の祭祀関連遺構が検出され、中でも古墳時代の掘立柱建物跡の確認は今回が初めてであり、今後具同中山遺跡群を位置付ける上でも注目されます。さらに、本年度刊行する予定であります具同中山遺跡群Ⅲ－3では新たに古墳時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡を検出しており、祭祀跡のみでなく集落跡であった可能性もあり、今後の調査に期待されます。本書が埋蔵文化財の保護、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、国土交通省四国地方整備局中村工事事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示を頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成13年11月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は中村宿毛道路建設計画に伴い平成11年度に実施した具同中山遺跡群Ⅲ-2の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 具同中山遺跡群は高知県中村市具同字中山に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも古墳時代の祭祀に特筆される。発掘調査は平成11年10月から平成12年2月まで実施した。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

総括—財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸(平成11年度), 門田伍朗
総務—同総務課長 島内信雄, 同主任 山本三津子, 同主幹 大原裕幸, 臨時職員 大橋真弓
調査総括—同調査課長 西川裕(平成11年度), 重森勝彦
調査担当—同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 小島恵子, 同調査員 田中涼子, 技術補助員 岡村朋美, 測量補助員 野町和人 岡崎真紀
5. 本書の執筆は調査を担当した廣田, 小島, 田中がそれぞれ執筆し, 編集等は廣田が行った。現場写真は田中, 遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺跡の略号は「99-15GN」とし, 出土遺物の註記等にはこれを使用している。報告書に掲載の縮尺率はそれぞれに示した。遺構についてはSF(祭祀関連遺構), SB(掘立柱建物跡), SA(柵列), SX(性格不明遺構)で表記した。また, 掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており, 方位Nは公共座標におけるGNであり, 遺跡付近(国土基本図Ⅳ-KC17)の真北はGNに対し東に $0^{\circ} 20' 41''$, 磁北はGNに対し西に $5^{\circ} 31' 34''$ 振っている。なお, 調査区のほぼ中心部(X=-2,860, Y=-54,530)は北緯 $32^{\circ} 59' 59''$, 東経 $133^{\circ} 29' 58''$ である。
7. 遺物については, 原則として弥生土器・土師器・須恵器が縮尺1/4, 土製模造品(白玉以外)・石製模造品・手づくね土器・鉄製品(鉄鏃)が縮尺1/2, 石製模造品(白玉)が原寸で掲載している。なお, 一部の遺物については縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表示している。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって, 多くの方々のご指導並びに貴重なご教示, ご助言を賜りご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

なお, 布留式土器については青木勘時(天理市教育委員会)と青木香津江(檀原考古学研究所), 弥生土器については柴田昌兎(愛媛県埋蔵文化財調査センター)にご教示頂いた。
9. 遺構, 遺物の測量及び写真撮影は各調査員, 技術補助員, 測量補助員が行い, 測量には新たに設置した3級基準点を使用した。
10. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また, 同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

整理作業員

島村加奈, 岸本洋子, 元木恵利子, 坂本エリ, 竹村小百合, 森田直美, 松田美香, 岩井凉子, 吉野絵里, 森川 歩, 森沢美紀, 横山めぐみ, 原真由美, 西村美喜

11. 調査にあたっては, 国土交通省四国地方整備局中村工事事務所, 社団法人高知県建設技術公社, 高知県中村土木事務所のご協力を頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々に, 遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き, 厚く感謝の意を表したい。
12. 出土遺物, その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章(廣田)

1. はじめに.....	1
2. 契機と経過.....	2
3. 調査の方法.....	3

第II章 調査の概要

1. 調査の経過(小島)	5
(1) 調査の経過.....	5
(2) 調査日誌抄.....	5
2. 調査の概要.....	7
(1) 調査の概要(田中)	7
(2) 層序(田中).....	8
(3) 堆積層出土遺物(小島・田中)	12
3. 遺構と遺物	19
(1) 弥生時代(小島).....	19
① 祭祀関連遺構.....	19
(2) 古墳時代(田中).....	22
① 掘立柱建物跡.....	22
② 祭祀関連遺構.....	22
③ 性格不明遺構.....	49
(3) 古代(田中)	51
① 柵列	51
② 祭祀関連遺構.....	51

第III章 自然科学分析

はじめに.....	55
1. 調査地点の層序	55
2. 試料.....	56
3. 分析方法.....	58
4. 結果.....	60
5. 考察.....	70
6. まとめ(具同中山遺跡群の古環境変遷)	71

第Ⅳ章 考察

1. 弥生時代(小島)	77
2. 古墳時代(田中)	78
3. 古代(田中)	81
4. まとめ(廣田)	82

挿図目次

Fig.1 中村市及び具同中山遺跡群位置図	1
Fig.2 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図(S=1/10,000)	2
Fig.3 試掘トレンチ及びⅢ区調査地区(S=1/2,000)	3
Fig.4 調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)	4
Fig.5 発掘調査風景1	5
Fig.6 発掘調査風景2	6
Fig.7 発掘調査風景3	7
Fig.8 検出遺構配置図(S=1/600).....	8
Fig.9 1区下層南壁セクション図	9
Fig.10 2区北壁セクション図	11
Fig.11 第ⅩⅢa・ⅩⅢb・ⅩⅤa・ⅩⅤa層出土遺物実測図(須恵器・土師器・土師質土器ほか).....	15
Fig.12 第ⅩⅣa・ⅩⅣa・ⅩⅣb層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師器ほか).....	17
Fig.13 第ⅩⅣa・ⅩⅣa'層出土遺物実測図(弥生土器).....	19
Fig.14 弥生時代遺構配置図(S=1/800).....	19
Fig.15 SF-1出土遺物実測図	20
Fig.16 古墳時代遺構配置図(S=1/800).....	21
Fig.17 SB-1	22
Fig.18 SB-1出土遺物実測図	22
Fig.19 SF-2出土遺物実測図1	23
Fig.20 SF-2出土遺物実測図2	24
Fig.21 SF-2出土遺物実測図3	25
Fig.22 SF-2出土遺物実測図4	26
Fig.23 SF-2出土遺物実測図5	27
Fig.24 SF-2出土遺物実測図6	29
Fig.25 SF-2出土遺物実測図7	30
Fig.26 SF-2出土遺物実測図8	31

Fig.27	SF-2出土遺物実測図9	32
Fig.28	SF-2出土遺物実測図10	33
Fig.29	SF-2出土遺物実測図11	34
Fig.30	SF-2出土遺物実測図12	35
Fig.31	SF-2出土遺物実測図13	36
Fig.32	SF-3出土遺物実測図1	36
Fig.33	SF-3出土遺物実測図2	37
Fig.34	SF-3出土遺物実測図3	38
Fig.35	SF-3出土遺物実測図4	39
Fig.36	SF-4出土遺物実測図1	39
Fig.37	SF-4出土遺物実測図2	40
Fig.38	SF-4出土遺物実測図3	41
Fig.39	SF-4出土遺物実測図4	42
Fig.40	SF-4出土遺物実測図5	44
Fig.41	SF-4出土遺物実測図6	45
Fig.42	SF-4出土遺物実測図7	45
Fig.43	SF-4出土遺物実測図8	46
Fig.44	SF-4出土遺物実測図9	46
Fig.45	SF-4出土遺物実測図10	47
Fig.46	SF-4出土遺物実測図11 (278~333は原寸).....	48
Fig.47	SF-4出土遺物実測図12	48
Fig.48	SX-1	49
Fig.49	SX-1出土遺物実測図	49
Fig.50	古代遺構配置図 (S=1/800)	51
Fig.51	SA-1	51
Fig.52	SF-5遺物出土状態	52
Fig.53	SF-5出土遺物実測図	53
Fig.54	既往調査地点位置図	56
Fig.55	調査地点の層序	57
Fig.56	主要花粉化石群集の層位分布	65
Fig.57	2地点植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状	67
Fig.58	3・1地点植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状	68
Fig.59	具同中山遺跡群調査地域の層序	73
Fig.60	口縁部形態	77
Fig.61	口縁部形態の出土比率	77

表目次

Tab.1	白玉計測表.....	50
Tab.2	放射線炭素年代測定結果	60
Tab.3	珪藻分析結果	62
Tab.4	花粉分析結果1	63
Tab.5	花粉分析結果2	64
Tab.6	植物珪酸体分析結果.....	66
Tab.7	土壤理化学分析結果.....	69

図版目次

PL.1	調査前全景(東より) 調査前全景(西より)	PL.12	SF-3(南より) SF-3(南より)
PL.2	中世遺構検出状態(西より) 中世遺構完掘状態(西より)	PL.13	SF-4(南より) SF-4(東より)
PL.3	1区下層確認トレンチ(西より) 弥生時代遺構完掘状態(西より)	PL.14	SX-1(北より) SA-1(南東より)
PL.4	1区北壁中央部セクション(南より) 1区下層確認トレンチセクション(北より)	PL.15	SF-5(北より) SF-5(南より)
PL.5	SF-1(北より) SF-1(南より)	PL.16	第ⅩⅤa層銅製品(4)出土状態(西より), 第ⅩⅤa層土師器(22)出土状態(北より), 第ⅩⅤb層鉄製品(28)出土状態(西より), SF-1弥生土器(41)出土状態(西より), SF-1弥生土器(43)出土状態(南より), SB-1P-1検出状態(西より), SB- 1P-2(53)検出状態(西より), SB- 1P-3(54)検出状態(西より)
PL.6	SB-1検出状態(西より) SB-1半裁状態(西より)	PL.17	SB-1P-1半裁状態(西より), SB- 1P-2(53)半裁状態(西より), SB- 1P-3(54)半裁状態(西より), SB- 1P-1完掘状態(西より), SB-1P-2 (53)完掘状態(西より), SB-1P-3(54) 完掘状態(西より), SF-2炭化物集中 (北西より), SF-2土師器(127)出土状
PL.7	SF-2遺物出土状態1(北より) SF-2遺物出土状態2(南より)		
PL.8	SF-2遺物出土状態3(西より) SF-2遺物出土状態4(西より)		
PL.9	SF-2遺物出土状態5(西より) SF-2遺物出土状態6(西より)		
PL.10	2区遺構完掘状態(西より) 2区下層確認トレンチ(西より)		
PL.11	2区北壁東部セクション(南より) 2区北壁西部セクション(南より)		

- 態(西より)
- PL.18 SF-2土師器(137)出土状態(西より), SF-2手づくね土器(153)出土状態(南より), SF-2須恵器(160)出土状態(北より), SF-2須恵器(163)出土状態(南より), SF-2須恵器(164)出土状態(東より), SF-2土製模造品(166)出土状態(東より), SF-2石製模造品(168)出土状態(西より), SF-2石製模造品(169)出土状態(西より)
- PL.19 SF-4土師器(220・221)出土状態(北より), SF-4土師器(221)出土状態(北より), SF-4土師器(227)出土状態(北より), SF-4土師器(230)出土状態(東より), SF-4土師器(231)出土状態(北より), SF-4土師器(239)出土状態(西より), SF-4土師器(263・268)出土状態(北より), SF-4手づくね土器(269)出土状態(西より)
- PL.20 SF-4須恵器(273)出土状態(南より), SF-4須恵器(276)出土状態(南より), SF-4石製模造品(277)出土状態(東より), SA-1(南より), SA-1(南より), SA-1(南より), SF-5須恵器(336・338)出土状態(東より), SF-5須恵器(337・339)出土状態(西より)
- PL.21 弥生土器(壺)
弥生土器(壺・甕)
- PL.22 須恵器(甕)
須恵器(甕)
- PL.23 須恵器(甕)
須恵器(甕)
- PL.24 石製模造品(白玉)
石製模造品(白玉)
- PL.25 弥生土器(壺・甕), 土師器(壺・甕)
- PL.26 土師器(壺・甕)
- PL.27 土師器(甕)
- PL.28 土師器(壺・甕), 須恵器(甕)
- PL.29 土師器(甕・高杯)
- PL.30 土師器(高杯)
- PL.31 土師器(高杯), 須恵器(壺), 鉄製品(鏃)
- PL.32 弥生土器(壺・甕), 土師器(高杯), 銅製品(丸鞆), 鉄製品(鋤先)
- PL.33 弥生土器(甕・鉢), 土師器(甕)
- PL.34 土師器(甕・高杯)
- PL.35 土師器(壺・甕・高杯), 須恵器(甕), 土製模造品(円板), 石製模造品(斧形)
- PL.36 土師器(壺・甕・高杯)
- PL.37 土師器(高杯)
- PL.38 土師器(高杯), 須恵器(壺・甕), 石製模造品(勾玉)
- PL.39 土師器(鉢・高杯・椀), 手づくね土器, 須恵器(皿)
- PL.40 土師器(器台・椀・台付椀), 手づくね土器
- PL.41 土師器(高杯・椀), 手づくね土器, 須恵器(杯蓋)
- PL.42 土師器(椀), 手づくね土器, 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.43 軟X線写真(1)
- PL.44 軟X線写真(2)
- PL.45 軟X線写真(3)
- PL.46 軟X線写真(4)
- PL.47 軟X線写真(5)
- PL.48 軟X線写真(6)
- PL.49 軟X線写真(7)
- PL.50 軟X線写真(8)
- PL.51 軟X線写真(9)
- PL.52 軟X線写真(10)
- PL.53 花粉化石
- PL.54 植物珪酸体
- PL.55 木材

付 図 目 次

付図1 SF-1遺物出土状態(S=1/40)

付図2 SF-2遺物出土状態(S=1/40)

付図3 SF-3遺物出土状態(S=1/40)

付図4 SF-4遺物出土状態(S=1/40)

第 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)から業務委託を受けた中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成11年度に実施した具同中山遺跡群Ⅲ-2の発掘調査の結果をまとめたものである。具同中山遺跡群を始めとした一連の発掘調査は建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)中村工事事務所が実施している中村宿毛道路(高規格道路)建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

この一連の工事に伴って調査された遺跡は具同中山遺跡群を含め10遺跡¹⁾を数え、城跡を中心に祭祀遺跡や集落に関連する遺跡が確認されている。この中でも具同中山遺跡群は遺跡範囲が広く、平成6年度のⅠ区から本年度のⅡ-2区まで5ヵ年で7地区を調査し、関連の県道や市道の発掘調査を含めると8ヵ年で10地区の調査を実施している²⁾。調査箇所は、遺跡が立地する中筋川左岸の自然堤防の北側縁辺部から東部の自然堤防上に当たり、自然堤防及びその周辺部では遺構・遺物の密度が高くなり、古墳時代の住居跡や掘立柱建物跡も祭祀関連遺構³⁾と共に確認されている。

一方、この道路関係の発掘調査に先立って実施された河川改修に伴う発掘調査は自然堤防南東部の縁辺部を中心に実施され、5世紀後半から6世紀前半にかけての多数の祭祀跡が検出されるも明確な掘方を持つ遺構は確認されなかった。

このように遺跡全域に互って、古墳時代の祭祀跡や祭祀関連遺構が検出され、これまで具同中山遺跡群は古墳時代中期を中心とした祭祀跡として位置付けられてきたが、遺跡の中心部とみられ



Fig.1 中村市及び具同中山遺跡群位置図

る自然堤防上を調査するに至り、上部構造のある遺構が検出され、集落の可能性も視野に入れ検討しなければならなくなった。今回報告する掘立柱建物跡は使用材種から祭祀に関連した可能性が考えられるが、次に報告する掘立柱建物跡は異なる材種が用いられており祭祀と集落の両面から検証していく必要がある。

2. 契機と経過

具同中山遺跡群の中で、中村宿毛道路計画路線に係っている部分について平成5年度から確認調査が実施され、Ⅲ区⁴⁾については平成5年度(Ⅲ-1区)、平成6年度(Ⅲ-2区)、平成11年度(Ⅲ-3区)の3回に分けて行われた。その結果、それぞれ地区から古墳時代の遺物包含層が確認され、標高の高い部分ではさらに弥生時代と古代の遺物包含層も検出された。この結果に基づき、本調査は、Ⅲ-1区が平成8年度、Ⅲ-2区が平成11年度、Ⅲ-3区が平成12年度に実施した。Ⅲ-1区の発掘調査を行った平成8年度時点では道路建設工法が決定しておらず道路予定区域内の全面発掘調査を実施したが、平成12年度時点では上下線が南北に分れ高架となることが決定していたためⅢ-2区及びⅢ-3区については、高架が設置される部分を発掘調査した。そのため、それぞれ調査区が南北に分れている。

今回報告するⅢ-2区は、平成8年度に行われたⅢ-1区の東隣の調査区で、市道高橋線までの南

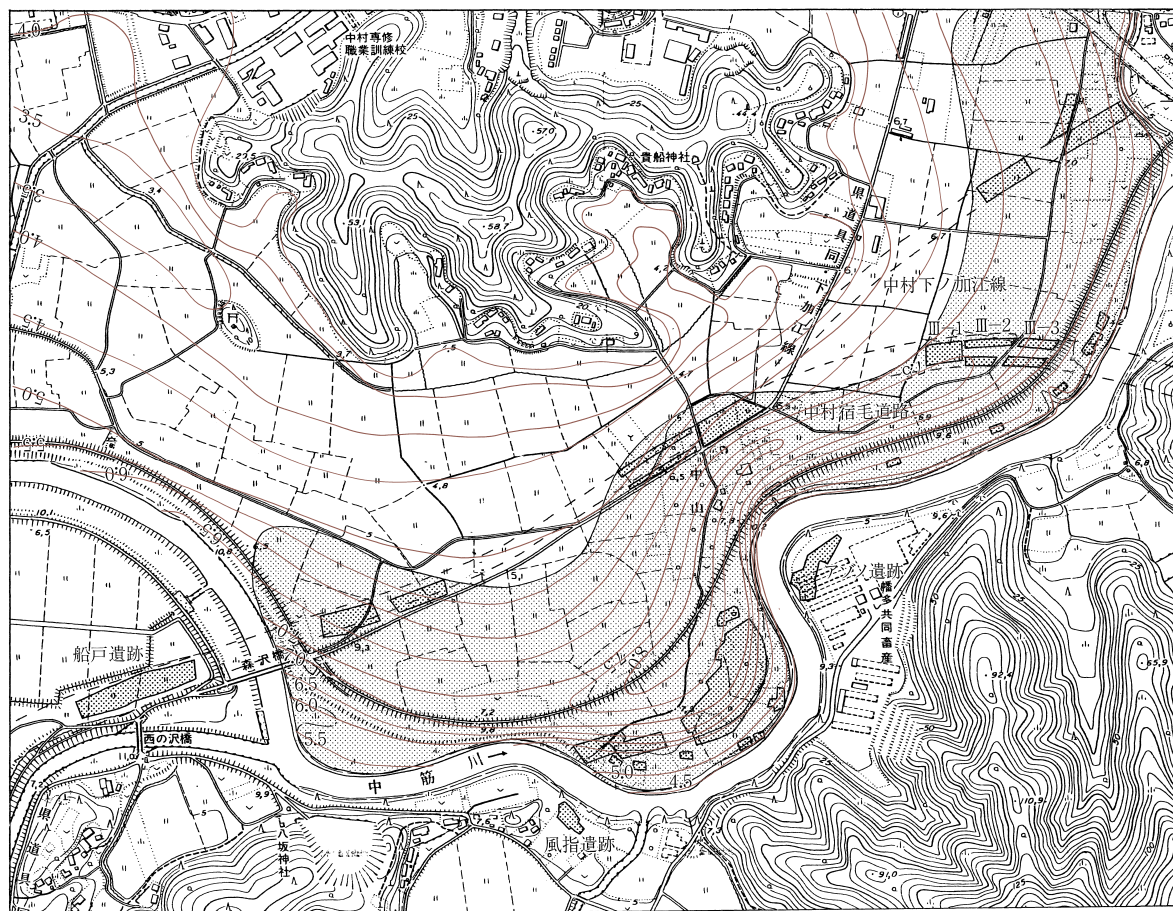


Fig.2 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図(S=1/10,000)

側東西約45m, 北側東西約74m, 南北約40mの範囲が調査対象区域となる。このうち実際調査を行ったのは1区(南側728m²), 2区(北側1,162m²)の1,890m²であり, 遺構検出面が地表下約2mで確認されているため鋼矢板(シートパイルとトレンチシート)の布設や排水施設の設置などの仮設工事を行った上で実施した。

3. 調査の方法

平成6年度に実施した試掘調査の結果に基づき, 工事予定区域を全面発掘調査することとし, 南側を1区(東西35m, 南北10m), 北側を2区(東西60m, 南北10m)として調査区を設定した。

各調査区とも遺物包含層の深度が約2mと比較的深いことから南側の調査を行った後, 北側の調査を行うこととし, 民地との境界及び市道との境部分については鋼矢板(シートパイル), 法面については軽量鋼矢板(トレンチシート)をそれぞれ設置し, また, 排水についてはろ過施設を設け, ろ過したうえで水路に排水した。

調査は, 重機で遺物包含層に影響がない層位まで掘削した後, すべて人力で行った。なお, 両調査区とも下層の遺物包含層(弥生時代中期末から後期初め)については, 密度に散つきが見られることから調査区の中央部に幅2mのトレンチを設定し, 調査を行ったうえで, 明確な遺物包含層が確認された部分について拡張した。

測量については, 3級基準点・水準点を設置して行い, 報告ではこの成果に基づき, 図面には公共座標値を記している。なお, 調査区付近は日本国土座標系の第4座標系(IV系)の第3象限に当たる。

註

- (1) 中村宿毛道路建設に伴って発掘調査された遺跡は, 東から具同中山遺跡群, 船戸遺跡, 浅村遺跡, 間城跡, 江ノ古城跡, ナハノシロ城跡, 西ノ谷遺跡, 久木ノ遺跡・城跡, 神ヶ谷窯跡, サンナミ遺跡であり, 四万十

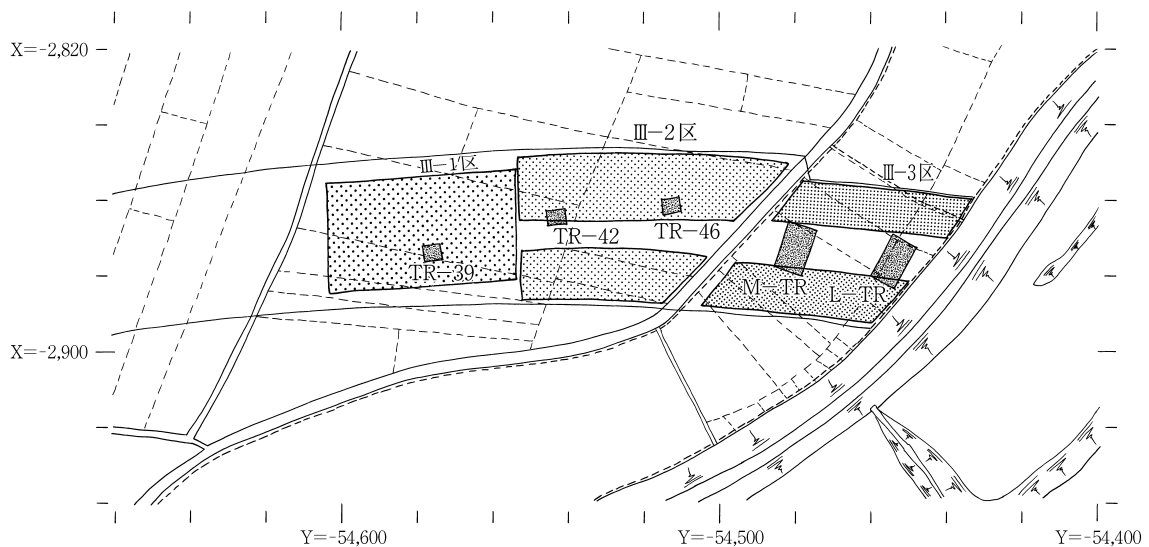


Fig.3 試掘トレンチ及びⅢ区調査地区(S=1/2,000)

川以西の区域では平成13年度(2001年度)に実施している具同中山遺跡群Ⅱ-2(南半分)が最後の発掘調査となる。また、昭和61年度から始まった具同中山遺跡群の発掘調査もこれで一旦終了するため河川改修に伴って実施された発掘調査の結果も含めこれまでの発掘調査の成果を平成14年度刊行予定の『具同中山遺跡群Ⅱ-2-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ-』で総括したい。

- (2) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅱ-2』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第53集 2000年の第1表建設省関連埋蔵文化財発掘調査一覧表に掲載している。なお、平成13年度にはⅡ-2区の未調査であった南半分の調査を実施している。
- (3) 土製勾玉や土製模造鏡などの土製模造品、有孔円板や石製勾玉などの石製模造品または手づくね土器などの祭祀遺物を伴い祭祀跡と判断されるもの以外にも土器だけで構成され「土器集中」などと報告されているものについて、検出状況から判断する限り前者と異なった性格のものであるとは考え難く、今回の報告ではこれらを総称して「祭祀関連遺構」として報告する。なお、明確に祭祀跡と判断されるものについては「祭祀跡」という表現も併用している。
- (4) Ⅲ区にかかる報告書は、小区ごとに下記の3冊が発行済みまたは発行予定である。
 『具同中山遺跡群Ⅲ-1』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ-
 『具同中山遺跡群Ⅲ-2』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ-
 『具同中山遺跡群Ⅲ-3』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ-

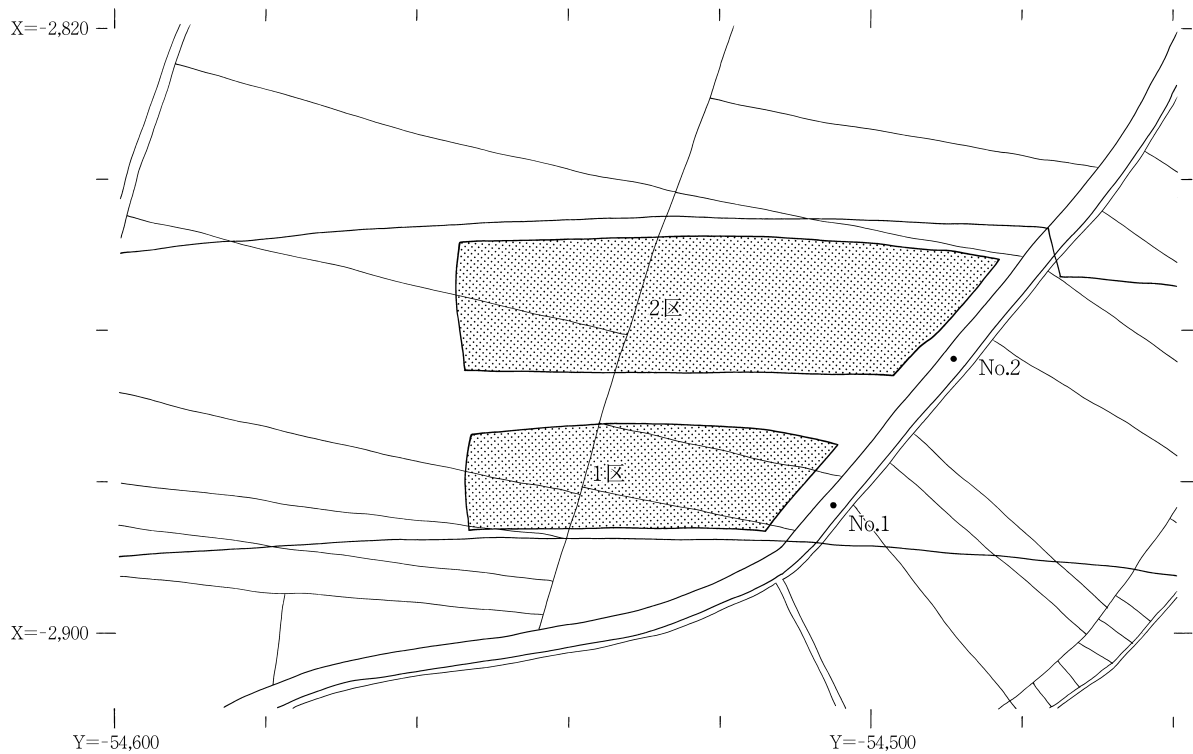


Fig.4 調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)

第 章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

具同中山遺跡群の調査は建設省(現国土交通省)の河川改修工事に伴って昭和61年度 から始められ、平成6年度からは中村宿毛道路建設工事，市道改良工事，県道改良工事等の道路関係工事に伴い実施されている。今回のⅢ-2区の調査は平成11年度に行われた中村宿毛道路建設に伴う調査であり，平成8年度に行われたⅢ-1区の東側に位置する。調査区は中筋川の左岸の自然堤防から後背湿地に向う緩斜面に当たり，高架が設置される南北2カ所に調査区を設定し，南側を1区，北側を2区とした。調査面積は，1区が728㎡(古代面が226㎡，古墳時代面が364㎡，弥生時代面が138㎡)，2区が1,167㎡(古代面が497㎡，古墳時代面が497㎡，下層確認トレンチが173㎡)で，総調査面積は1,895㎡であった。調査期間は平成11年10月13日から平成12年2月7日までの実働71日間を要した。

(2) 調査日誌抄

1区1999年(平成11年)10月13日～11月23日

- | | |
|---|--|
| 10.13 調査を開始する。表土の機械掘削を始める。 | 北壁セクション西半部の写真撮影を行う。 |
| 10.14 引き続き機械掘削を行う。 | 10.29 SF-2の平面実測を終了し，レベル測量を行った上で遺物を取上げる。 |
| 10.15 調査区西部の機械掘削を終了する。 | 11.1 SF-2の遺物の取上げを終了する。北壁下半部のセクションの測量を始める。 |
| 10.18 調査区東部の機械掘削と共に中世遺物包含層(第Ⅲa層)の人力掘削に移る。 | 11.2 東部の第Ⅲa層の人力掘削を行う。北壁セクションの測量を終了する。SF-2の平面実測を行う。 |
| 10.19 古墳時代の遺物包含層(第Ⅲa層)の人力掘削を行う。北壁セクションの測量を始める。 | 11.4 引き続きSF-2下層の調査を行う。 |
| 10.20 東部の機械掘削に併行して第Ⅲa層の人力掘削を行う。南東部でSF-2を検出する。 | 11.5 SF-2下層から出土した遺物の実測，写真撮影後，遺物を取上げる。 |
| 10.21 第Ⅲa層の人力掘削に併行してSF-2の調査を行う。白玉が出土する。 | 11.8 下層確認トレンチの調査を行う。弥生時代の遺物が出土する。 |
| 10.22 SF-2から古墳時代の土師器や須恵器が出土する。西壁に軽量矢板を設置する。 | |
| 10.25 表土の機械掘削に併行して第Ⅲa層の人力掘削を行う。引き続きSF-2の調査を行う。須恵器の甕が出土する。 | |
| 10.26 残る表土の機械掘削と第Ⅲa層の人力掘削を行う。SF-2の調査を終了し，写真撮影を行う。 | |
| 10.27 雨天のため午前中は現場作業を中止し，午後からSF-2の平面実測を始める。 | |
| 10.28 遺構の水汲み及び精査を行う。現場作業は午前中で終了する。午後，SF-2の平面実測を行う。 | |



Fig.5 発掘調査風景1

- 11.9 引き続き、下層確認トレンチの調査を行う。
- 11.10 調査区東部の下層確認トレンチの調査を行う。第Ⅲa層から弥生土器が出土したため調査区東部のトレンチを拡張する。第Ⅲa層で掘立柱建物跡1棟を検出する。
- 11.11 調査区東部の第Ⅲa層から鉄製品が出土する。弥生時代の遺物包含層(第Ⅲa層)の人力掘削を行う。
- 11.16 掘立柱建物跡(SB-1)の柱穴の写真撮影と測量を行う。

2区1999年(平成11年)11月24日～2000年(平成12年)2月7日

- 11.24 土層の機械掘削を開始する。
- 11.25 引き続き土層の機械掘削を行う。
- 11.26 引き続き土層の機械掘削を行うと共に北壁セクションの測量を行う。排水施設を設置する。
- 11.29 西側から第Ⅲa層上面までの機械掘削を始める。北壁セクションの測量を引き続き行う。
- 11.30 北壁第Ⅲa層までセクションの測量を終了する。北壁に軽量矢板を設置する。
- 12.1 土層の機械掘削と共に西側から古代の遺物包含層(第Ⅲa層)の人力掘削を始める。
- 12.2 引き続き土層の機械掘削と共に調査区西部の人力掘削を行う。
- 12.3 引き続き土層の機械掘削と共に調査区西部の人力掘削を行う。丸軋が出土する。
- 12.6 引き続き土層の機械掘削と共に中央部の人力掘削を行う。北壁セクションの測量を行う。
- 12.7 引き続き土層の機械掘削と共に中央部の人力掘削を行う。北壁セクションの測量を終了する。第Ⅲa層から遺物が出土する。
- 12.8 引き続き土層の機械掘削と共に中央部の人力掘削を行う。第Ⅲa層から土師器、須恵器が集中して出土し、SF-5とする。
- 12.9 SF-5の写真撮影を行い、平面実測を行った上で遺物を取上げる。
- 12.10 SF-5下層の遺物を取上げる。
- 12.13 土層の機械掘削と共に東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。
- 12.14 第Ⅲa層の掘削を終了する。SA-1を検出する。

- 11.17 弥生時代の遺構(SF-1)を検出する。平面実測と写真撮影を行う。SB-1の柱根の取上げを行う。
- 11.22 掘立柱建物跡SB-1を完掘し、写真撮影と平面実測を行う。調査区の完掘状態の写真撮影を行う。調査区南壁際に下層確認トレンチを設定する。
- 11.23 下層トレンチのセクションの測量を終え、1区の調査を終了する。

- 西部から第Ⅲa層(古墳時代遺物包含層)の人力掘削を開始する。
- 12.15 引き続き西部の人力掘削を行う。SA-1の調査を行う。
- 12.16 引き続き西部の人力掘削を行う。東壁セクションの測量を行う。
- 12.17 引き続き西部の人力掘削を行う。第Ⅲa層から木製品が2点出土し、SX-1とする。
- 12.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.21 降雪のため現場作業を中止する。
- 12.22 西部の人力掘削を行う。SX-1の写真撮影と平面実測を行ったうえで遺物を取上げる。調査区西壁に軽量矢板を設置仕直す。
- 12.24 SF-3を検出する。調査区中央部で焼土を検出する。
- 1.5 中央部第Ⅲa層の人力掘削とSF-3の調査を行う。西壁の軽量矢板を設置仕直す。
- 1.6 引き続き中央部第Ⅲa層の人力掘削を行うと共にSF-3の調査を行う。



Fig.6 発掘調査風景2

1.7 引き続き中央部第Ⅲa層の人力掘削を行うと共にSF-3の調査を行う。

1.11 引き続き中央部第Ⅲa層の人力掘削を行うと共にSF-3下層の調査を行う。南壁の軽量矢板を設置仕直す。

1.12 東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。SF-3の下層から遺物が出土する。写真撮影を行い、取上げる。

1.13 引き続き東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。北東端から土器が集中して出土する。北壁セクションの測量を終了する。

1.14 引き続き東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。東端部の第Ⅲa層から土師質土器がわずかに出土する。

1.17 引き続き東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。手づくね土器が出土する。

1.18 引き続き東部第Ⅲa層の人力掘削を行う。

1.19 東部第Ⅲa層から多くの土器が出土し、SF-4とする。

1.20 SF-4の調査を行う。北東隅から白玉16点が出土する。

1.21 引き続きSF-4の調査を行う。新たに白玉6点と滑石製の勾玉1点が出土する。

1.24 降雨のため白玉の平面実測のみを行い、作業を中止する。

1.25 SF-4を調査する。SF-4の西方から測量を始める。西壁の軽量矢板を設置仕直す。

1.26 引き続きSF-4の調査を行う。西半部の平面実測を終了する。

1.27 SF-4の検出状態の写真撮影を行う。白玉が出土した周囲の土層の水洗を行い、白玉2点を確認する。

1.31 引き続きSF-4の調査を行う。白玉2点が出土する。

2.1 SF-4の調査と平面実測を行う。土層の水洗で白玉4点を確認する。

2.2 引き続きSF-4の調査と新たに出土した遺物の平面実測を行う。白玉25点が出土する。

2.3 SF-5の調査を行う。白玉3点が出土する。完掘状態の写真撮影を行う。引き続き下層確認トレンチを設定し調査する。

2.4 下層確認トレンチの掘削を引き続き行う。

2.5 下層確認トレンチの掘削を引き続き行う。

2.6 下層確認トレンチを東部に拡張する。

2.7 下層確認トレンチの掘削を終了し、完掘状態の写真撮影を行う。本日でⅢ-2区の調査をすべて終了する。



Fig.7 発掘調査風景3

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査では弥生時代、古墳時代、古代の3時期の遺構・遺物を確認することができた。これらの中心は古墳時代で、そのほとんどは明確な掘方は認められないものの土器が集中して出土し、石製・土製模造品などを伴うことが多く、祭祀跡ないし祭祀遺構(本書では「祭祀関連遺構」として扱う。)と判断されるものである。古墳時代では3ヵ所の祭祀関連遺構を確認した。また、弥生時代では調査区南東部で祭祀関連遺構を検出し、古代では調査区北側で祭祀関連遺構を確認した。中世については調査区南部で土師質土器の出土をみたが、明確な遺構は検出されず、流れ込みによるもの

と判断した。以下、本項では堆積土層とその出土遺物について記述する。

(2) 層序

調査区の層序は第Ⅲ層まで2区の北壁，第Ⅲ層以下については弥生時代の祭祀関連遺構が検出された1区の南壁で捉えた。土層の堆積は基本的に地表下約2mまでは各層の堆積が薄く，それぞれマンガンの沈着が認められることから水田耕作が連綿と行われていたものと考えられ，地表下2～4mでは各層が厚く堆積していることから大きな氾濫の影響が看取される。また，各層は中筋川の堤防に近い東側の方が標高が高く，西側に向かって傾斜している。

古墳時代の遺物包含層は深いところで地表下約3mの地点で確認され，検出面は標高3.300～4.000mを測り，調査区東部の方が高く，比高差は東西で約70cmであった。遺物の出土量は標高が高くなるに連れて多くなる傾向がみられた。

層序については，土壌化作用を受けた部分をa層，洪水などで堆積した層である岩屑の部分をもとして分層した⁽¹⁾。

遺構については，本来，地表面であるa層の上面から掘り込まれたものであるが，機能を失った後も地表面が埋没することなく土壌化が継続すると，土壌化によって遺構の上部が不明瞭になる。そのため土壌化の及ばなかったb層の上面で遺構を検出することになる。今回の調査においても，遺物包含層であるa層を除去し，遺構検出を行った。

層序

第Ⅰa層は明褐色(10YR3/3)シルト層で下部に酸化鉄の沈着がみられ，厚さ4～26cmを測る表土層である。b層はすべて土壌化したものとみられ，確認できなかった。

第Ⅱa層は黄灰色(2.5Y5/1)シルト層で下部に酸化鉄の沈着がみられ，厚さ4～17cmを測り，調査区東部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ，確認できなかった。

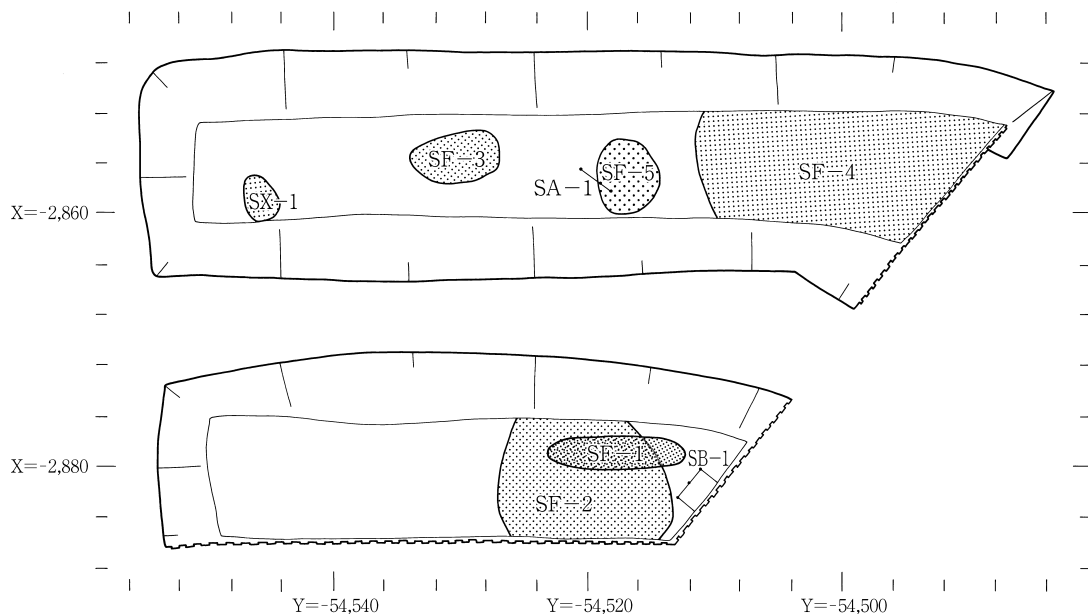


Fig.8 検出遺構配置図(S=1/600)

第Ⅲa層は灰色(N6/0)粘土質シルト層で下部に酸化鉄の沈着がみられ、厚さ6~16cmを測り、調査区東部で認められた。b層は灰白色(10YR7/1)シルト質砂層でマンガンを非常に多く含み、褐色を呈し、厚さ4~10cmを測り、調査区東部で認められた。

第Ⅳ層は調査区西部で認められた。a層は灰色(N6/0)粘土質シルト層で下部に酸化鉄の沈着がみられ、厚さ7~17cmを測る。b層は黄灰色(2.5Y6/1)シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められ、厚さ6~17cmを測る。

第Ⅴa層は黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を含み、厚さ13~22cmを測り、調査区西部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第Ⅵa層は灰色(5Y5/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含み、厚さ4~26cmを測り、調査区西部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第Ⅶa層は黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂層でマンガンを多く含み、厚さ2~10cmを測り、調査区東部で認められた。b層は灰色(7.5Y6/1)粘土質シルト層でマンガンを多く含み、厚さ3~10cmを測り、調査区東部で認められた。c層は灰白色(10YR7/1)砂質シルト層で、厚さ約6cmを測る。a・b層と同時期に堆積したとみられるが、砂粒とマンガンを非常に多く含む。

第Ⅷa層は灰色(5Y5/1)砂質シルト層でマンガン粒を多く含み、厚さ3~12cmを測り、調査区東部で認められた。b層は灰白色(2.5Y7/1)砂質シルト層で5mm大のマンガン粒を多く含み、厚さ約6cmを測る。調査区東部のごく一部で認められたのみで、ほとんど土壌化したものと考えられる。

第Ⅸa層は灰色(N6/0)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含み、厚さ3~22cmを測り、調査区西端以外で認められた。b層は黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で、厚さ4~23cmを測る。調査区西部のみで認められたことから東側ではそのほとんどが土壌化したものとみられる。

第Ⅹa層は灰色(7.5Y6/1)砂質シルト層で3mm大のマンガン粒を含み、厚さ約7cmを測り、調査区東部のごく一部で認められた。b層は黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を含み、厚さ約3~11cmを測り、調査区東部で認められた。

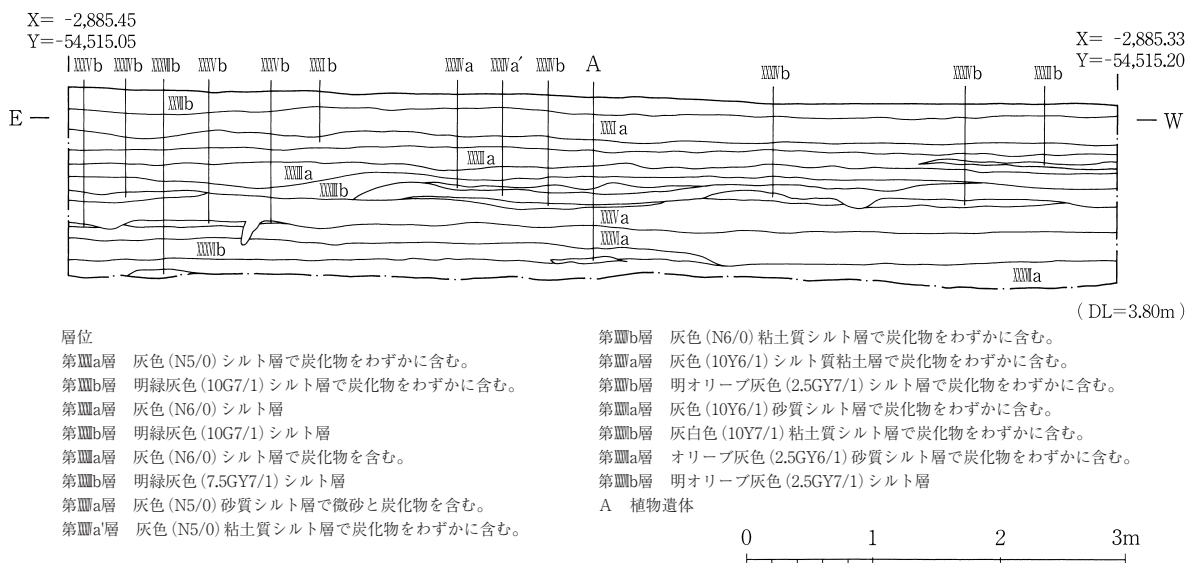


Fig.9 1区下層南壁セクション図

第XIIb層は黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を含み、厚さ4～14cmを測り、調査区の西部で認められた。a層は土壌化しなかったか、削平されたものとみられる。

第XIIIb層は灰色(10Y6/1)粘土質シルト層で2～5mm大のマンガン粒を含み、厚さ2～14cmを測り、調査区東部で認められた。a層は土壌化しなかったか、削平されたものとみられる。

第XIIIa層は灰白色(N7/0)シルト質砂層でマンガン粒をわずかに含み、厚さ約8cmを測り、調査区東部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第XIVa層は灰色(5Y6/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含み、厚さ3～14cmを測り、調査区東部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第XVa層は灰色(5Y5/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒と若干砂粒を含み、厚さ約4cmを測り、調査区西部の一部のみで認められた。a'層は灰色(5Y5/1)粘土質シルト層でマンガン粒を多く含み、厚さ4～23cmを測り、調査区の全域で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第XVIa層は灰色(5Y5/1)シルト層で約2mm大のマンガン粒を含み、厚さ4～10cmを測り、調査区の東部で認められた。b層は灰色(7.0Y5/1)粘土質シルト層で3mm大のマンガン粒を含み、厚さ5～22cmを測り、調査区東部で認められた。c層は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層で3mm大のマンガン粒と砂粒を含み、厚さ7～26cmを測り、調査区東部で認められた。

第XVIIa層は灰色(5Y6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を多く含み、厚さ4～31cmを測り、調査区の全域で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第XVIIa層は灰色(N7/0)砂質シルト層でマンガン粒を非常に多く含み、厚さ10～26cmを測り、調査区のほぼ全域で認められた。a'層は黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を少し含み、厚さ7～24cmを測る。調査区東部でのみ認められ、土壌化した層が二層に分層できた。b層は灰色(N6/0)シルト層で3mm大のマンガン粒を多く含み、厚さ6～24cmを測り、調査区全域で認められた。

第XVIIIb層は明青灰色(5B7/1)シルト層でマンガン粒を非常に多く含み、厚さ6～24cmを測り、調査区の全域で認められた。a層は土壌化しなかったか、削平されたものとみられる。

第XXa層は青灰色(10BG6/1)粘土質シルトでマンガン粒を少量含み、厚さ7～14cmを測り、調査区西部で認められた。b層は青灰色(5BG6/1)シルト層で、厚さ7～26cmを測り、調査区西半で認められた。

第XXIIa層は青灰色(5B6/1)シルト層で、厚さ4～20cmを測る。調査区西部で認められたが、b層と酷似するため境は不明瞭である。b層は明緑灰色(10BG7/1)シルト層で、厚さ4～31cmを測り、調査区西部で認められた。

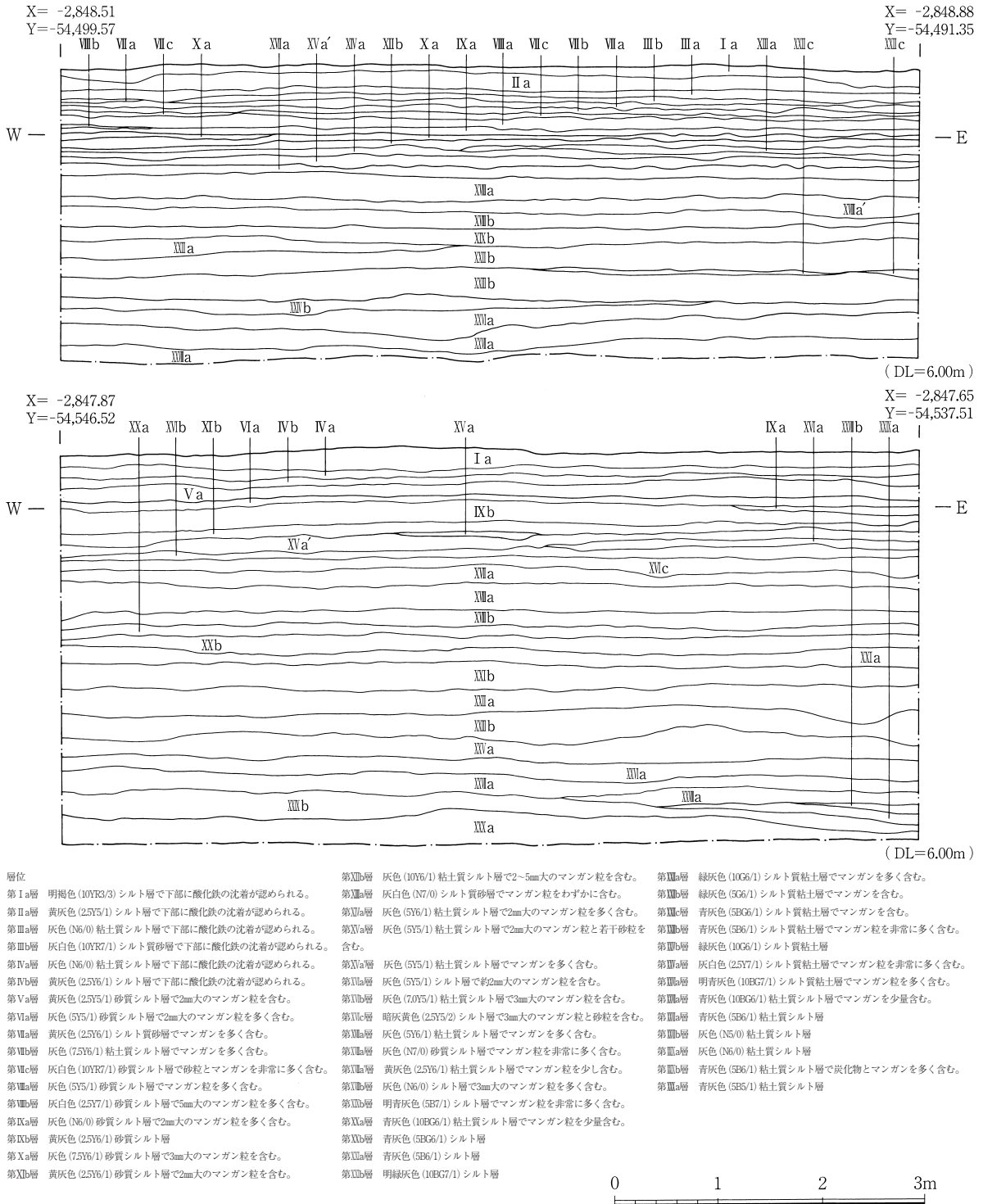
第XXIIIa層は緑灰色(10G6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を多く含み、厚さ9～29cmを測り、調査区東端を除くほぼ全域で認められた。土師質土器が少量出土したが、流れ込みによるものとみられ遺物包含層とは断定できなかった。b層は緑灰色(5G6/1)シルト質粘土層でマンガンを含み、厚さ4～31cmを測り、調査区東端で認められた。c層は青灰色(5BG6/1)シルト質粘土層でマンガンを含み、厚さ4～16cmを測り、調査区東部でのみ認められた。

第XXIIIb層は青灰色(5B6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を非常に多く含み、厚さ14～47cmを測り、調査区の全域で認められた。a層は土壌化しなかったか、削平されたものとみられる。

第XIIIb層は緑灰色(10G6/1)シルト質粘土層で、厚さ9~18cmを測り、調査区東部で認められた。a層は土壌化しなかったか、削平されたものとみられる。

第XIVa層は灰白色(2.5Y7/1)シルト質粘土層でマンガン粒を非常に多く含み、厚さ6~36cmを測り、調査区西部で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第XIIIa層は明青灰色(10BG7/1)シルト質粘土層でマンガン粒を多く含み、厚さ4~30cmを測る。古



- | | | | | | |
|----------|--------------------------------------|---------|--------------------------------------|---------|------------------------------------|
| 第I a層 | 明褐色(10YR3/3)シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIb層 | 灰色(10Y6/1)粘土質シルト層で2~5mm大のマンガン粒を含む。 | 第XIIIa層 | 緑灰色(10G6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を多く含む。 |
| 第II a層 | 黄灰色(2.5Y5/1)シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIIa層 | 灰白色(N7/0)シルト質砂層でマンガン粒をわずかに含む。 | 第XIIIb層 | 緑灰色(5G6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を含む。 |
| 第III a層 | 灰色(N6/0)粘土質シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIIa層 | 灰色(5Y6/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIc層 | 青灰色(5EG6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を含む。 |
| 第III b層 | 灰白色(10YR7/1)シルト質砂層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIIa層 | 灰色(5Y5/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒と若干砂粒を含む。 | 第XIIIb層 | 青灰色(5E6/1)シルト質粘土層でマンガン粒を非常に多く含む。 |
| 第IV a層 | 灰色(N6/0)粘土質シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIIb層 | 灰色(7.0Y5/1)粘土質シルト層で3mm大のマンガン粒を含む。 | 第XIIIb層 | 緑灰色(10G6/1)シルト質粘土層 |
| 第IV b層 | 黄灰色(2.5Y6/1)シルト層で下部に酸化鉄の沈着が認められる。 | 第XIIIc層 | 暗黄褐色(2.5Y5/2)シルト層で3mm大のマンガン粒と砂粒を含む。 | 第XIIIa層 | 灰白色(2.5Y7/1)シルト質粘土層でマンガン粒を非常に多く含む。 |
| 第V a層 | 黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を含む。 | 第XIIIa層 | 灰色(5Y6/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒を含む。 | 第XIIIa層 | 明青灰色(10BG7/1)シルト質粘土層でマンガン粒を多く含む。 |
| 第VI a層 | 灰色(5Y5/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIb層 | 灰色(5Y5/1)粘土質シルト層で2mm大のマンガン粒を含む。 | 第XIIIb層 | 青灰色(10EG6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を少量含む。 |
| 第VI b層 | 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂層でマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIa層 | 灰色(N7/0)砂質シルト層でマンガン粒を非常に多く含む。 | 第XIIIa層 | 青灰色(5E6/1)粘土質シルト層 |
| 第VII b層 | 灰色(7.5Y6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIa層 | 黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を少し含む。 | 第XIIIb層 | 灰色(N5/0)粘土質シルト層 |
| 第VII c層 | 灰白色(10YR7/1)砂質シルト層で砂粒とマンガン粒を非常に多く含む。 | 第XIIIb層 | 灰色(N6/0)シルト層で3mm大のマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIa層 | 灰色(N6/0)粘土質シルト層 |
| 第VIII a層 | 灰色(5Y5/1)砂質シルト層でマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIb層 | 明青灰色(5B7/1)シルト層でマンガン粒を非常に多く含む。 | 第XIIIb層 | 青灰色(5E6/1)粘土質シルト層で炭化物とマンガン粒を多く含む。 |
| 第VIII b層 | 灰白色(2.5Y7/1)砂質シルト層で5mm大のマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIb層 | 青灰色(10EG6/1)粘土質シルト層でマンガン粒を少量含む。 | 第XIIIa層 | 青灰色(5E5/1)粘土質シルト層 |
| 第IX a層 | 灰色(N6/0)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を多く含む。 | 第XIIIb層 | 青灰色(5EG6/1)シルト層 | | |
| 第IX b層 | 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層 | 第XIIIb層 | 青灰色(5E6/1)シルト層 | | |
| 第X a層 | 灰色(7.5Y6/1)砂質シルト層で3mm大のマンガン粒を含む。 | | | | |
| 第XII b層 | 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で2mm大のマンガン粒を含む。 | | | | |

Fig.10 2区北壁セクション図

代の遺物包含層で、調査区の全域で認められた。b層はすべて土壌化したものとみられ、確認できなかった。

第Ⅲa層は青灰色(10BG6/1)粘土質シルト層でマンガンを少量含み、厚さ7～32cmを測る。古墳時代の遺物包含層で、調査区の全域で認められた。b層は灰白色(N7/0)粘土質シルト層で、厚さ10～25cmを測り、1区のみで認められた。

第Ⅲa層は青灰色(5B6/1)粘土質シルト層で、厚さ8～23cmを測り、調査区西端を除くほぼ全域で認められた。b層は灰色(N5/0)粘土質シルト層で、厚さ7～12cmを測り、調査区西部で認められた。

第Ⅲa層は灰色(N6/0)粘土質シルト層で、厚さ8～24cmを測り、調査区の西部で認められ、東へ続くものとみられる。b層は青灰色(5B6/1)粘土質シルト層で炭化物とマンガンを多く含み、厚さ8～28cmを測り、調査区の西部で認められた。

第Ⅲa層は青灰色(5B5/1)粘土質シルト層で、厚さ33cmを測り、調査区の西部で認められ、東へ続くものとみられる。

第Ⅲ層以下は2区の南壁東部で確認した。

第Ⅲa層は灰色(N5/0)シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ14～23cmを測る。b層は明緑灰色(10G7/1)シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ約10cmを測る。

第Ⅲa層は灰色(N6/0)シルト層で、厚さ14～23cmを測る。b層は明緑灰色(10G7/1)シルト層で、厚さ約3cmを測り、ごく一部で認められた。

第Ⅲa層は灰色(N6/0)シルト層で炭化物を含み、厚さ8～21cmを測る。b層は明緑灰色(7.5GY7/1)シルト層で、厚さ約6～14cmを測る。

第Ⅲa層は灰色(N5/0)砂質シルト層で微砂と炭化物を含み、厚さ約7cmを測る。弥生時代の遺物を含むが、一部で認められたのみである。a'層は灰色(N5/0)粘土質シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ約5～16cmを測る。弥生時代の遺物包含層で、調査区の東半で認められた。b層は灰色(N6/0)粘土質シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ約8cmを測り、部分的に認められた。

第Ⅲa層は灰色(10Y6/1)シルト質粘土層で炭化物をわずかに含み、厚さ20～25cmを測る。b層は明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ約5cmを測り、部分的に認められた。

第Ⅲa層は灰色(10Y6/1)砂質シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ7～23cmを測る。b層は灰白色(10Y7/1)粘土質シルト層で炭化物をわずかに含み、厚さ約15cmを測り、部分的に認められた。

第Ⅲa層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)砂質シルト層で炭化物をわずかに含み、確認した部分で厚さ約20cmを測る。b層は明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト層で、厚さ約4cmを測り、部分的に認められた。

(3) 堆積層出土遺物

古墳時代の土師器については、比較的多く出土したため、まず、器形ごとに形態分類を行ったうえで併記する。併せて手づくね土器についても形態分類を行う。

壺

胴部の形態によってA～C類に分類できる。調整は口縁部にヨコナデ調整，胴部にナデ調整を施すが，内面にヘラナデ調整を施すものもみられる。

A類 胴部が丸みを持つもので，口縁部は直線的にのびる。概して小型である。(9・195)

B類 胴部が扁平な球形を呈するもので，口縁部は短い。(55・56・196～199)

甕

胴部の形態が4類，底部の形態が3類，口縁部の形態が2類に大きく分類できる。調整は口縁部にヨコナデ調整，胴部にヘラナデ調整またはナデ調整を施す。また，外面の底部と胴部の境付近には放射状にタタキを施すものもある。

胴部形態

A類 球形(108・109・215～217)

B類 胴部上位に最大径を有し，やや肩が張る形態である。(27・110～114・183・184・218～220)

C類 胴部中位に最大径を有する。(13・14・115～119・185～189・221)

D類 長胴(120～127・190～192)

底部形態

a類 平底

b類 尖底

c類 丸底

口縁部形態

1類 口縁部が頸部からくの字状に屈曲するもので，さらに2類に細分される。

① 口縁部が直線的にのびるもの。

② 口縁部が外反ないし外傾するもの。

2類 口縁部が頸部から緩やかに立ち上がるもので，さらに3類に細分される。

① 口縁部が直線的にのびるもの。

② 口縁部が外反ないし外傾するもの。

③ 口縁部が内湾するもの。

高杯

杯部の形態で3類，脚部の形態で2類に大きく分類できる。また，杯部と脚部の接合方法には二つの手法がみられた。調整は口縁部にヨコナデ調整，杯底部はナデ調整または板ナデ調整を施す。脚部は外面にナデ調整またはヘラナデ調整，内面にヘラ削りとナデ調整を施す。

杯部形態

A類 口縁部が杯底部から屈曲するもので，口縁部形態には外反するもの，直線的にのびるもの，直線的にのびた後外反するものがある。(15・130～132・222～234)

B類 口縁部が杯底部から明瞭な綾を持たずに立ち上がるもので，口縁部形態には外反するもの，直線的にのびるものがある。(16・235～239)

C類 椀状を呈するもので，口縁部は杯底部から内湾して立ち上がる。概して小型である。(134・240～243)

A・B類は杯底部と口縁部に接合痕がみられるものが多い。

脚部形態

a類 裾部が脚部から屈曲するもので、裾部の形態には4類がみられる。

1. 直線的にのびるもの。(135～137・193・247～253)
2. 外反するもの。(254・255)
3. 水平にのびるもの。(256～258)
4. 内湾するもの。(138)

b類 ラップ状に開くもので、脚部と裾部に明瞭な綾を持たない。(140・259～261)

接合方法

A手法 脚部を杯部に接合するもので、杯内面まで至るものも見られる。

B手法 円孔の空いた杯底部に脚部を差し込むもので、後で円孔に粘土塊を充填する。

椀

体部と底部の形態により3類に大きく分類できる。全面にナデ調整を施し、底部内面にヘラナデ調整を施すものもみられる。底部外面はタタキを施すものも一部にみられる。

A類 半球形を呈するもの(20・142～150・262～267)で、口縁部の形態によりさらに3類に細分される。

a類 直線的にのびるもの。

b類 短く外傾するもの。

c類 内湾するもの。

B類 尖底または平底を呈するもので、概して器高が高い。(21・151・268)

C類 脚が付くもの。(152)

手づくね土器

体部の形態により4類に分類できる。全面にナデ調整を施し、内面は特に強く施す。

A類 小型で、丸底を呈するもの。(22・153～155・269～271)

B類 平底で胴部は丸みを有し、短い口縁が付き壺形を呈するもの。(23・272)

C類 中型で、平底を呈するもの。(24・156)

D類 やや大型で、器高が高いもの。(157～159)

第Ⅷa層出土遺物

土師質土器 (Fig.11-1)

1は杯で、底径10.0cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。調整は器面が著しく磨滅するため不明である。色調は内外面とも淡黄色を呈する。

第Ⅷb層出土遺物

須恵器 (Fig.11-2)

2は皿で、口径16.6cm、底径10.7cm、器高2.2cmを測る。口縁端部は内側に折り返し、丸く仕上げる。

体部は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも灰色を呈する。

第XIIa層出土遺物

須恵器 (Fig.11-3)

3は甕の底部とみられるもので、外面は底部に回転ヘラ削り調整、胴部に回転ナデ調整を施し、内面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外面の一部には自然釉が付着する。色調は、外面が灰色、内面が灰白色を呈する。

銅製品 (Fig.11-4)

4は銅製の丸靱で、縦2.5cm、横3.8cm、厚さ0.8cmを測る。垂孔は細長形で、縦0.5cm、横2.5cmを測る。裏金具留は上部に3カ所、垂孔の横に2カ所の計5カ所にみられる。

第XIIIa層出土遺物

土師器 (Fig.11-5)

5はほぼ完形の甕で、口径14.3cm、胴径16.7cm、器高20.1cmを測る。Bb1類で、外面胴部下半にハケ調整を施す。内底面には煤の付着がみられる。胎土には5mm大の礫をわずかに含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし黄灰色、内面がにぶい黄橙色ないし黒色を呈する。

須恵器 (Fig.11-6~8)

6は皿で、口径13.3cm、底径8.3cm、器高2.0cmを測る。口縁部はやや器壁が薄く、端部は内面に小さく折り返す。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも白灰色を呈する。

7は高杯の脚部で、底径8.9cmを測る。器高は低く、ハの字状に開き、裾部は屈曲し短く水平にのび、端部を丸く仕上げる。調整は器面が著しく磨滅するため不明である。色調は、外面が灰色、内面が灰黄色を呈する。

8は提瓶で、胴部外面は回転ヘラ切り、胴部内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。口頸部には回転ナデ調整とナデ調整を施す。胴部と口縁部の一部には自然釉が付着し、色調は、外面が灰色ないし暗灰色、内面が

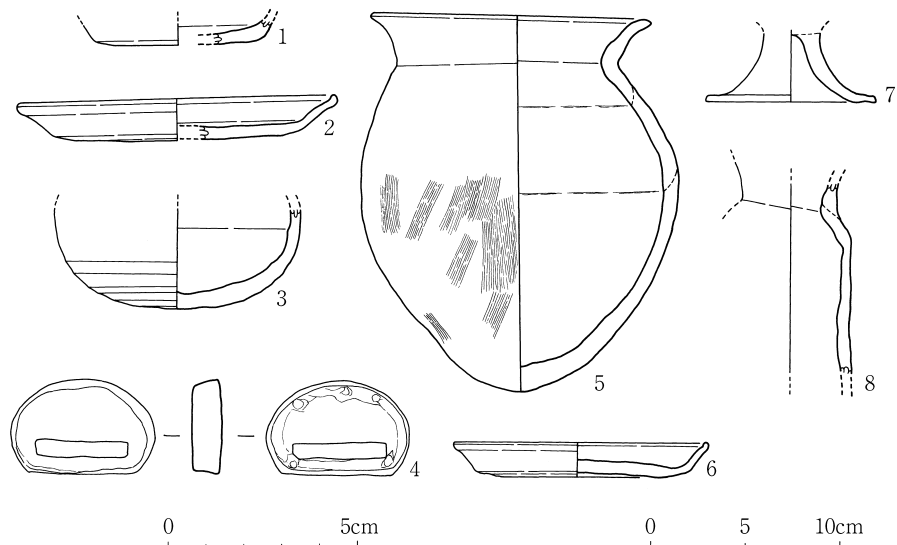


Fig.11 第XIIa・XIIIb・XIVa・XVla層出土遺物実測図(須恵器・土師器・土師質土器ほか)

灰色を呈する。

第Ⅲa層出土遺物

土師器 (Fig.12-9~21)

9は壺で、口径4.8cm、胴径7.7cm、器高7.9cmを測る。A類で、胴部は球形を呈し、口縁部は短くほぼ真上に立ち上がる。胎土には砂粒と礫を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし灰色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

10~14は甕で、10~12の底部は、10・11がb類、12がc類である。10は胴部内面にはヘラナデ調整とナデ調整を施す。色調は、外面が灰黄色ないし灰色、内面が灰黄褐色を呈する。11は底部の一部を欠損する。器面にはナデ調整または板ナデ調整を施し、外面には非常に凹凸が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。12は比較的丁寧なつくりで、内面には板ナデ調整とナデ調整、底部にはヨコ方向の板ナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないし灰色、内面が明赤褐色ないし灰色を呈する。13はCc類で、胴部内面に板ナデ調整がわずかに残る。色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。14はC1類で、口径19.6cm、胴径20.6cmを測り、口縁部は直線的にのびる。色調は、外面が灰褐色ないしにぶい橙色、内面はにぶい橙色を呈する。

15~18は高杯である。15はA類で、口径18.8cmを測る。口縁部は外反し、脚部は裾部を欠損する。接合方法はA手法である。調整は器面が著しく磨滅するため不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。16はB類で、口径16.2cmを測る。口縁部は直線的にのびる。調整は器面が著しく磨滅するため不明である。色調は、外面が灰黄褐色ないし橙色、内面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。17は脚部で、底径10.5cmを測る。a1類で、器高は低い。接合方法はB手法で、杯部との接合部で剥離する。色調は内外面とも橙色を呈する。18は脚部で、底径11.0cmを測る。a4類で、器壁が厚い。脚柱部内面にはヘラ削りがわずかに残り、裾部内面はヘラナデ調整がみられる。胎土には若干礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。

19は小型丸底鉢で、口径15.7cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はヨコ方向、内面はタテ方向のヘラ磨きを施す。外面には煤が付着する。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい褐色ないし橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

20・21は椀である。20はAa類で、口径10.9cm、器高5.0cmを測る。底部外面にはタタキの後にナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色ないし灰黄褐色を呈する。21はB類で、口径12.0cm、器高6.5cmを測る。内面はヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.12-22~24)

22はA類で、口径8.0cm、器高1.8cmを測る。内面には指頭圧痕が残る。色調は、外面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。23はB類で、口径6.0cm、底径3.4cm、器高5.3cmを測る。口縁部は胴部から短く上方にのびる。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色ないし橙色を呈する。24はC類で、口径8.5cm、底径6.3cm、器高6.3cmを測る。口縁部は内湾する。器面にはナデ調整を施す。色調は、外面が灰黄褐色、内面が灰黄色ないし灰色を呈する。

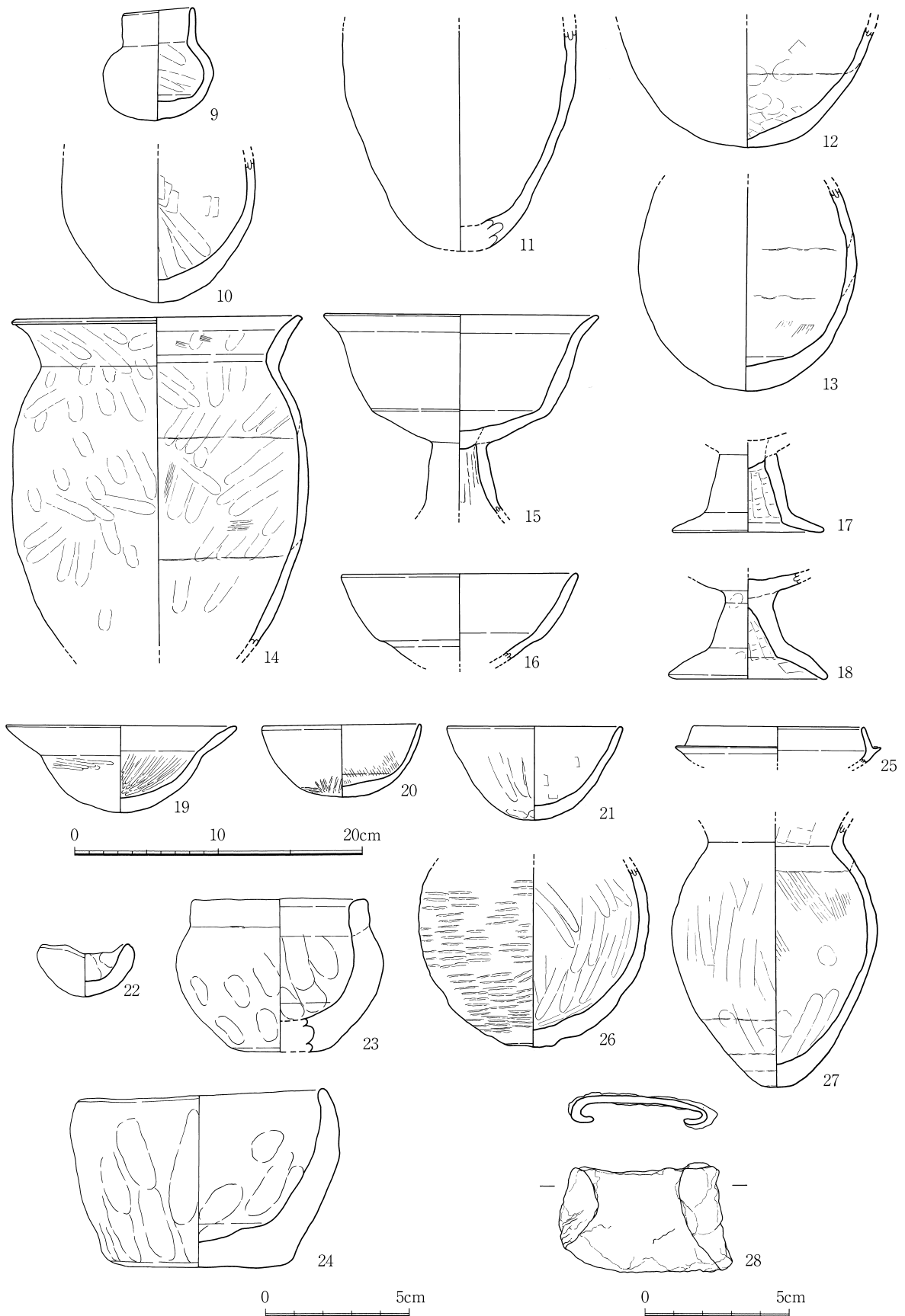


Fig.12 第ⅢⅡa・ⅢⅡa・ⅢⅡb層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師器ほか)

須恵器 (Fig.12-25)

25は杯で、口径11.8cm、受部径14.4cm、立ち上がり高1.5cmを測る。立ち上がりは内傾してのび、端部は丸く仕上げる。受部は斜め上方を向き、端部をやや細く仕上げる。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰色を呈する。

第Ⅲa層出土遺物

弥生土器 (Fig.12-26)

26は甕で、胴部から底部にかけて残存し、胴径16.0cm、底径3.5cmを測る。胴部は丸みを帯び、球形を呈する。胴部外面にはヨコ方向のタタキ目、内面にはナデ調整を施す。胎土は2mm以下の赤色チャートと長石を少量含む。(小島)

土師器 (Fig.12-27)

27は甕で、胴径14.2cm、底径2.0cmを測る。Bb1類で、口縁部は直線的にのびる。胴部外面には煤が付着し、色調は内外面ともにぶい橙色ないし黒色を呈する。

第Ⅲb層出土遺物

鉄製品 (Fig.12-28)

28は小型の鉄製鋤先で方形板刃先を有し、刃幅6.0cmを測る。

第Ⅲa層出土遺物

弥生土器 (Fig.13-29)

29は下胴部を残し、底部が欠損する甕である。外面には粗いタタキ目を残し、下方には煤が付着する。内面にはナデ調整と部分的にタテ方向のヘラナデ調整を施す。胎土には3mm大の赤色チャートと砂粒を含む。(小島)

第Ⅲa'層出土遺物

弥生土器 (Fig.13-30~37)

30は壺肩部の破片で、上から櫛描直線文、楕円浮文、上下二段の列点文をそれぞれ施す。楕円浮文の真中にはヘラ状工具による押圧を加える。

31~36は甕である。31は口縁部に幅約1.2cmの粘土帯を貼付し、口縁端部に刻みを有するもので、頸部から胴部にかけて粗雑な櫛描波状文と直線文を交互に施す。胴部内面には強い板ナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は橙色ないし灰黄褐色を呈する。胎土は他の土器に比べ精緻である。32は列点文が施された肩部の破片で、色調は内外面とも明褐灰色を呈する。33は口径18.2cmを測り、口縁部が大きく外反する。口縁部には幅約2cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を施す。口縁端部は平面をなす。頸部外面には櫛描直線文が巡る。34は頸部から口縁部の破片で、口径18.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、内外面にヨコナデ調整を施す。35は底部から下胴部の破片で、底径6.4cmを測る。平底の底部は外底面中央部を凹ますことにより上げ底状となる。外面はナデ調整、内面は

ヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。36は平底の底部で、外面にはハケ調整、内面にはヘラナデ調整を施す。

37は鉢で、口径14.8cmを測る。口縁部は体部から小さく屈曲し、短く上方を向く。口縁部外面に幅約1.2cmの粘土帯を貼付する。色調は外面が灰白色、内面がにぶい黄橙色を呈する。胎土は5mm大の長石と砂粒を含む。(小島)

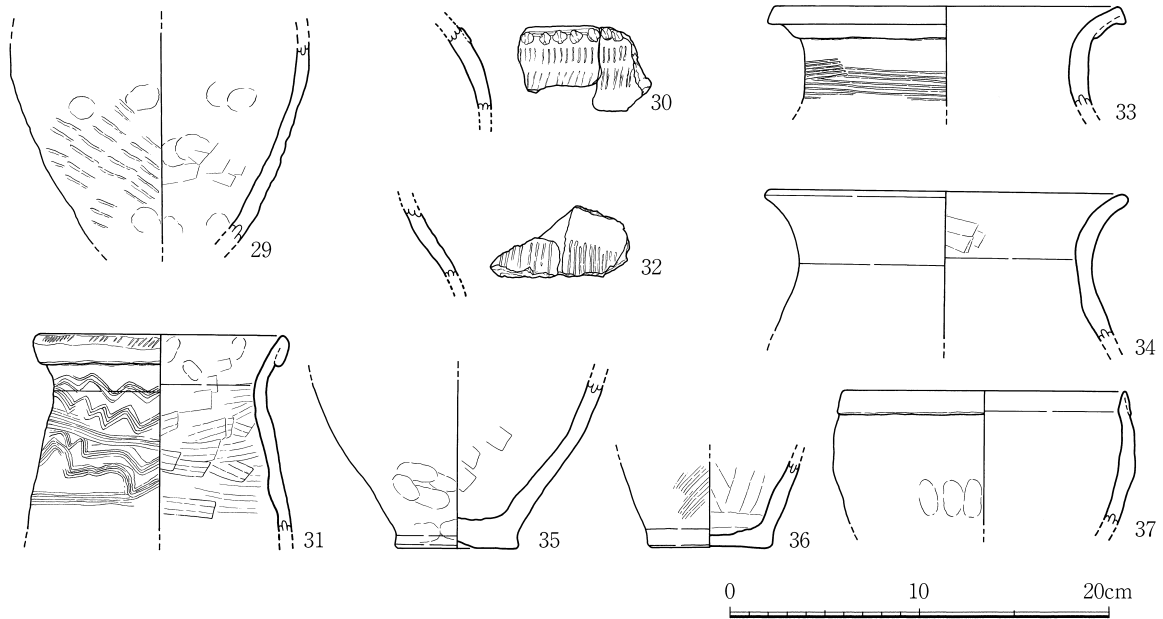


Fig.13 第Ⅲa・Ⅲa'層出土遺物実測図(弥生土器)

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

祭祀関連遺構

SF - 1 (付図1)

調査区の東部で検出した土器集中で、東西約10m、南北約3mの範囲に壺と甕がまとまって出土した。ここからは祭祀遺物とみられるものは出土していないが、概して遺物の残りが良く、比較的まとまって出土していることから、何らかの祭祀に関連する遺構ではない

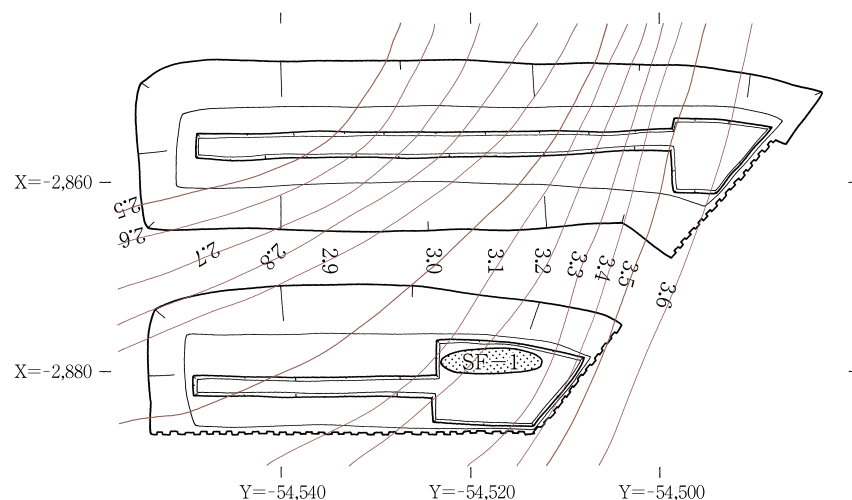


Fig.14 弥生時代遺構配置図(S=1/800)

かと考えられる。復元図示できたのは弥生土器15点(38~52)であった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.15-38~52)

38~41は壺である。38は口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付するもので、口径が11.6cm, 器高25.8cm, 胴径17.5cm, 底径6.4cmを測る。底部はやや上げ底状の平底で、内面には接合部を中心に指

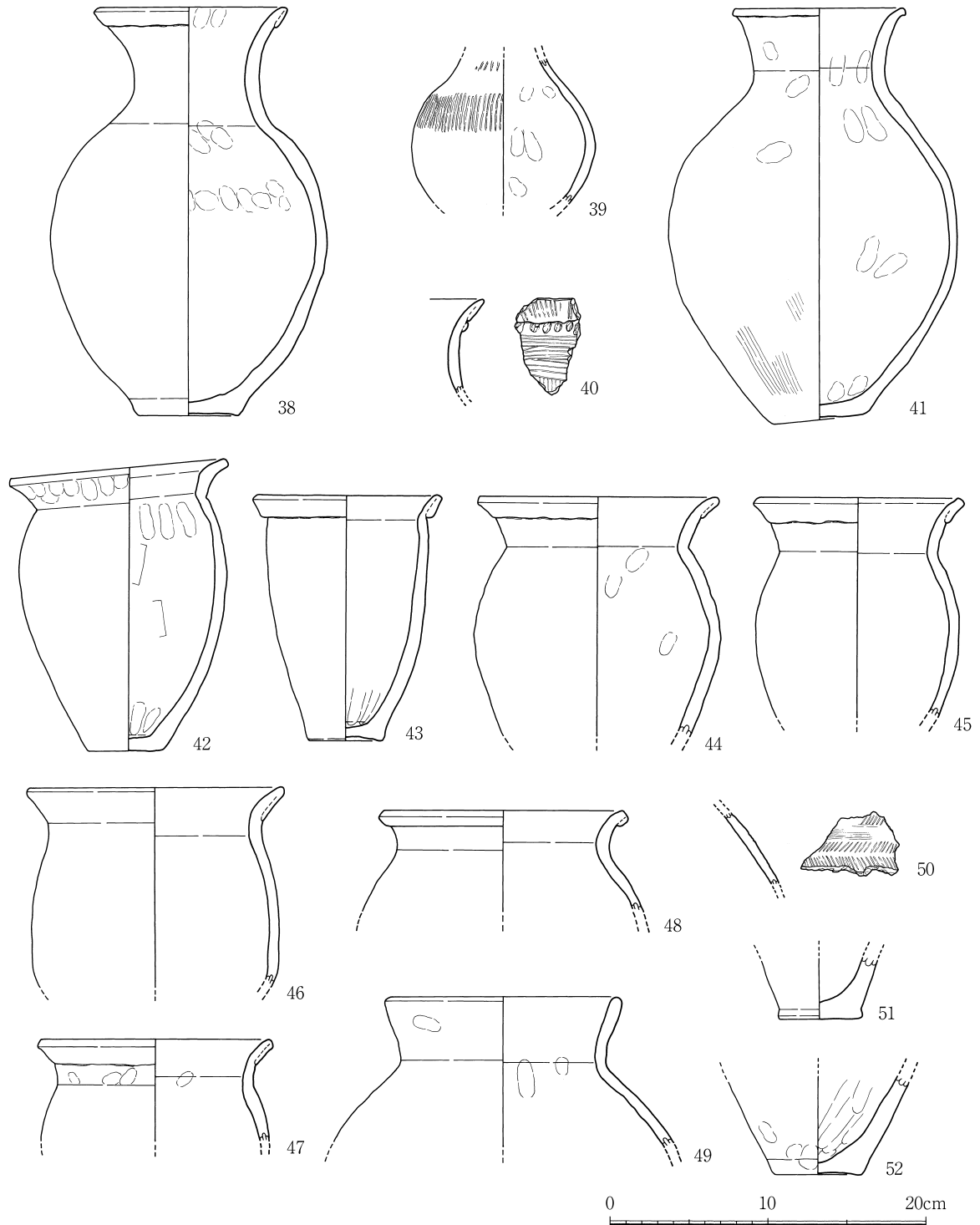


Fig.15 SF-1出土遺物実測図

押えの痕が残存する。色調は内外面ともに明褐灰色ないし灰白色を呈し、胎土には赤色チャートを含む。39は胴部から頸部にかけて残存するもので、胴径9.6cmを測る。外面頸部下方と胴部には列点文をそれぞれ施す。内面には接合部を中心に指押えの痕が残る。色調は、外面が明褐灰色、内面が灰色を呈する。40は口縁部外面に幅約1.4cmの粘土帯を貼付するもので、粘土帯の下には円形浮文を貼付し、さらにヨコ方向とタテ方向の櫛描直線文を施す。41は約3/4が残存しており、口径10.6cm、器高26.3cm、胴径18.2cm、底径5.8cmを測る。底部は上げ底状の平底で、胴部は倒卵形をなし最大径が中位にある。口頸部は胴部から緩やかに上がり、やや外反し、口縁端部を若干肥厚する。胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。胎土は砂粒を多量に含む。

42・43は甕である。42は約4/5が残存し、口径13.6cm、器高18.5cm、胴径13.2cm、底径4.8cmを測る。口縁部には幅約2.6cmの粘土帯を貼付し、外面には指押えの痕が残る。器面にはナデ調整を施し、部分的にヘラナデ調整と指頭圧痕が残る。また、外面には煤が付着する。43は小型の甕で、口径11.4cm、器高15.5cm、胴径8.4cm、底径4.5cmを測り、胴径は口径より下回る。口縁部外面に幅約1.6cmの粘土帯を貼付する。口縁部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整、内面にはナデ調整を施す。底部はやや上げ底を呈する。胎土には長石、チャートを多量に含む。44～46は口縁部から胴部にかけて残存する甕である。44は口縁部に幅約1.7cmの粘土帯を貼付するもので、口径15.0cmを測る。胎土には5mm大の砂粒を含み、胴部外面下方には煤が付着する。45は幅約1.7cmの粘土帯を貼付し、口径11.0cm、胴径10.6cmを測り、わずかに口径が胴径を上回る。口縁部の内外面には指頭圧痕が残る。46は45と同様に口径値が胴径値をわずかに上回るもので、口径16.0cm、胴径15.8cmを測る。口縁部には幅約2.4cmの粘土帯を貼付する。胎土は4mm大の長石を主体とする小礫を含む。47～49は口縁部から頸部にかけて残存する甕である。いずれも外面が灰褐色を呈し、胎土に2mm大の砂粒を多量に含む。47は口縁部に幅約1.7cmの粘土帯を貼付するもので、口径は14.5cmを測る。胴部外面には煤が付着する。48は口縁部に幅約0.8cmの粘土帯を貼付するもので、口径15.0cmを測る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。49は口縁部に粘土帯を部分的に貼付するもので口径15.3cmを測る。口縁部は胴部から外上方に立ち上がる。

50は壺肩部の破片で、櫛描直線文、綾杉文状の刺突文が巡る。器壁は比較的薄く、胎土には3mm大の長石を含む。

51・52は甕の底部である。51は平底で、底径5.3cmを測り、胴部は底部から外上方に立ち上がる。底部内面に指頭圧痕、胴部外面にはナデ調整を施す。色調は、外面

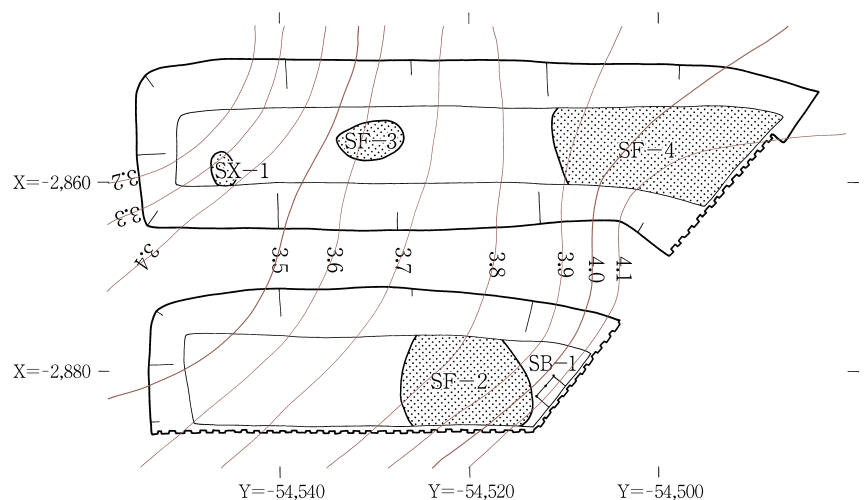


Fig.16 古墳時代遺構配置図(S=1/800)

が褐灰色、内面が明褐灰色を呈する。52は上げ底状の底部で、底径5.4cmを測る。胴部は底部から外上方に上がる。胴部外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整を施す。色調は、外面が黄灰色ないし灰黄色、内面が灰色を呈する。

(2) 古墳時代 掘立柱建物跡

SB - 1 (Fig.17)

調査区南東部で検出した掘立柱建物跡で、東側は調査区外へ続く。東西棟建物とみられ、西妻の梁間2間(2.80m)、柱穴3個を検出した。柱間寸法は1.40m等間隔で、棟方向はN-50°-Wを示す。柱穴は不整形を呈し、径24~38cmを測り、最も遺存状態が良好な柱穴はⅢa層で確認できた。柱穴はすべて柱根が残存しており、柱径は9~23cmを測る。樹種はすべてアワブキ属アワブキ科であり、放射性炭素年代測定の結果、年代値は約1,600年前を示しており、暦年代で4世紀中頃とみられる。埋土はP-2・3が灰色砂質シルトで微砂と炭化物を含み、P-1は2層に分かれ、上層が灰白色シルト、下層が灰色砂質シルトで微砂と炭化物を含んでいた。出土遺物にはP-2から流れ込みとみられる弥生土器の細片1点みられたが、図示できたのはP-2(53)、P-3(54)の柱根のみである。

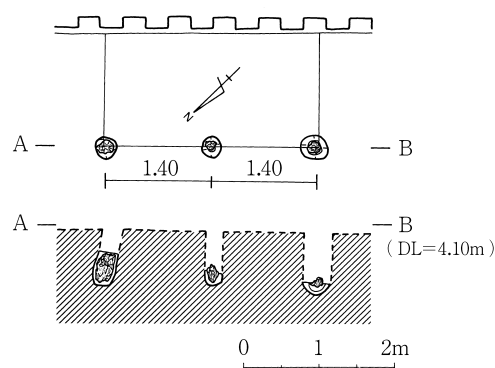


Fig.17 SB-1

木製品 (Fig.18-53・54)

53はP-2の柱根で、残存長25.2cmを測り、表皮が残存する。約1/2が残存し、径約9.0cmを測るものとみられ、基部を細く加工する。54はP-3の柱根で、径16.2cm、残存長37.3cmを測り、表皮が残存し、基部を平らに加工する。

祭祀関連遺構

SF - 2 (付図2)

調査区の南東部で検出した土器集中で、北側と南側は調査区外へ続くものとみられる。東西14m、南北9mの範囲に遺物が集中し、検出面の標高は3.702(西)~4.130(東)mを測り、緩斜面に位置する。出土遺物には土製円板や石製模造品、白玉などの祭祀遺物がみられることから祭祀関連遺構と捉えることができる。また、畿内からの搬入品も3点出土している。遺物は非常に密集し、かつ比較的広範囲に拡

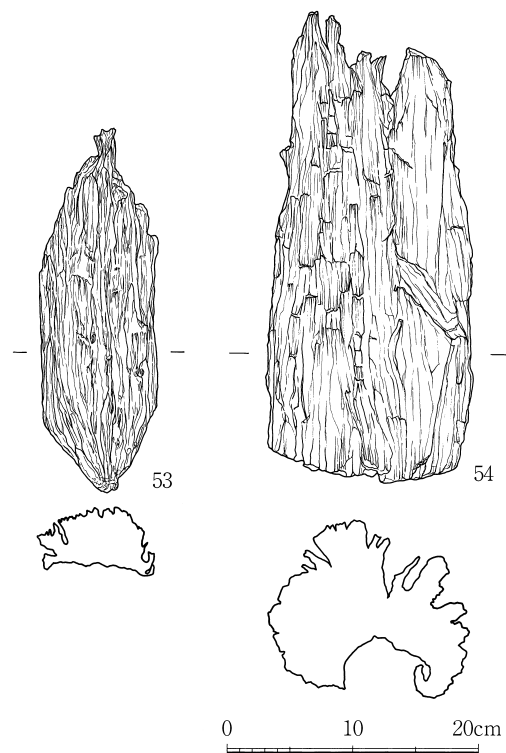


Fig.18 SB-1出土遺物実測図

がっていることや出土した須恵器には型式差が看取されることなどから1度の祭祀とは捉え難く、比較的長期間に互って継続的に行われたものと推察される。出土遺物では土師器105点(55~159)、須恵器6点(160~165)、土製模造品2点(166・167)、石製模造品10点(168~177)が復元図示できた。これらの内訳は須恵器が5%、土師器が95%で、土師器の中では甕が最も多く、69%を占める。

出土遺物

土師器 (Fig.19~28-55~152)

55~57は壺で、55・56はB類である。55は胴部が残存するもので、胴部上位に最大径を有し、胴径14.3cmを測る。器高が低く、胴部は

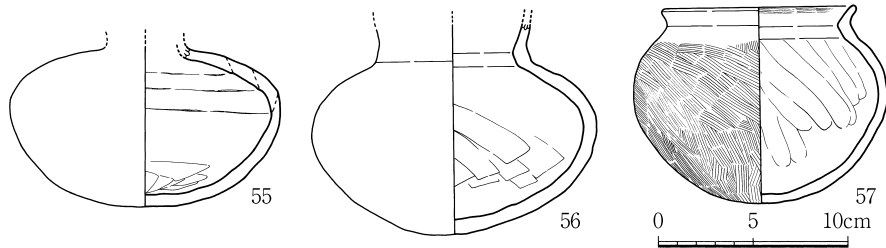


Fig.19 SF-2出土遺物実測図1

扁平な球形を呈し、頸部は非常に細く絞まる。底部内面にはヘラナデ調整を施し、外面は赤色塗彩される。色調は、外面がにぶい橙色ないし暗灰色、内面がにぶい橙色を呈する。56は口縁部を欠くもので、胴部中位に最大径を有し、胴径15.0cmを測る。底部は尖底で、頸部は胴部から屈曲し、上方に立ち上がる。胴部外面はナデ調整で、内面はヘラナデ調整の後にナデ調整を加える。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないし灰色を呈する。57はほぼ完形の短頸壺で、口径10.0cm、胴径13.4cm、器高10.4cmを測る。胴部上位に最大径を有し、底部は丸底である。口縁部はくの字状に屈曲し、短くのび、端部を丸く仕上げる。調整は、胴部外面が斜め方向の細かいハケ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施す。畿内からの搬入品とみられ、胎土には石英、長石を含み、色調は内外面ともににぶい赤褐色ないし黒褐色を呈する。

58~129は甕である。58~84は口縁部が残存し、内58~73は口縁部がくの字状に屈曲する1類である。さらに58~65は口縁部が直線的にのびるもので、口縁部を肥厚し端部を丸く仕上げるものと外傾する面をなすものがある(1①類)。58は口径11.8cmを測り、内外面ともににぶい橙色を呈する。59は口径14.0cmを測り、外面がにぶい褐色ないしにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。60は口径19.0cmを測り、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。61は口径19.2cmを測り、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。62は口径19.6cmを測り、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないし灰褐色を呈する。63は口径20.8cmを測り、内外面とも橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。64は口径14.0cmを測り、外面が橙色、内面が橙色ないしにぶい褐色を呈する。胎土には礫を非常に多く含む。65は口径15.2cmを測り、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

66~73は口縁部が外傾ないし外反するもので、口縁端部を細く仕上げる(1②類)。66は器壁が非常に薄いもので、口径11.4cmを測る。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい褐色、内面がにぶい黄褐色を呈する。67は口径15.7cmを測り、外面がにぶい橙色ないし橙色、内面がにぶい橙色を呈する。68は口径15.4cmを測り、外面が橙色ないし暗灰黄色、内面がにぶい褐色を呈する。口縁部外面の一部には煤が付着する。69は口径13.8cmを測り、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい褐色

を呈する。70は口径15.4cmを測り、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。胎土には礫を多く含む。71は口径17.7cmを測り、外面がにぶい橙色ないし黄灰色、内面が橙色ないしにぶい橙色を呈する。72は口径18.3cmを測り、外面がにぶい黄橙色、内面が褐灰色を呈する。73は口径18.1cmを測り、外面がにぶい黄橙色、内面が褐灰色を呈する。

74~84は頸部から緩やかに立ち上がる2類で、74~76は口縁部が直線的にのびる(2①類)。74は小型で、口径11.5cmを測り、口縁部は粗雑に貼付けられ指頭圧痕が明瞭に残る。胴部内外面ともハケ調整を施し、外面には煤が付着する。色調は内外面ともにぶい褐色ないし黒色を呈する。75は口径

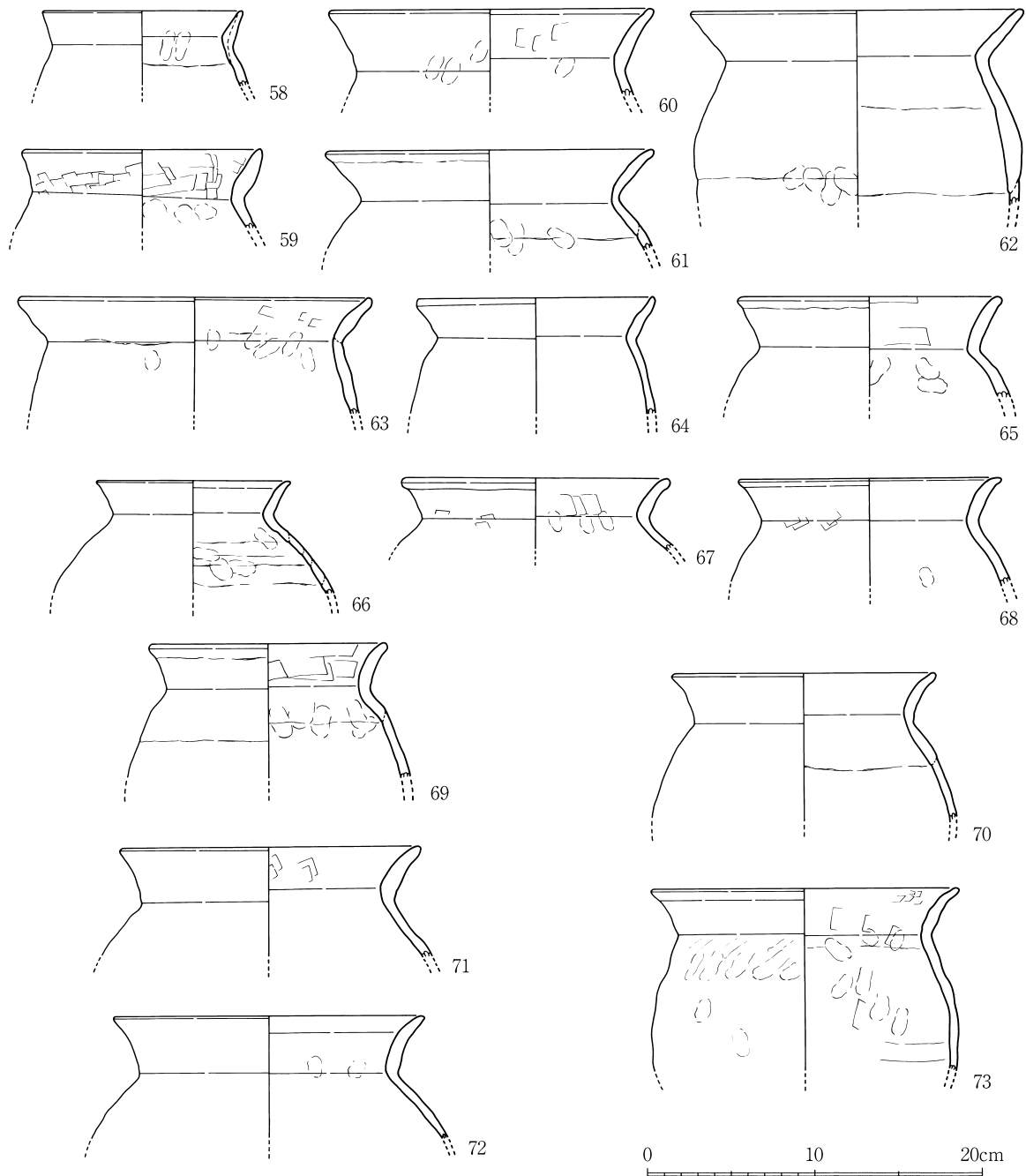


Fig.20 SF-2出土遺物実測図2

15.0cmを測り、内外面ともにぶい橙色を呈する。76は口径14.4cmを測り、内外面ともにぶい橙色を呈する。胎土には礫を含む。

77～82は口縁部が外反するものである(2②類)。77は口径15.2cmを測り、外面が橙色ないしにぶい橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。78は口径14.6cmを測り、外面が灰黄褐色ないし黄灰色、内面がにぶい黄橙色を呈する。胎土には砂粒を非常に多く含む。79は胴部が残存するもので、胴部はやや肩が張る。口径14.9cm、胴径18.2cmを測り、胴部外面はヘラナデ調整の後に丁寧なナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。80も胴部が残存するもので、口径15.3cm、胴径18.8cmを測る。色調は内外面とも橙色を呈する。81も胴部が残存するもので、口径14.9cm、胴径17.4cmを測る。胴部は肩が張らず、長胴になるものとみられる。色調は内外面とも橙色を呈する。82は口径

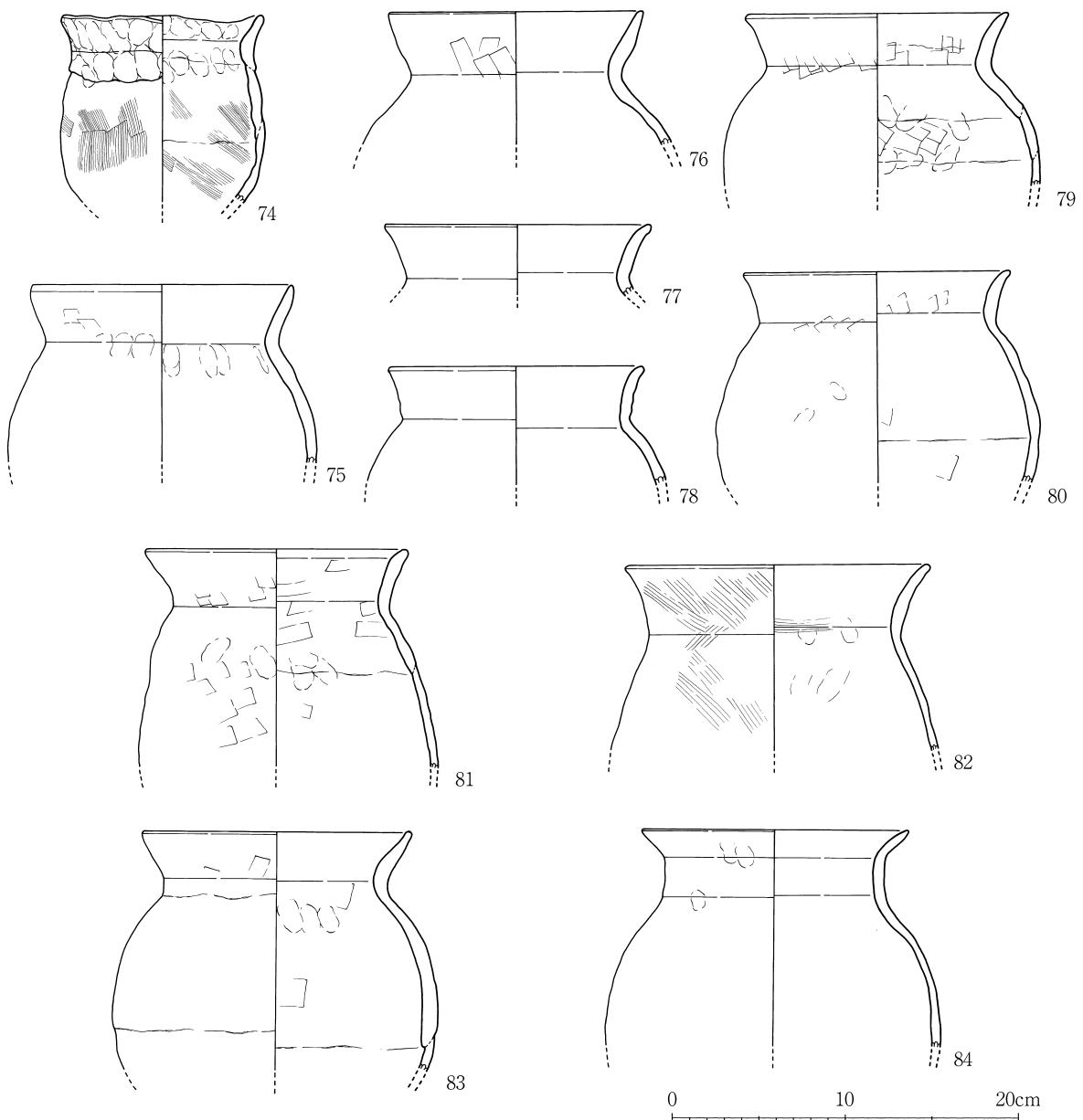


Fig.21 SF-2出土遺物実測図3

17.2cmを測り、外面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。

83は2③類で、口径15.4cm、胴径18.8cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部を細く仕上げる。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

84は直立する頸部から口縁部が外傾するもので、口径15.2cmを測る。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

85～107は底部で、85・86は平底を呈するa類である。85は小型のもので、底径4.7cmを測る。器壁の厚い底部から胴部は内湾して立ち上がる。比較的丁寧な調整で、底部外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整の後にナデ調整、内面にはハケ調整を施す。色調は、外面がにぶい褐色ないし褐灰色、内面がにぶい褐色ないし黒色を呈する。86は底径5.3cmを測り、器壁の厚い底部から緩やかに立ち上がる。外面はナデ調整で、外底面にはタタキ目が残る。内面はナデ調整で、わずかにヘラナデ調整が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

87～95は底部を細く仕上げ尖底になるb類である。87は小型のもので、胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。88は底部の器壁が厚いもので、内面はヘラナデ調整の後にナデ調整を加える。胎土は礫をほとんど含まず比較的精良で、色調は、外面が橙色ないし灰色、内面が橙色ないし灰黄色を呈する。89も底部の器壁が厚く、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面

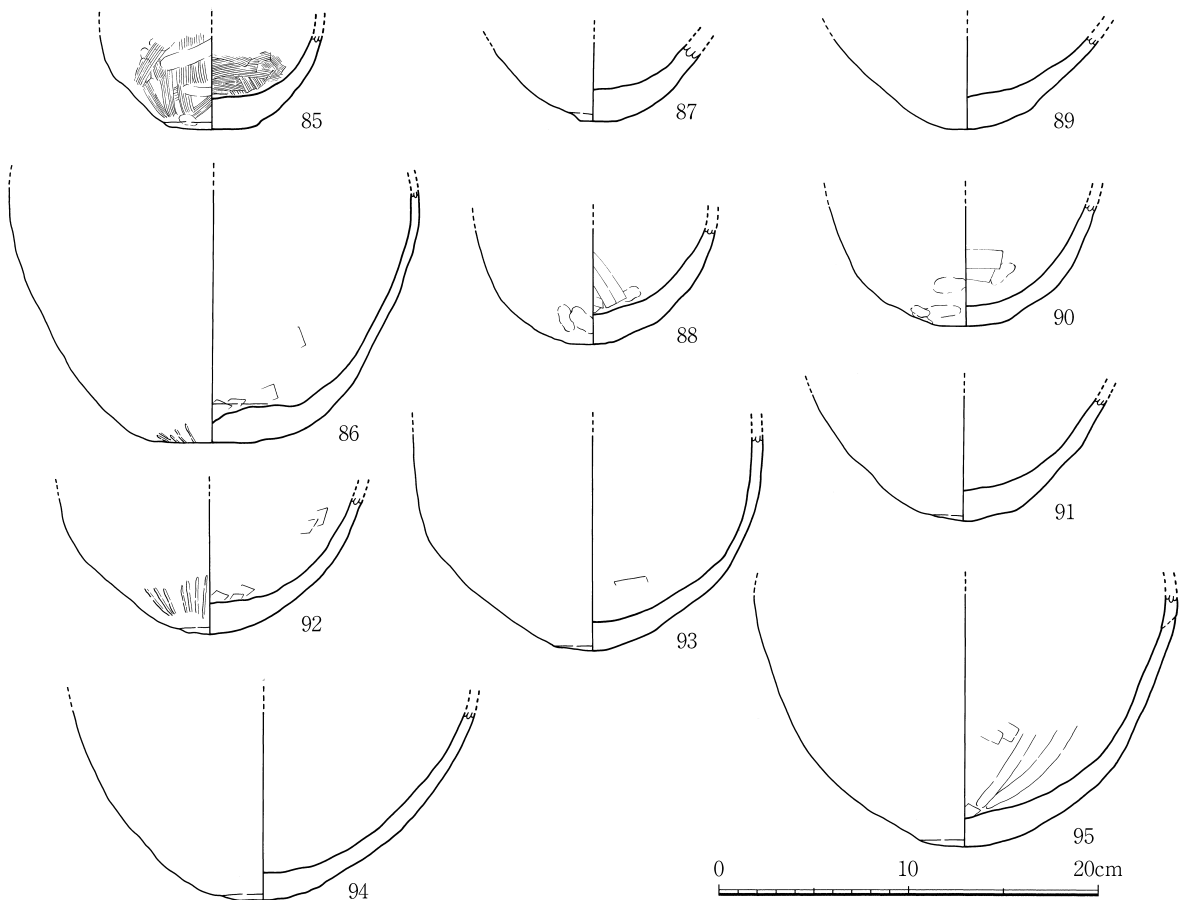


Fig.22 SF-2出土遺物実測図4

が灰黄色を呈する。90も底部の器壁の厚いもので、外面にはナデ調整、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が灰色ないし灰黄色、内面が橙色を呈し、外面には煤が付着する。91も底部の器壁が厚いもので、内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には若干礫を含む。92も底部の器壁が厚く、底部外面にはタタキ目が残る。色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。93は胴部が残るもの、内外面ともにぶい橙色を呈する。94は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰白色を呈する。調整は器面が著しく磨滅するため不明である。95は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

96～107は底部ないし底部と下胴部が残存するもので、底部は丸底をなすc類である。96はやや小型で、外面にはタタキ、内面にはヘラナデ調整を施し、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。97は底部の器壁が厚いもので、底部外面にはタタキ目が残る。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が褐灰色を呈する。98は、外面がナデ調整、内面がヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし灰黄色、内面がにぶい褐色を呈する。99は、外面が灰白色、内面は灰色を呈する。100は底部外面にタタキ目が残るもので、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面が暗灰色な

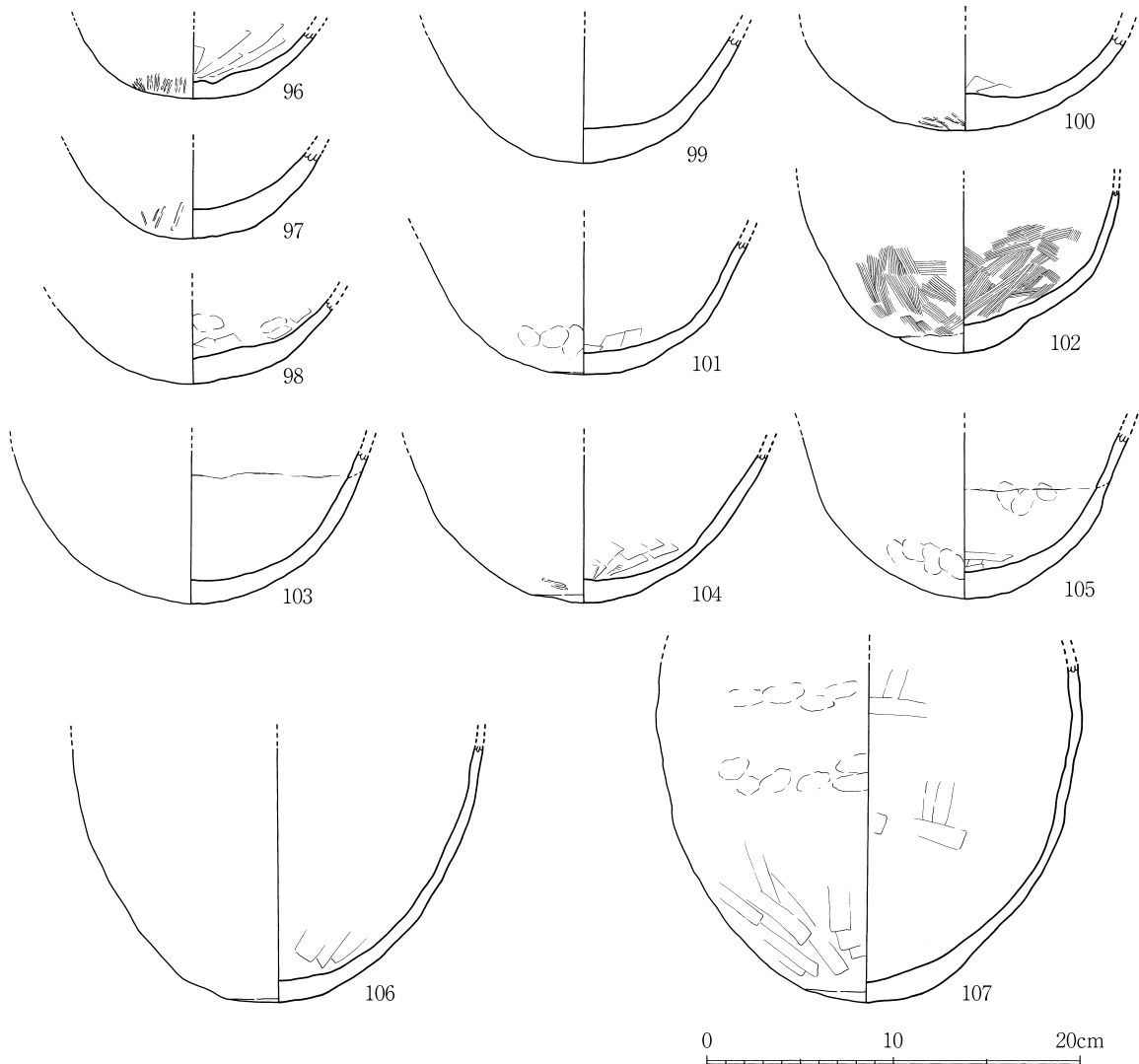


Fig.23 SF-2出土遺物実測図5

いし灰黄色を呈する。101は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面が灰黄色ないしにぶい橙色を呈し、胎土には3mm大の礫を多く含む。102は底部に粘土の接合痕が残るもので、内外面ともハケ調整を施す。色調は、外面が褐灰色ないしにぶい橙色、内面がにぶい褐色ないし黒色を呈する。103は胎土に礫を多く含むもので、色調は内外面ともにぶい橙色ないし灰色を呈する。104は底部外面にタタキ目がわずかに残るもので、内面にはヨコ方向のヘラナデ調整とナデ調整を施す。色調は内外面とも灰褐色ないし褐灰色を呈する。105は底部の器壁が厚いもので、内面にはヘラナデ調整を密に施す。胎土には礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面が褐灰色ないしにぶい橙色を呈する。106は外面に成形時の凹凸が残るもので、外面にはナデ調整、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないし灰黄色、内面が灰黄色ないし暗灰色を呈する。107は外面に成形時の指押えの痕が残るもので、内外面ともヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし黒色、内面がにぶい橙色を呈する。

108～129は胴部の形態がわかるもので、108・109は胴部が球形を呈するA類である。108はAc2類で、胴径18.3cmを測り、底部は器壁が厚く、底部外面にはタタキの後にナデ調整を施し、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面が橙色ないしにぶい橙色を呈する。109は全体の形状が復元できるもので、Ac2②類に分類でき、口径14.6cm、胴径21.0cm、器高20.7cmを測る。胴部外面にはヨコ方向のタタキの後に丁寧なナデ調整、胴部内面にはヨコ方向のヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土には礫を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

110～114は、最大径が胴部上位にあるもので、肩が張るB類に当たる。110はB1①類で、口径11.5cmを測り、内面には口縁部接合痕が明瞭に残る。胎土には礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし橙色、内面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。111はB2①類で、口径15.4cmを測り、口縁部にはヘラナデ調整の後にヨコナデ調整、胴部にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色ないしにぶい褐色を呈する。112はB2①類で、口径14.2cmを測り、胴部内面はハケ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。113はBb類で、底部外面にはタタキ目が残り、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。114はほぼ完存するもので、Bb2類に当たり、口径15.0cm、胴径20.0cm、器高24.3cmを測る。口縁部にはヘラナデ調整の後にヨコナデ調整、他はヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面がにぶい橙色を呈する。

115～119は胴部中位に最大径を有するもので、C類に当たる。115はCb類で、胴径18.7cmを測る。内外面ともにヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし橙色、内面がにぶい橙色を呈する。116はCb類で、胴径21.3cmを測る。外面にはハケ調整、内面にはハケ調整とヘラナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。117はCc類で、胴径15.2cmを測り、外面にはハケ調整の後にナデ調整、内面にはハケ調整の後にヘラナデ調整を施す。また、胴部外面には煤が付着する。胎土には礫をほとんど含まず、色調は、外面がにぶい褐色ないし暗灰色、内面がにぶい褐色ないし黒褐色を呈する。118は口縁部から下胴部にかけて残存し、C1類に当たり、口径16.3cm、胴径19.9cmを測る。色調は、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面が橙色ないし

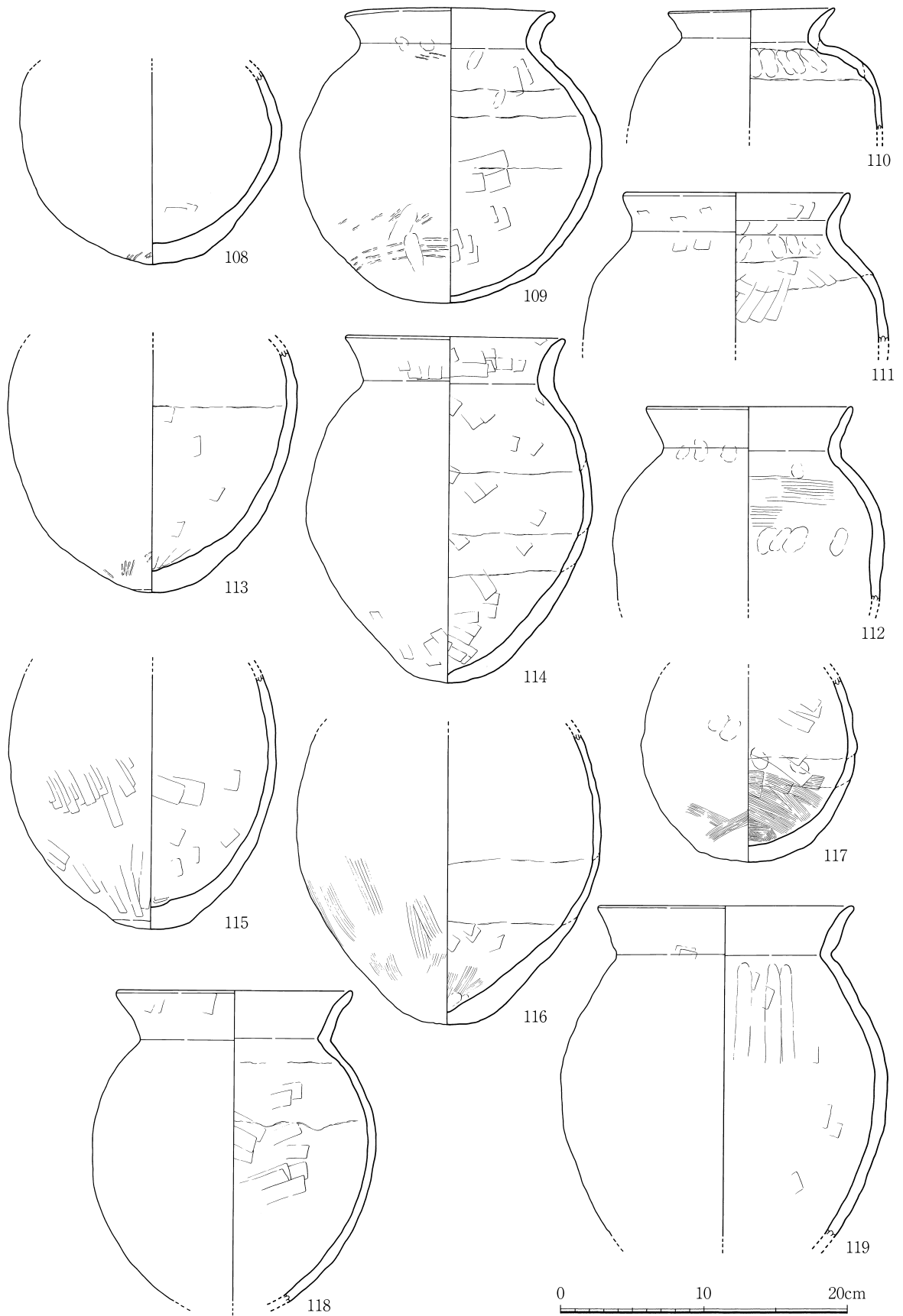


Fig.24 SF-2出土遺物実測図6

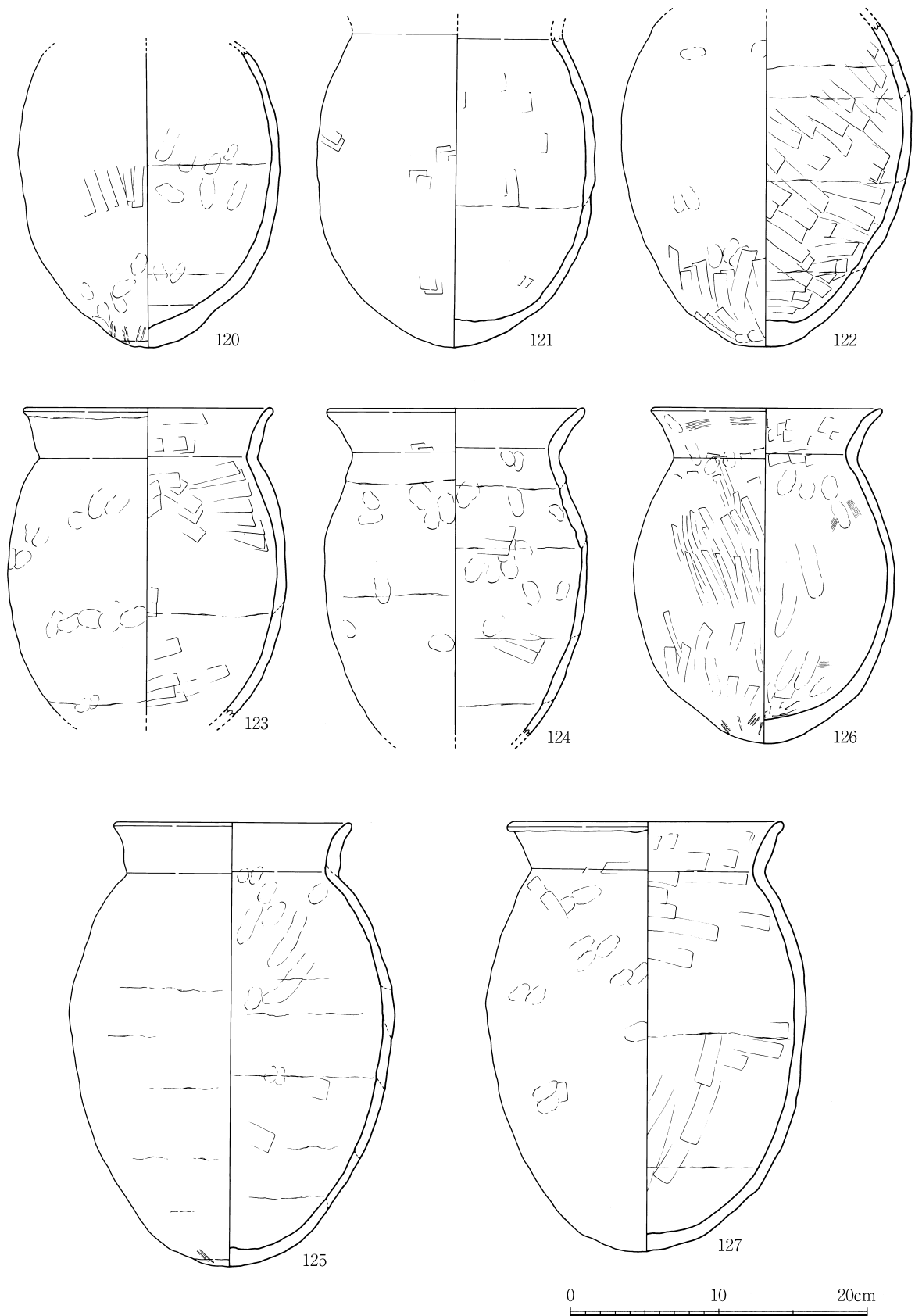


Fig.25 SF-2出土遺物実測図7

にぶい橙色を呈する。119も口縁部から下胴部にかけて残存し、C1類に当たり、口径17.5cm、胴径22.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはヘラナデ調整の後に指ナデ調整とナデ調整を加える。色調は、外面が黄灰色ないし橙色、内面が橙色を呈する。

120～127は長胴の甕で、D類に当たる。120はDb類で、胴径17.6cmを測る。底部外面にはタタキ目が残し、胴部上半にはヘラナデ調整、内面にはナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色ないし褐灰色を呈する。121はDb類で、内外面ともにヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。122はDb類で、底部外面と内面にはヘラナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。色調は、外面がにぶい褐色ないし灰黄褐色、内面がにぶい褐色を呈する。123は口縁部が残存するもので、D1①類に当たり、口径16.4cm、胴径18.8cmを測る。口縁部にはヘラナデ調整の後にヨコナデ調整、胴部外面にはナデ調整、胴部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。124も口縁部が残存するもので、D2①類に当たり、口径17.0cm、胴径17.7cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし橙色、内面が橙色を呈する。125は全体の形状が復元できるもので、Db1②類に当たり、口径15.6cm、胴径20.1cm、器高30.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整、胴部外面にはナデ調整を施し、底部外面にはタタキ目がわずかに残る。色調は、外面がにぶい橙色ないし暗灰色、内面がにぶい橙色を呈する。126は完存するもので、Db2②類に当たり、口径15.3cm、胴径17.6cm、器高22.8cmを測る。口縁部にはヘラナデ調整の後にナデ調整、胴部内外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施し、底部外面にはタタキ目がわずかに残る。色調は、外面が明褐灰色ないし橙色、内面がにぶい赤褐色を呈する。127も完存するもので、Db2①類に当たり、口径18.0cm、胴径21.7cm、器高29.1cmを測る。口縁部はヘラナデ調整の後にヨコナデ調整、他はヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないしにぶい橙色、内面が橙色を呈する。

128・129は畿内からの搬入品とみられるもので伴出する土師器とは形態、調整技法、胎土が全く異なる。128は完存するもので、口径12.9cm、胴径17.6cm、器高18.0cmを測る。底部は丸底で、胴部は球形を呈し、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外上方にのびる。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはタテ方向のハケ調整、内面には指ナデ調整を施す。胎土には石英と長石を含み、色調は、外面が黒色ないしにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。129もほぼ完存するもので、口径12.8cm、胴径17.0cm、器高16.1cmを測る。底部は丸底で、胴部は球形を呈し、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外上方にのびる。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはタテ方向のハケ調整、内面には指ナデ調整を施す。口縁部と胴部の外面には

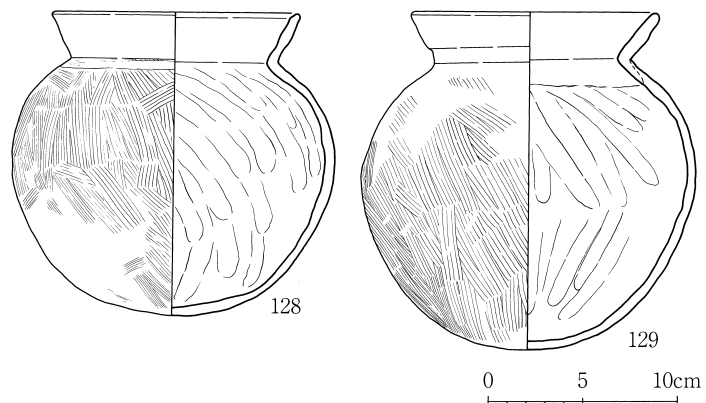


Fig.26 SF-2出土遺物実測図8

煤が付着する。胎土には石英と長石を含み、色調は、外面が褐灰色ないし黒色、内面が灰褐色を呈する。

130～141は高杯であり、130～132は口縁部が底部から屈曲するもので、A類に当たる。130は口縁部が外反するもので、口径16.3cmを測る。脚部との接合はA手法を用いる。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。131・132は口縁部が直線的にのびた後外傾するものである。131は口径19.8cmを測り、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。132は口径18.3cmを測り、口縁部にはヨコナデ調整、内底面にはナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。133は口縁部と裾部を欠損するもので、脚部との接合方法はA手法である。胎土には礫を多く含み、色調は、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。134は口縁端部と裾端部を欠損するが、杯部が椀状を呈し、C類に当たる。裾部は脚柱部から屈曲して内湾する。接合方法はB手法である。胎土には礫を含み、色調は内外面とも黄橙色を呈する(Ca4類)。135～140は脚部が残存し、135～137は、裾部が脚柱部から屈曲して直線的にのびるもので、a1類に当たる。135は内面にしほり目とヘラ削り調整を施す。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。136は脚部高が低いもので、底径9.6cmを測る。杯部との接合方法はA手法で、胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色、内面が黄橙色ないし灰白色を呈する。137は杯部との接合部で剥離するもので、底径11.6cmを測る。杯部との接合方法はA手法で、脚柱部は杯底部の内面まで至る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。138は杯部との接合部が欠損するもので、底径11.5cmを測る。裾部は脚柱部から屈曲して内湾するもので、a2類に当たる。色調は外面が灰黄褐色、内面が橙色を呈する。139・140は脚部がラップ状に開くもので、b類に当たる。139は脚台高が非常に低いもので、底径11.2cmを測る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。140は脚部が完存するもので、底径11.4cmを測る。脚柱部内面にはしほり目が残る。胎土には礫を含み、色調は、外面が橙色、内面が橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。141は口縁部が椀状を呈するもので、C類に当たる。口径

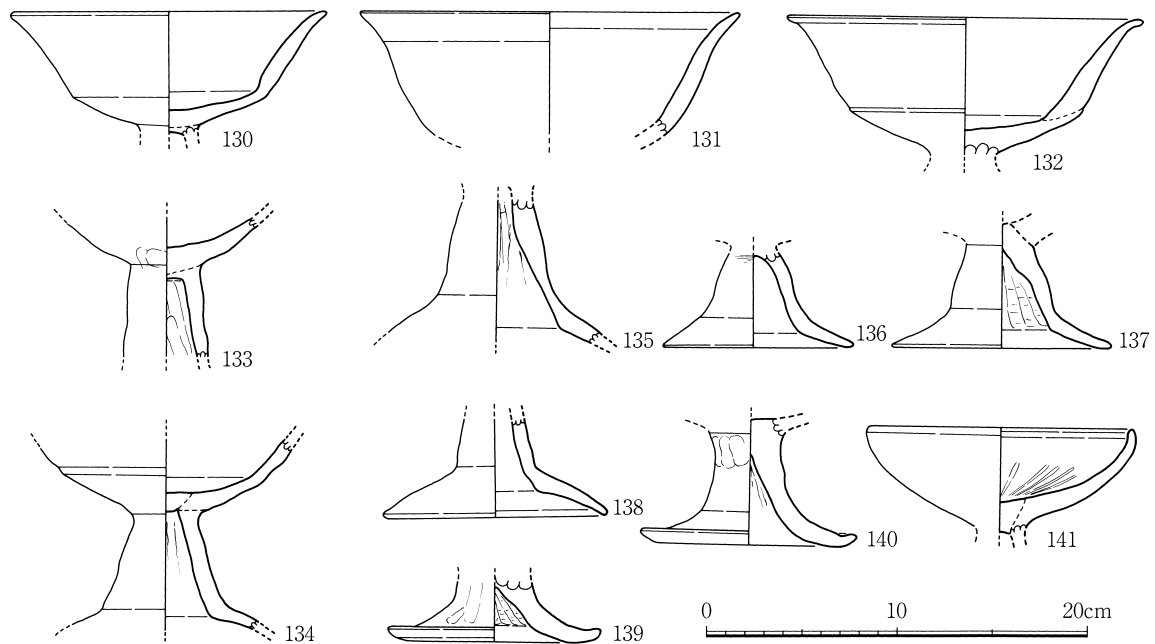


Fig.27 SF-2出土遺物実測図9

13.8cmを測り、杯部内面には放射線状のヘラ磨きを施す。口縁部にはヨコナデ調整、体部外面にはナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が橙色ないし浅黄橙色、内面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。

142～152は椀で、142～150は半球形を呈するA類、151は尖底で器高が低いB類、152は平底を呈するC類である。142は大型のもので、口径16.6cmを測る。口縁部は体部から直線的にのびるもので、Aa類に当たる。色調は内外面とも橙色を呈する。

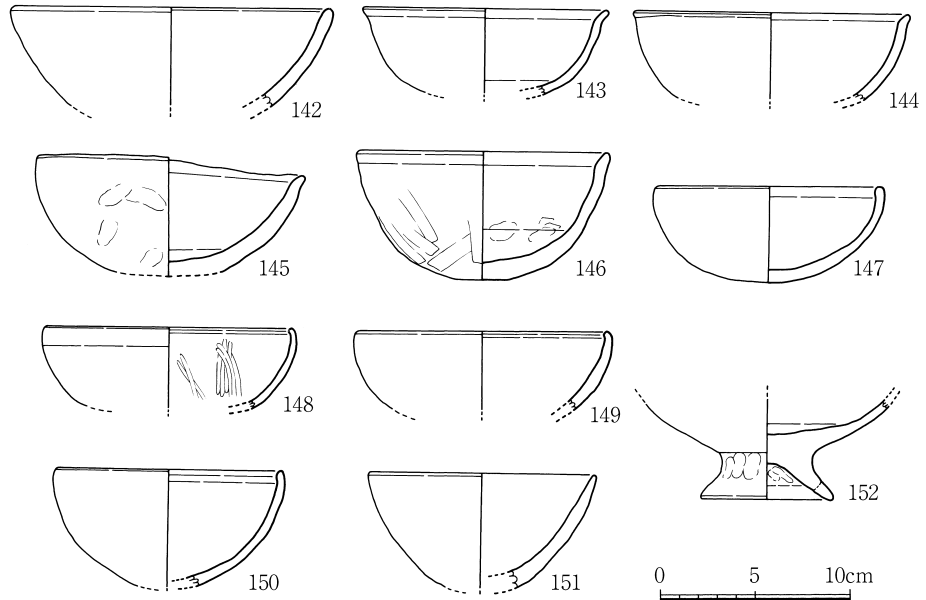


Fig.28 SF-2出土遺物実測図10

143～146は口縁部が短く外傾するもので、Ab類に当たる。143は口径12.8cmを測り、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する。144は口径14.4cmを測り、色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈する。145は口径14.1cmを測り、器面にはナデ調整を施すが、外面はやや粗く指押えの痕が残る。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。146は全体が復元できるもので、口径13.0cm、器高6.8cmを測る。器面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土は比較的精良で、色調は外面が橙色、内面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。

147～150は口縁部が内湾するもので、Ac類に当たる。147は完存するもので、口径11.6cm、器高5.1cmを測り、色調は、外面が橙色ないしにぶい橙色、内面が橙色を呈する。148は口縁部と体部が残存するもので、口径13.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面にはナデ調整、内面にはヘラ磨きを施す。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともなぶい橙色を呈する。149は約1/3が残存するもので、口径13.2cmを測る。胎土には砂粒を若干含むが、比較的精良で、色調は内外面とも橙色を呈する。150は器高が比較的高いもので、口径11.8cmを測る。胎土には礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。

151は底部が尖底を呈するもので、B類に当たり、口径11.9cmを測る。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし灰黄色、内面がにぶい橙色ないし灰色を呈する。

152は脚が付くもので、C類に当たり、底径6.8cmを測る。杯部は椀状をなし、脚台部は低く、ハの字状に開く。杯部との接合部には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.29-153~159)

153~155は小型で丸底を呈するA類である。153はほぼ完存し、口径4.3cm、器高3.5cmを測る。色調は内外面ともにぶい橙色ないし暗灰黄色を呈する。154もほぼ完存し、口径4.0cm、器高3.4cmを測る。胎土には礫を含まず、精良で、色調は、外面がにぶい赤褐色ないし暗灰黄色、内面がにぶい赤褐色を呈する。155もほぼ完存し、口径5.6cm、器高4.9cmを測る。色調は、外面が明赤褐色ないしにぶい黄橙色、内面が明赤褐色を呈する。

156は中型で平底を呈するもので、完存し、C類に当たる。口径7.6cm、底径3.2cm、器高4.2cmを測る。胎土には礫を多く含み、色調は、外面が灰褐色、内面が黄灰色を呈する。

157~159はやや大型で、器高が高いもので、D類に当たる。157は口径9.5cm、器高6.0cmを測り、

尖底をなす。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰色を呈する。158は約1/3が残存するもので、口径8.2cm、器高7.7cm、底径1.8cmを測る。底部は平底で、胴部は内湾し、口縁部は短く内傾する。色調は、外面が灰色ないし橙色、内面が黄灰色を呈する。159は口径9.8cm、器高6.9cm、底径4.4cmを測る。底部は器壁が厚く、胴部は大きく開き、口縁部は短く内傾する。胎土にはほとんど礫を含まず、比較的精良で、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。

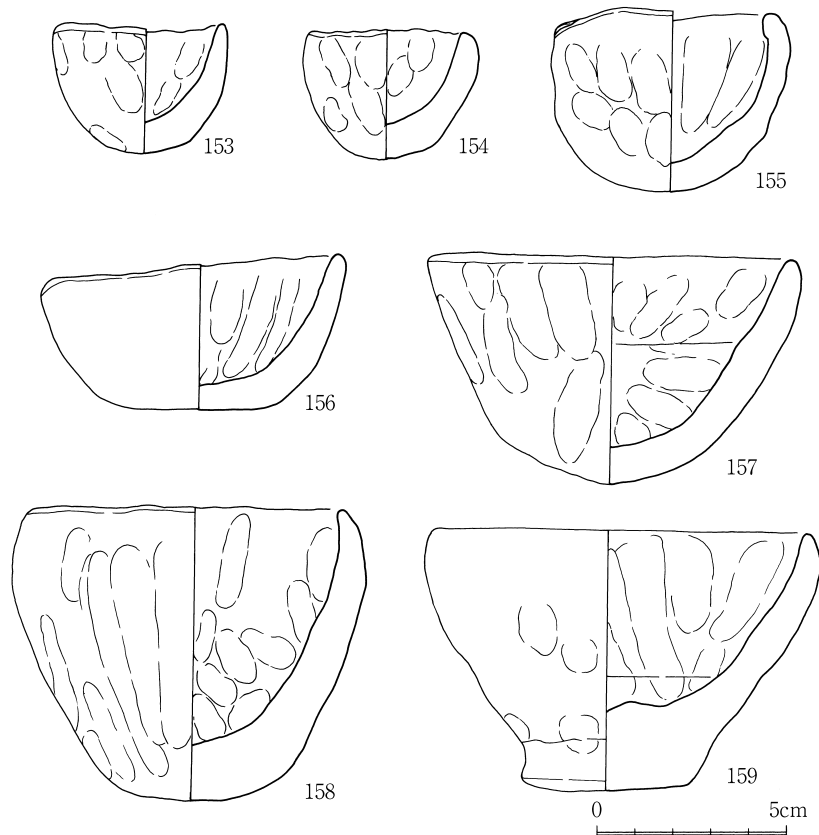


Fig.29 SF-2出土遺物実測図11

須恵器 (Fig.30-160~165)

160は杯蓋で、ほぼ完存し、口径10.4cm、器高4.5cm、稜径10.3cmを測る。天井部は丸く、稜は鈍い。口縁部はほぼ真下におり、端部は内傾する浅い凹面をなす。天井部の約2/3には回転ヘラ削り調整、その他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

161は杯身で、底部を欠損する。口径12.2cm、受部径14.8cm、立ち上がり高1.4cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

162~164は甕である。162はほぼ完存し、口径18.5cm、胴径31.2cm、器高27.0cmを測る。底部は丸

底で、胴部が球形を呈し、最大径は胴部上位にある。頸部はくの字状をなし、口縁部は若干屈曲し、外上方にのび、端部は内傾する平面をなす。口縁部外面には断面三角形のにぶい凸帯が巡る。口縁部は回転ナデ調整、胴部外面にはタテ方向のタタキの後にナデ調整、内面はナデ調整を施す。色

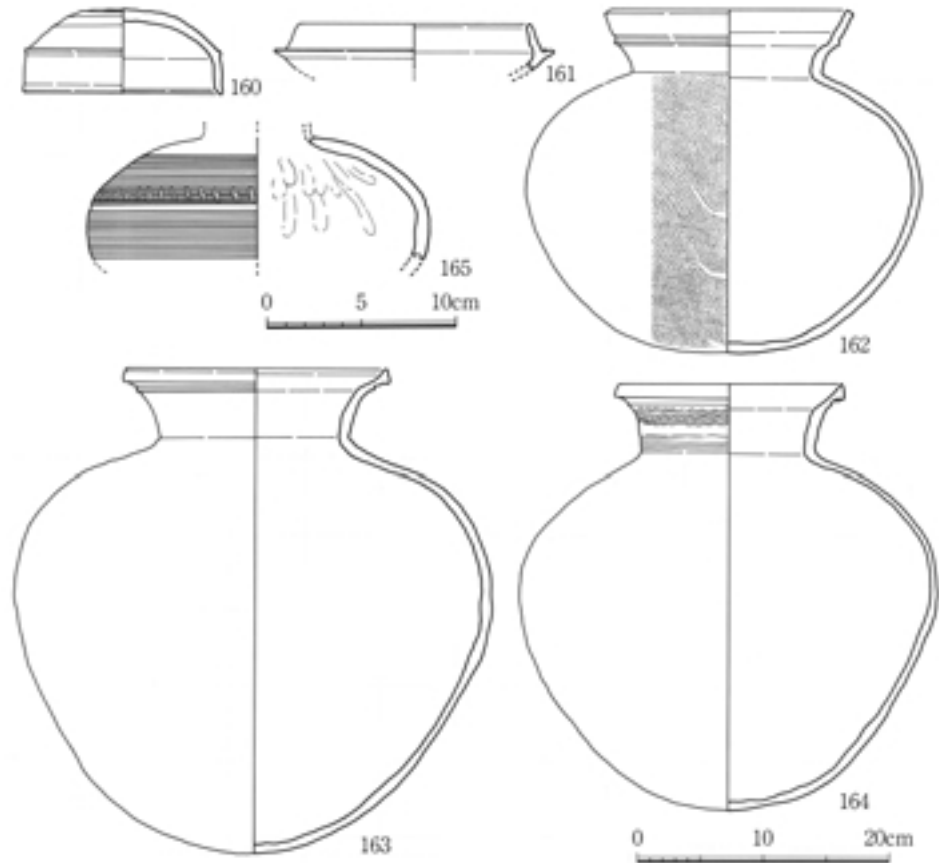


Fig.30 SF-2出土遺物実測図12

調は内外面とも灰色を呈する。163もほぼ完存し、口径20.4cm、胴径37.6cm、器高38.2cmを測る。底部は丸底で、胴部は丸く、最大径は胴部上位にある。頸部は胴部から屈曲して外反し、口縁部はさらに外反し、端部を上下に拡張する。口縁部外面には断面三角形の凸帯が巡る。口縁部には回転ナデ調整、胴部外面にはタタキの後にナデ調整、内面にはナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色ないし灰白色を呈する。164もほぼ完存し、口径17.6cm、胴径33.1cm、器高33.4cmを測る。底部は丸く、胴部最大径は胴部上位にある。頸部は胴部から屈曲して外傾し、口縁部はさらに外傾し、端部を上下に拡張する。口縁部外面にはにぶい凸帯、櫛描波状文、回転カキ目調整を施す。胴部外面は斜め方向のタタキの後に回転カキ目調整、内面は同心円文と平行のタタキ目が残る。色調は、外面が灰色または灰白色、内面が灰色を呈する。

165は円孔が残存していないが大型甕とみられるもので、胴径17.6cmを測る。胴部外面には回転カキ目調整の後に1条の凹線、凹線の上方には刺突文を施す。内面にはナデ調整を施す。色調は、外面が灰色ないし暗灰色、内面が灰色を呈する。

土製模造品 (Fig.31-166・167)

166・167は土製円板で、中央部には径2~3mmの円孔を2カ所に両面から穿つ。全面ナデ調整を施し、色調は灰黄色を呈する。166は径2.8cm、厚さ0.8cm、167は径2.6cm、厚さ0.9cmを測る。

石製模造品 (Fig.31-168~177)

168は斧形模造品とみられるもので、全長3.0cm、全幅1.6cm、全厚0.7cmを測る。1側面を除き表面

を研磨し、1面は丸く、1面は刃状に細く研磨する。石材は粘板岩である。

169～177は滑石製の白玉で、径0.47～0.50cm、全厚0.30～0.50cm、孔径0.15～0.25cm、重量0.05～0.11gを測る。円筒形や臼形、側面中央部に稜を有する算盤玉形を呈するものがある。側面はタテ方向に研磨され、上下二段に分割して研磨するものも多くみられる。171～177は土師器甕(122)の中から出土した。

SF - 3 (付図3)

調査区中央部で検出した土器集中で、東西7m、南北4mの範囲から遺物がまとまって出土した。検出面の標高は3.530～3.650mを測り、東から西へやや傾斜する。出土遺物には祭祀遺物は含まれていないもののSF-2・4と同じ状況を呈することから祭祀関連遺構の可能性が高いものとみられ、ここでは祭祀関連遺構として捉えた。また、遺物は比較的狭い範囲で出土していることなどから一括性が高いものとみられる。出土遺物では土師器16点(178～193)、須恵器1点(194)が復元図示できた。これらの内訳は須恵器が6%、土師器が94%を占め、土師器の中では甕が94%を占める。

出土遺物

土師器 (Fig.32～34-178～193)

178～192は甕である。178～181は口頸部が残存するもので、178～180は1類、181は2類に分類できる。178は1①類で、口径14.8cmを測り、口縁部内面にはヘラナデ調整の後に外面と共にヨコナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色ないし灰色を呈する。179は1①類で、口径17.1cmを測り、口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。180は1②類で、口径17.2cmを測り、口縁部にはヘラナデ調整の後にヨコナデ調整、胴部にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面とも

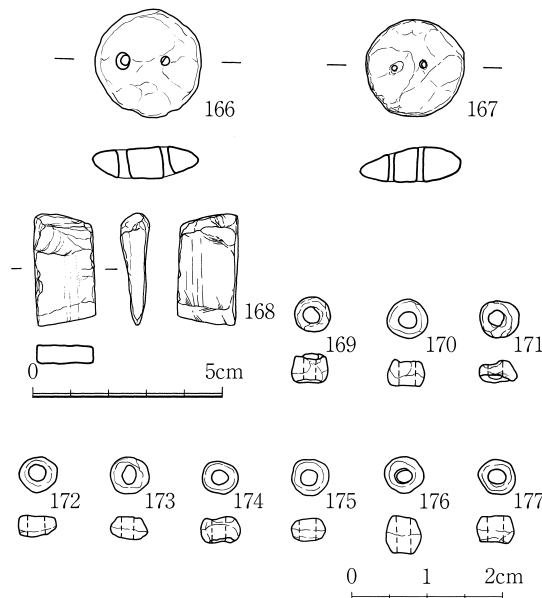


Fig.31 SF-2出土遺物実測図13

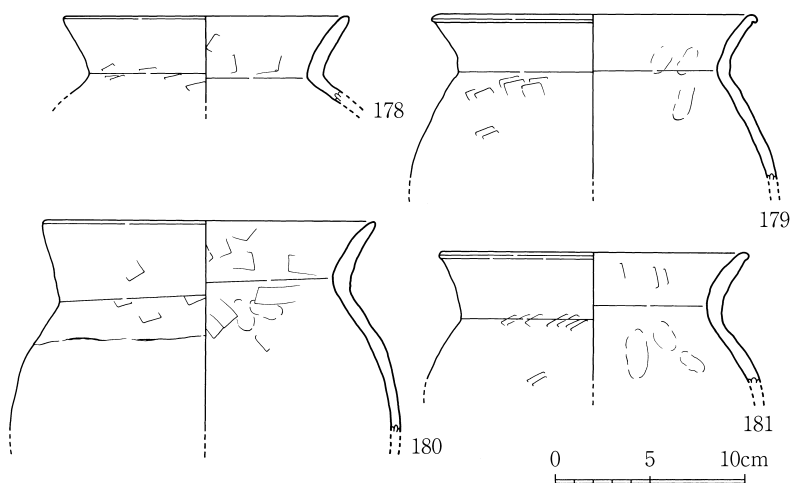


Fig.32 SF-3出土遺物実測図1

橙色を呈する。182は底部が完存するもので、尖底状を呈しb類に当たる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

183～192は胴部の形態がわかるもので、183・184はB類、185～189はC類、190～192はD類に分類できる。183はBb類で、胴径19.8cmを測る。胴部内外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整、底部外面にはタタキの後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面はにぶい橙色を呈する。184は全体が復元できるもので、Bb1類に当たり、口径12.8cm、胴径20.3cm、器高23.1cmを測る。

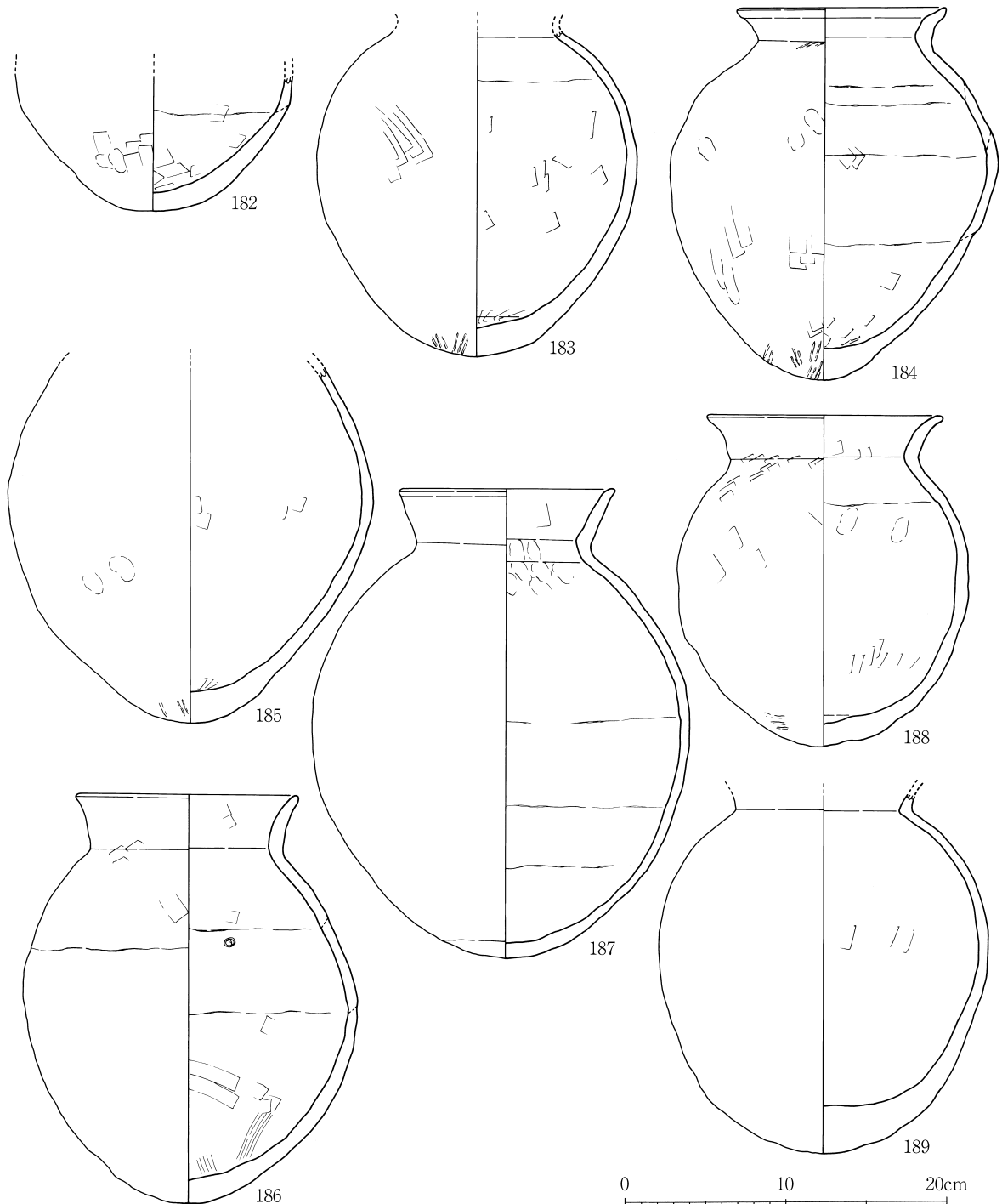


Fig.33 SF-3出土遺物実測図2

口縁部はヨコナデ調整，胴部内外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整，底部外面にはタタキの後にナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。185は口縁部が欠損するもので，Cb類に当たり，胴径22.6cmを測る。胴部内外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整，底部外面にタタキの後にナデ調整を施す。色調は，外面が灰黄褐色，内面がにぶい橙色を呈する。186は全体が復元できるもので，Cb1類に当たり，口径13.3cm，胴径20.6cm，器高23.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整，胴部内外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整，内底面にはハケ調整を施す。色調は，外面がにぶい橙色，内面が橙色を呈する。187も全体が復元できるもので，Cb1類に当たり，口径13.1cm，胴径23.4cm，器高29.1cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整，胴部から底部にかけてはナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。188・189は丸底で，球形に近い形態を呈するもので，188はほぼ完存し，Cc1類に当たり，口径14.3cm，胴径18.0cm，器高20.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整，胴部にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施し，底部外面にわずかにタタキ目が残る。色調は，外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈する。189は底部の器壁が非常に厚いもので，Cc1類に当たり，胴径20.4cmを測る。色調は内外面ともにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。190はDb類で，胴径19.5cmを測る。胴部にはナデ調整，底部外面にはタタキの後にナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。191はほぼ完存するもので，Db1類に当たり，口径15.4cm，胴径19.3cm，器高25.0cmを測る。口縁部内面にはヘラナデ調整の後に外面と共にヨコナデ調整，胴部外面にはナデ調整，内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。器面には粘土紐の接合痕が比較的よく残る。色調は内外面とも明赤褐色ないし暗灰色を呈する。192は全体が復元できるもので，Db1類に当たり，口径17.4cm，胴径20.7cm，器高28.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整，胴部にはヘラナデ調整の後にナデ調整，底部外面にはタタキの後にナデ調整を施す。色調は，外面がにぶい橙色ないし褐灰色，内面がにぶい橙色を呈する。

193は脚台部が残存する高杯で，a1類に当たり，底径10.8cmを測る。脚台部内面にはヘラ削り調整

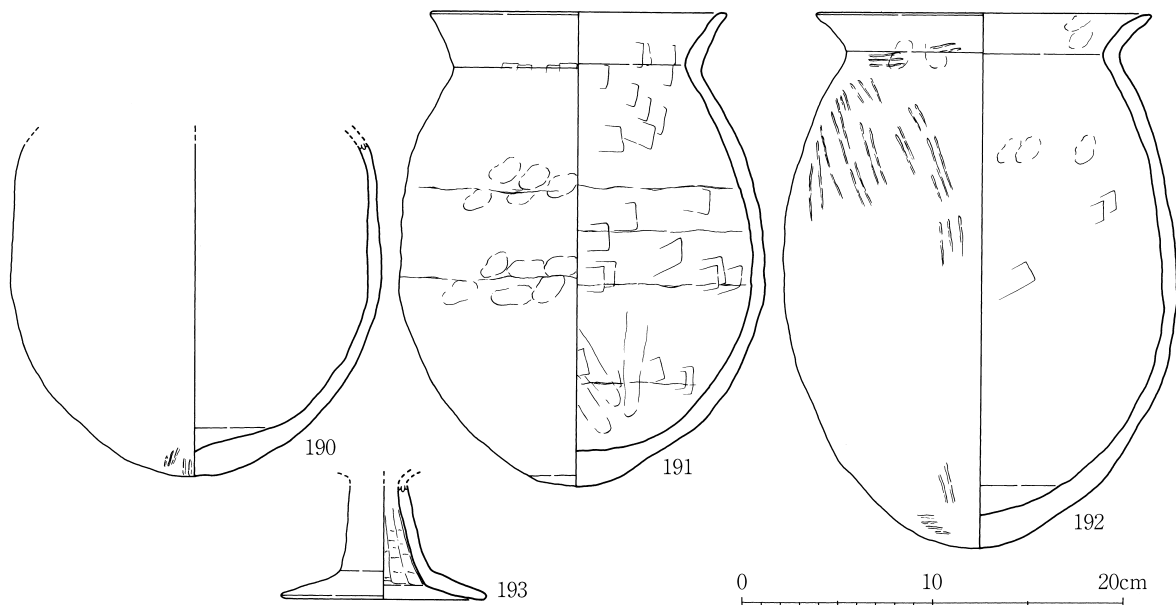


Fig.34 SF-3出土遺物実測図3

を施す。色調は、外面が橙色、内面が灰褐色を呈する。

須恵器 (Fig.35-194)

194はほぼ完存する大型甕で、口径12.1cm、胴径16.5cm、器高16.7cmを測る。底部は丸く、胴部上位1/3に最大径を有し、その下端に径1.5cmの円孔を穿つ。頸部は胴部から屈曲して外傾し、口縁部は頸部から小さく屈曲して外上方へのび、端部は外傾する凹面をなす。口縁部と頸部外面には櫛描波状文、胴部外面には回転カキ目調整の後に胴部中位に刺突文を施す。底部外面にはタタキ目が残る。胴部内面には回転ナデ調整を施し、内底面には指押えの痕が明瞭に残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

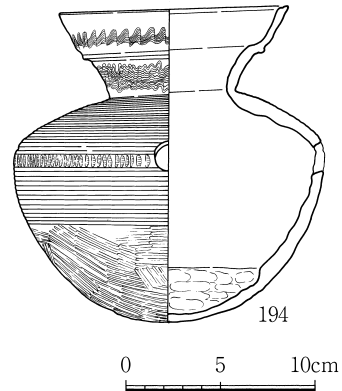


Fig.35 SF-3出土遺物実測図4

SF - 4 (付図4)

調査区北東部で検出した土器集中で、東西22m、南北10.5mの範囲から遺物がまとまって出土し、更に調査区外へ続くものとみられる。検出面の標高は3.846~4.491mを測り、東から西へ傾斜する。SF-2と同様に広範囲に拡がっていることや須恵器に時期差が認められることから一時期に行われた祭祀跡とは考えがたく、時期幅があるものと考えられる。また、祭祀遺物である滑石製の勾玉と白玉は調査区の北東隅から出土している。出土遺物では土師器78点(195~272)、須恵器4点(273~276)、石製品57点(277~333)、鉄製品1点(334)が復元図示できた。これらの内訳は、須恵器が5%、土師器が95%で、土師器の中では高杯が最も多く、51%を占める。

出土遺物

土師器 (Fig.36~43-195~268)

195~199は壺である。195は口縁部が残存するもので、口径9.1cmを測る。色調は、外面が黄橙色ないし褐灰色、内面が橙色を呈する。196~199は胴部の形態がわかるもので、すべてB類に分類できる。196は口縁部が欠損するもので、胴径14.4cmを測り、胴部は扁平な球形を呈するとみられる。胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。197は胴部と底部が残存するもので、胴径15.2cmを測る。内面には指ナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし暗灰色、内面が灰色ないし灰黄色を呈する。198はほぼ完存するもので、口径9.4cm、胴径16.0cm、器高15.2cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部は直線的にのび、端部は内傾する平面をなす。外面と口縁部内面の一部にはハケ目が残る。胎土には礫を含み、色調は、外面が黄灰色ないしにぶい橙色、内面

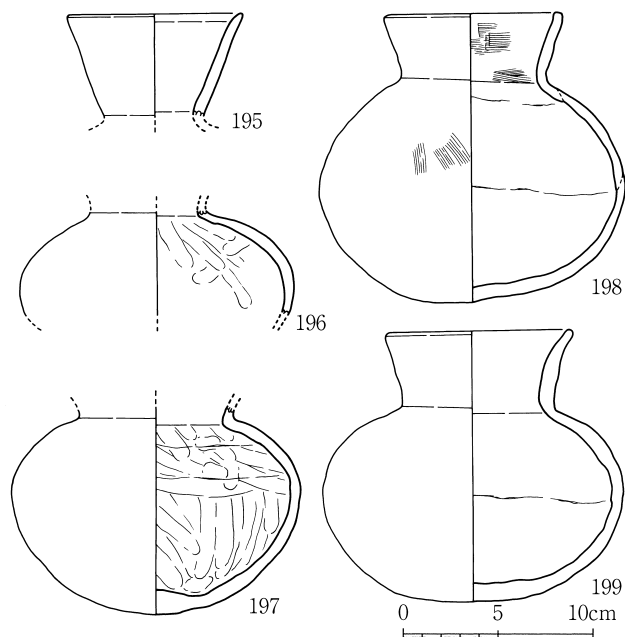


Fig.36 SF-4出土遺物実測図1

がにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。199は全体が復元できるもので、口径9.4cm、胴径15.8cm、器高14.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には礫を多く含み、色調は、外面が明褐灰色ないし灰色、内面がにぶい褐色を呈する。

200～221は甕である。200～207は口縁部の形態のみがわかるもので、200～203は1①類、204～206は1②類、207は2①類に分類できる。200は口径15.0cmを測り、口縁部は長くのびる。口縁部にはヘラナデ調整の後にヨコナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が灰黄褐色、内面が黄灰色を呈する。201は口径14.6cmを測り、口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色、内面がにぶい橙色を呈する。202は口径16.0cmを測り、口縁部は外傾し、口縁端部は内傾する平面をなす。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。203は口径15.0cmを測り、口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が灰白色ないしにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。204はやや小型で、口径12.4cmを測り、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。色調は、外面が橙色ないし灰黄褐色、内面が橙色を呈する。205は口径16.7cmを測り、口縁部は大きく外反する。口縁部内面はヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色ないし黒色を呈する。206は口径19.2cmを測り、口縁部は外傾してのび、途中でさらに外傾する。口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施す。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。207は口径14.4cmを測り、頸部は胴部から緩やかに外反し、口縁部は直立気味にのびる。口縁部にはヨコナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

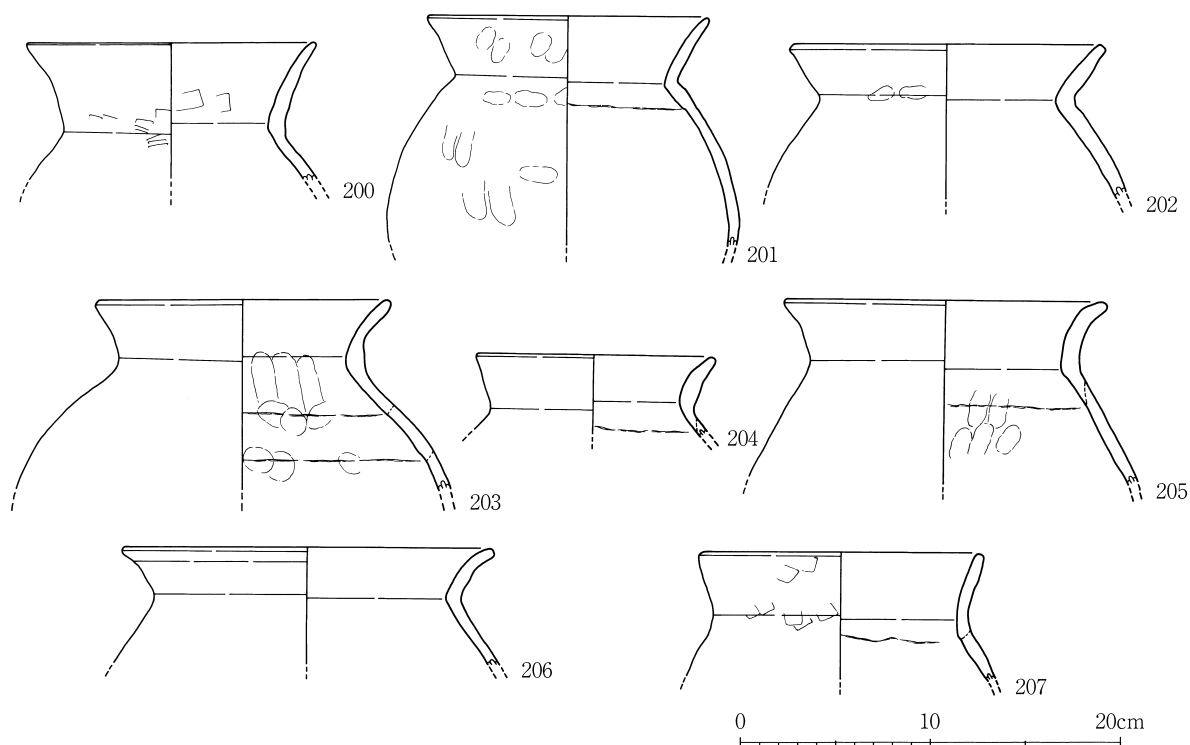


Fig.37 SF-4出土遺物実測図2

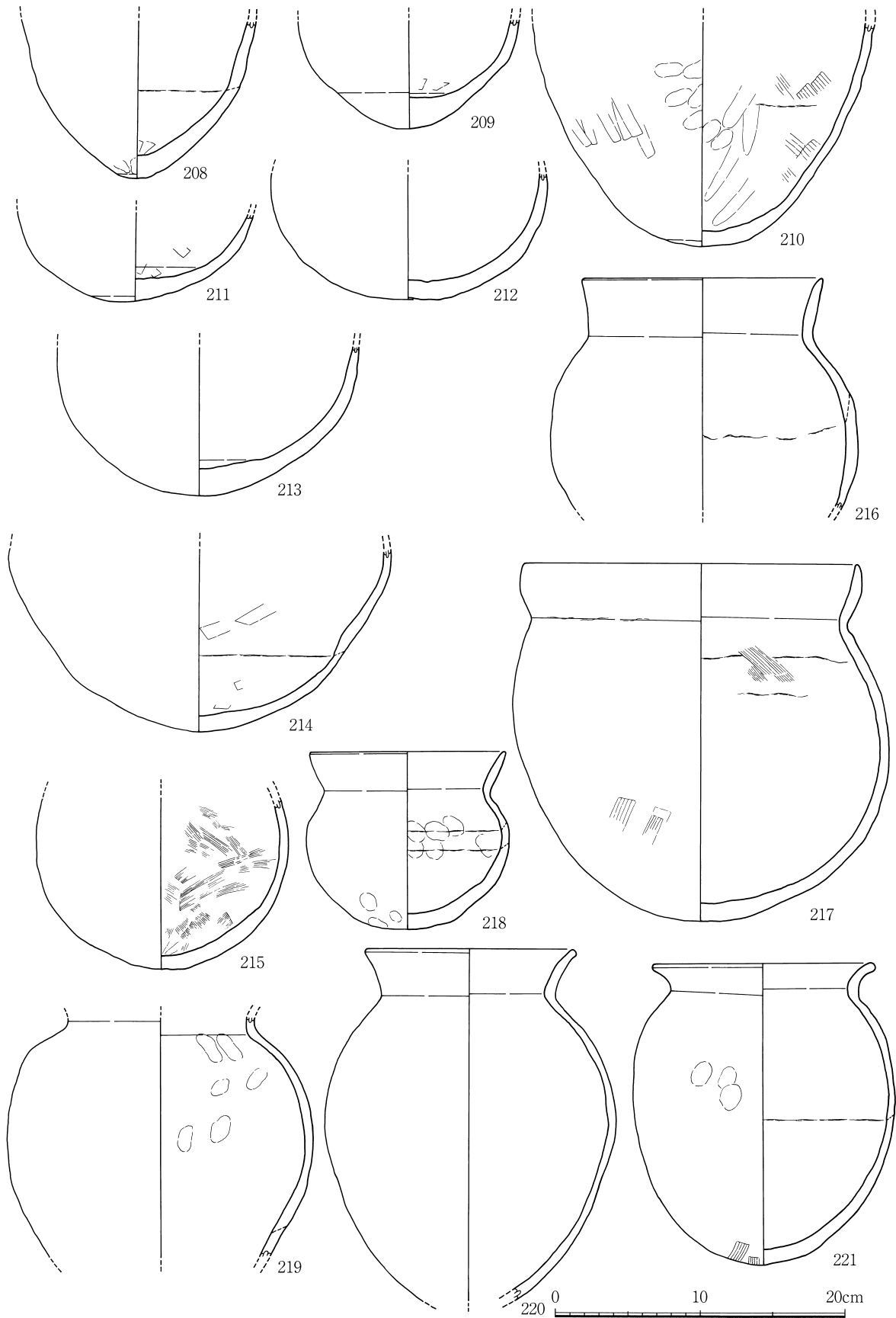


Fig.38 SF-4出土遺物実測図3

208～214は底部の形態のみがわかるもので、208がa類、209・210がb類、211～214がc類に分類できる。208は小さな平底を呈するもので、底径1.5cmを測り、色調は内外面とも灰黄色ないし橙色を呈する。209は底部の器壁が比較的厚く、若干突出し、色調は、外面がにぶい赤褐色、内面が黒褐色を呈する。210はやや大型のもので、外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整、内面にはハケ調整の後にナデ調整を施す。また、外面の一部には煤が付着する。色調は、外面がにぶい黄褐色ないし暗褐色、内面がにぶい黄褐色ないし黒色を呈する。211は底部の器壁が若干厚いもので、外面にはナデ調整、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が明褐灰色、内面が褐灰色を呈する。212は底部がやや中窪み状を呈するもので、色調は、外面が赤灰色、内面が淡赤橙色を呈する。213は底部の器壁が比較的厚いもので、外面にはナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色な

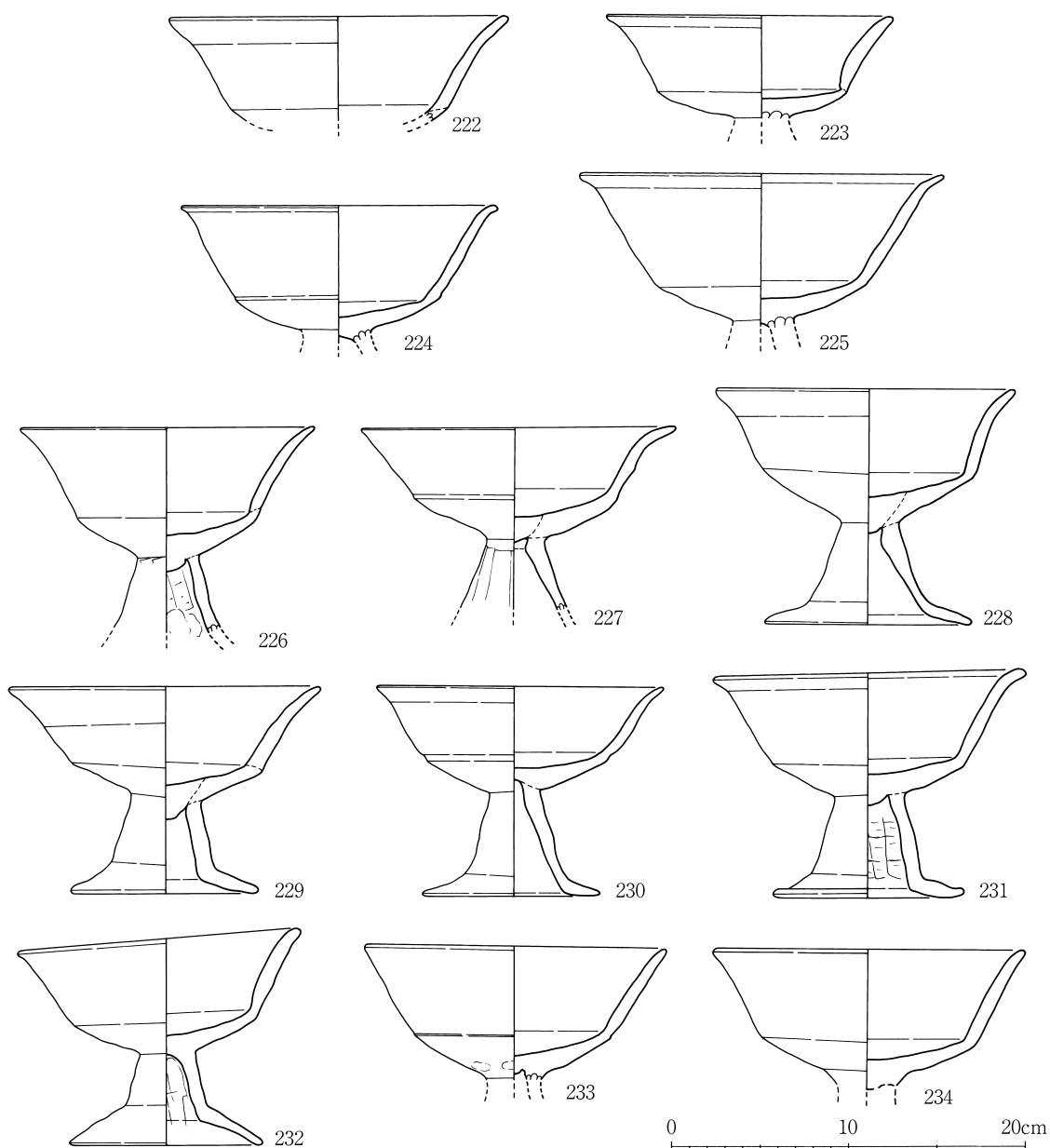


Fig.39 SF-4出土遺物実測図4

いし灰黄色、内面がにぶい橙色ないし淡黄橙色を呈する。214は内面に接合痕が明瞭に残るもので、内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし灰白色、内面がにぶい橙色を呈する。

215～221は胴部の形態が分かるもので、215～217はA類、218～220はB類、221はC類に分類できる。215は胴部が球形をなすもので、Ac類に当たり、胴径17.4cmを測る。内面はハケ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし灰色、内面がにぶい褐色ないし灰色を呈する。216は口縁部と胴部が残存するもので、A2①類に当たり、口径16.6cm、胴径21.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはナデ調整を施す。また、胴部外面には煤が付着する。胎土には礫を非常に多く含み、色調は、外面が褐灰色ないし橙色、内面が灰黄褐色ないしにぶい橙色を呈する。217は全体が復元できるもので、Ac2③類に当たり、口径23.2cm、胴径25.8cm、器高24.7cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施し、部分的にハケ目が残る。胎土には若干礫を含み、色調は、外面が橙色ないし暗灰色、内面が橙色ないし灰色を呈する。218は全体が復元できる小型の甕で、Bc1①類に当たり、口径13.4cm、胴径14.0cm、器高12.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、胴部内面はナデ調整で指頭圧痕が部分的に残る。胎土には砂粒と礫を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし黄灰色、内面がにぶい橙色を呈する。219は頸部と胴部が残存するもので、胴径21.1cmを測る。胴部にはナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし褐灰色、内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。220は口縁部と胴部が残存するもので、B1②類に当たり、口径14.2cm、胴径20.1cmを測る。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、外面が浅黄橙色、内面が灰白色を呈する。221は全体が復元できるもので、C類に当たり、口径15.0cm、胴径18.1cm、器高20.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、胴部外面はナデ調整で一部に煤が付着する。底部外面にはハケ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色ないし黒褐色を呈する。

222～261は高杯で、222～234はA類に分類できる。222は口縁部が外反するもので、口径18.8cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色ないしにぶい橙色、内面がにぶい橙色を呈する。223も口縁部が外反するもので、口径16.0cmを測る。脚部との接合方法はA手法である。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。224・225は口縁部が直線的にのび、端部が外反するものである。224は口径17.6cmを測り、脚部との接合方法はA手法である。色調は内外面とも橙色を呈する。225は口径20.4cmを測り、脚部との接合方法はA手法である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は内外面とも橙色ないしにぶい橙色を呈する。226・227は口縁部が外反するものである。226は口径16.6cmを測り、脚部との接合方法はB手法である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。227は口径17.8cmを測り、脚部との接合方法はB手法である。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。228は全体が復元できるもので、Aa1類に当たり、口径16.6cm、底径11.4cm、器高13.4cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。229はほぼ完存するもので、Aa1類に当たり、口径17.4cm、底径10.1cm、器高11.8cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は内外面とも橙色ないし浅黄橙色を呈する。230は全体が復元できるもので、Aa3類に当たり、口径16.0cm、底径9.4cm、器高

12.0cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。231はほぼ完存するもので、Aa2類に当たり、口径17.2cm、底径9.9cm、器高13.0cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。胎土には礫を多く含み、色調は内外面とも橙色ないし暗灰色を呈する。232は全体が復元できるもので、Aa4類に当たり、口径15.6cm、底径10.4cm、器高12.4cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法とみられる。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。233は口縁部がほぼ直線的にのびるもので、口径16.9cmを測る。脚部の接合方法はB手法である。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。234も口縁部がほぼ直線的にのびるもので、口径17.2cmを測る。脚部の接合方法はB手法である。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないし灰色を呈する。

235～239はB類に分類できる。235はほぼ完存し、Ba1類に当たり、口径17.5cm、底径11.5cm、器高12.4cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法である。口縁部にはヨコナデ調整、脚部外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。236は全体が復元できるもので、Ba1類に当たり、口径16.8cm、底径10.5cm、器高11.8cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。脚部外面にはタテ方向のヘラナデ調整、内面にはヘラ削り調整、裾部にはナデ調整を施す。胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。237も全体が復元できるもので、Ba3類に当たり、口径17.0cm、底径11.6cm、器高12.7cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。脚部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色ないし灰色を呈する。238は口縁部が直線的にのびるもので、口径17.6cmを測る。脚部内面にはしぼり目とナデ調整の痕跡がみられ、胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。239は裾部の一部が欠損するもので、Ba1類に当たり、口径21.2cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし褐灰色、内面が橙色ないし褐灰色を呈する。

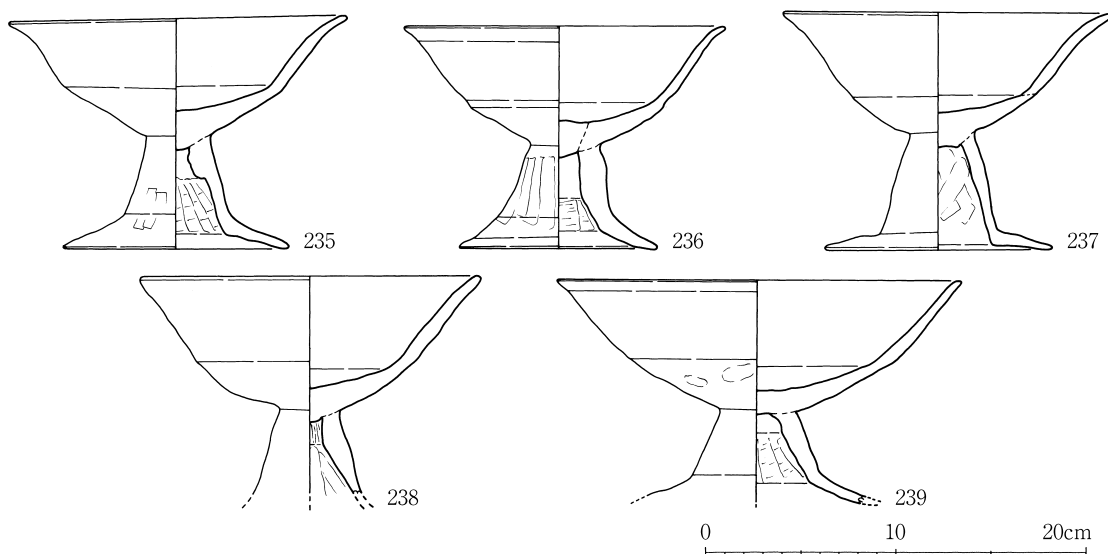


Fig.40 SF-4出土遺物実測図5

240～243はC類に分類できる。240は全体が復元できるもので、Ca1類に当たり、口径16.1cm、底径10.5cm、器高16.1cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法である。胎土には礫を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。241も全体が復元できるもので、Cb類に当たり、口径14.4cm、底径9.3cm、器高11.9cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。全面に丁寧なナデ調整を施し、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。242は口縁部が平らな底部から直線的にのびるもので、口径13.9cmを測る。胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。243は全体が復元できるもので、Ca2類に当たり、口径15.1cm、底径11.0cm、器高11.7cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法で

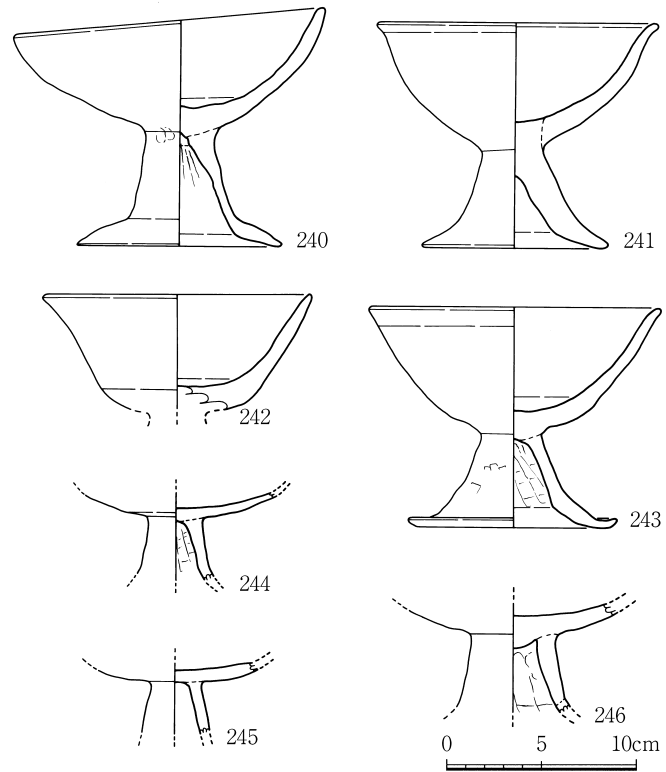


Fig.41 SF-4出土遺物実測図6

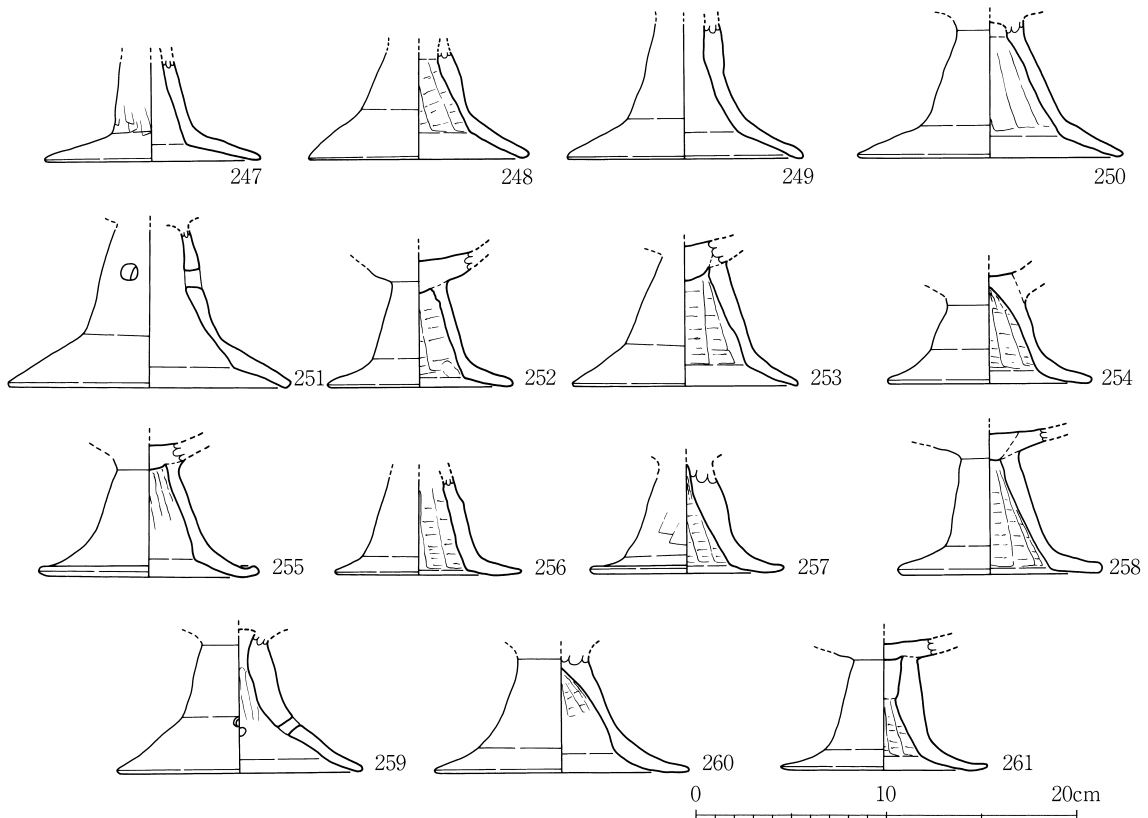


Fig.42 SF-4出土遺物実測図7

ある。脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には礫を多く含み、色調は、外面が橙色ないし浅黄褐色、内面が橙色ないし灰色を呈する。

244・245は小型のもので、非常に器壁が薄く、杯部と脚部の接合方法はA手法である。色調は、244が内外面ともにぶい橙色、245が内外面ともにぶい黄橙色を呈する。246は杯底部と脚部が残存するもので、接合方法はA手法である。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。

247～261は脚部のみ残存するもので、247～258はa類に分類でき、さらに247～253はa1類に細分される。247は底径11.0cmを測り、胎土には礫を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色

を呈する。248は底径11.2cmを測り、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒と礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。249は底径12.4cmを測り、胎土には礫を非常に多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。250は底径13.5cmを測り、内面にはヘラ削り調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色ないし灰色、内面が灰黄褐色を呈する。251は径8mmの透しが3方に施されるもので、底径14.5cmを測る。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。252は杯底部が残存するもので、底径9.2cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法である。内面にはヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。253も杯底部が残存するもので、底径11.9cmを測る。杯部と脚部の接合方法はB手法である。内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には礫を非常に多く含み、色調は、外面が橙色ないしにぶい橙色、内面が橙色を呈する。254・255はa2類に分類できるもので、254は底径10.3cmを測る。杯部と脚部の接合方法はA手法で、脚上部を杯底部に填める。脚柱部内面にははしほり目とヘラ削りの痕跡がみられる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。255は底径10.0cmを測り、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。256～258はa3類に分類できるもので、256は底径9.4cmを測り、内面にはヘラ削り調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈する。257は底径9.6cmを測り、内面にはヘラ削り調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。258は底径10.4cmを測り、杯部と脚部の接合方法はB手法である。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。

259～261はb類に分類できるものである。259は径7mmの透しが2方に施されるもので、底径12.6cmを測る。脚柱部内面にははしほり目とヘラ削り調整の痕跡がみられる。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし黄灰色、内面はにぶい黄橙色を呈する。260は脚部が大きく開くもので、底径13.4cmを測る。杯部と脚部

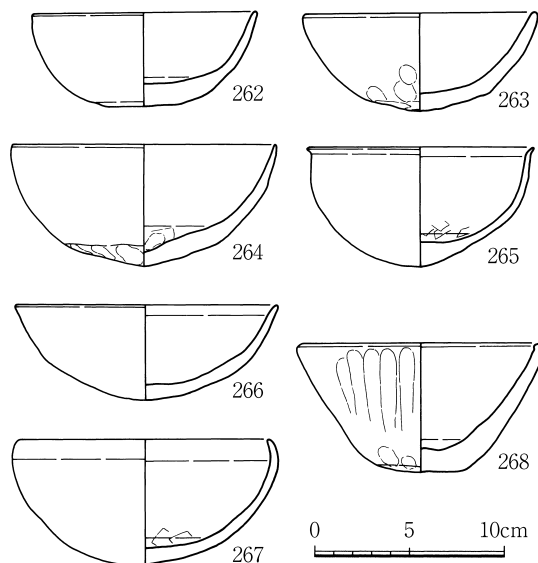


Fig.43 SF-4出土遺物実測図8

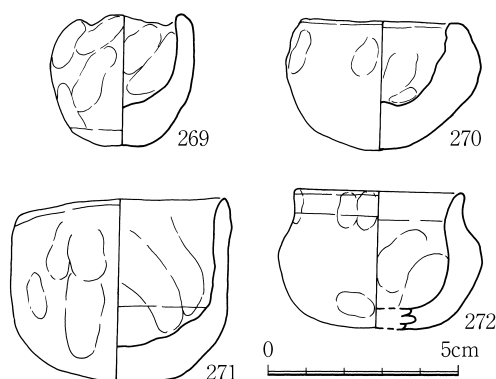


Fig.44 SF-4出土遺物実測図9

の接合方法はA手法である。脚柱部内面にはしぼり目とヘラ削り調整の痕跡がみられる。色調は、外面がにぶい橙色ないし橙色、内面がにぶい褐色ないし橙色を呈する。261は底径10.9cmを測り、杯部と脚部の接合方法はA手法である。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰黄色を呈する。

262～268は碗で、262～267はA類、268はB類に分類できる。262～264は口縁部が直線的にのびるAa類である。262はほぼ完存し、口径11.7cm、器高5.0cmを測る。胎土には礫を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。263は全体が復元できるもので、口径12.0cm、器高5.2cmを測る。器面はナデ調整で、底部外面には指頭圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。264はほぼ完存するもので、口径13.8cm、器高6.4cmを測る。器面はナデ調整で、底部内外面に指頭圧痕が残る。色調は、外面が浅黄橙色、内面が灰白色ないし灰色を呈する。265・266は口縁部が外反するAb類である。265はほぼ完存し、口径11.8cm、器高6.3cmを測る。体部の器壁は薄く、口縁端部は短く外反する。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰白色ないしにぶい橙色を呈する。266もほぼ完存するもので、口径13.9cm、器高5.0cmを測る。器高が低く、口縁端部はわずかに外傾する。胎土には礫を含み、色調は、外面が灰色ないしにぶい黄橙色、内面が灰色ないし灰黄色を呈する。267は全体が復元できるもので、Ac類に当たり、口径13.2cm、器高6.6cmを測る。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。268はほぼ完存するもので、口径13.1cm、底径5.0cm、器高6.8cmを測る。底部は平底で、体部は外上方に上がりそのまま口縁部に至る。器面はナデ調整で、外面は特に強く行う。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色、内面が明赤褐色を呈する。

手づくね土器 (Fig.44-269～272)

269～271はA類、272はB類である。269は完存し、口径2.8cm、器高3.5cmを測る。器面には指ナデ調整痕と指頭圧痕が明瞭に残る。色調は、外面が橙色ないし灰色、内面が橙色ないしにぶい黄色を呈する。270は半球形状を呈するもので、ほぼ完存し、口径4.3cm、器高3.4cmを測る。器面には指ナデ調整痕と指頭圧痕が明瞭に残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。271は口縁部が真上を向くもので、口径5.7cm、器高4.9cmを測る。器面には指ナデ調整痕と指頭圧痕が明瞭に残る。色調は、外面がにぶい褐色、内面が灰褐色ないし橙色を呈する。272は短く外反する口縁を有するもので、口径4.3cm、底径1.8cm、器高3.6cmを測る。器面にはナデ調整を施すが、指頭圧痕が部分的に残る。色調は内外面ともににぶい橙色

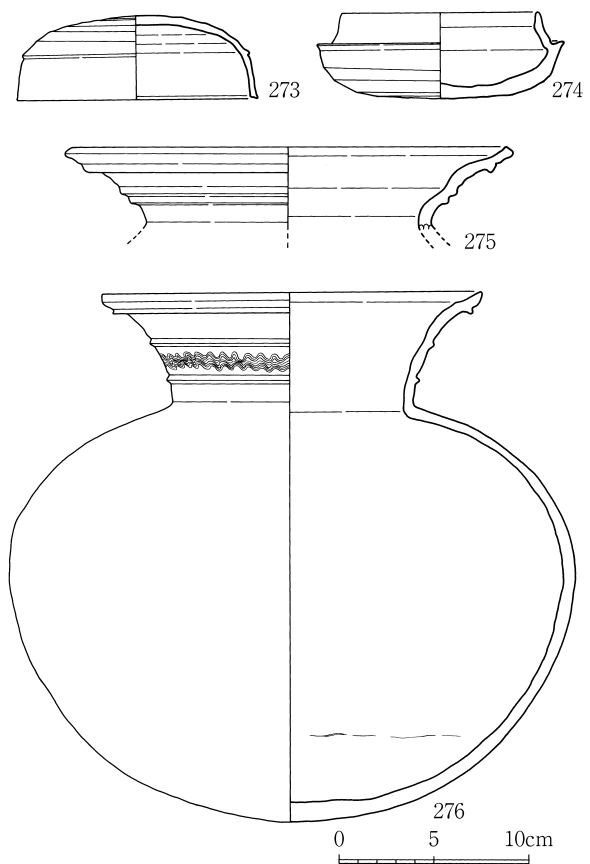


Fig.45 SF-4出土遺物実測図10

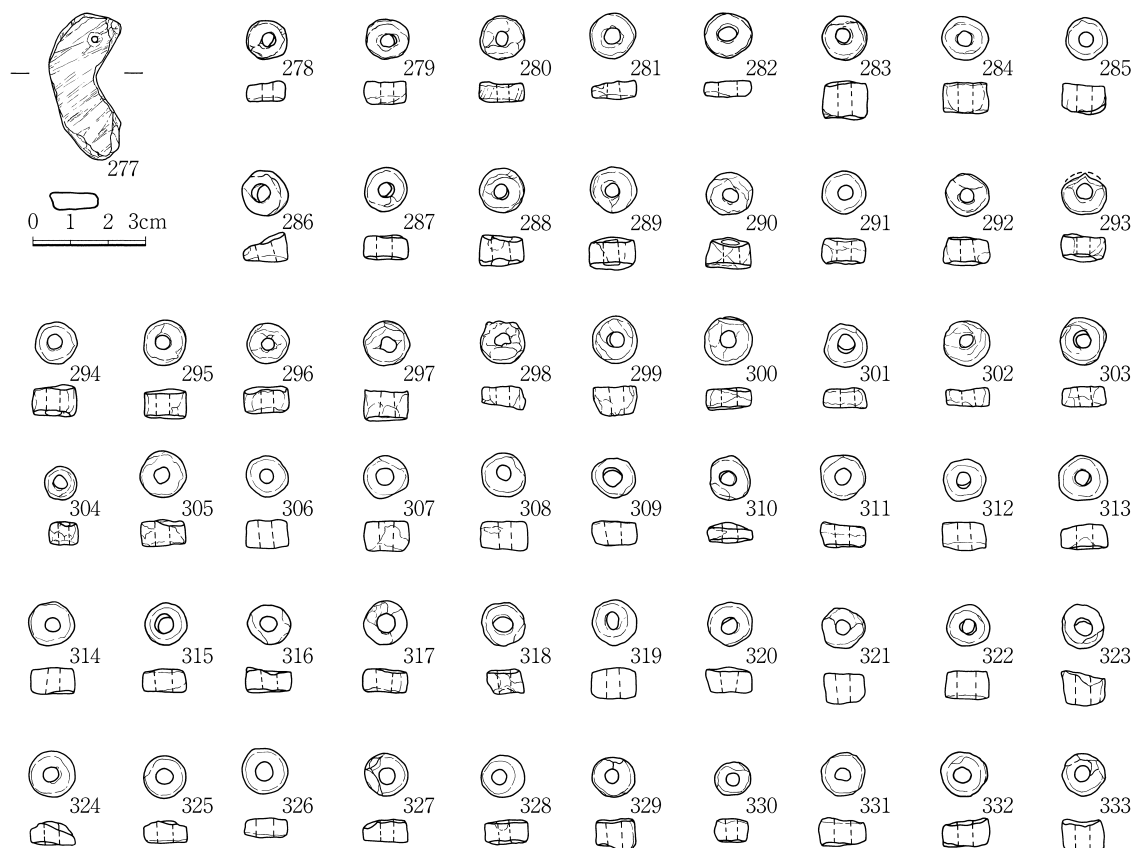


Fig.46 SF-4出土遺物実測図11(278~333は原寸)

を呈する。

須恵器 (Fig.45-273~276)

273は杯蓋で、ほぼ完存し、口径12.7cm、器高4.5cm、稜径12.0cmを測る。天井部はやや丸みを有し、口縁部は若干開き、端部は浅い凹面をなす。稜は断面鈍い三角形を呈する。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰色を呈する。

274は杯身で、口径10.3cm、受部径13.0cm、器高4.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部を丸く仕上げ、底部は丸みを有する。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。色調は内外面とも青灰色を呈する。

275・276は甕である。275は口縁部が残存するもので、口径22.8cmを測る。口縁部は大きく開き、端部は内傾する平面をなし、外面には断面三角形の凸帯が3条巡る。器面には回転ナデ調整を施し、内面には自然釉が付着する。色調は内外面とも暗灰色を呈する。276はほぼ完存するもので、口径19.8cm、胴径29.7cm、器高27.9cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、最大径は胴部中位にあり、口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、外面には1条の凸帯を巡らす。頸部には2条の凸帯と波状文による文様帯をもつ。口頸部には回転ナデ調整、胴部外面には平行のタキ、内面にはナデ調整を施し、内底面には指頭圧痕が顕著に残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

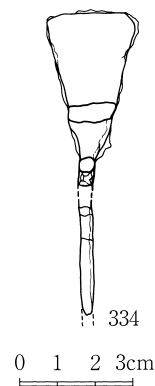


Fig.47 SF-4 出土遺物実測図12

石製模造品 (Fig.46-277~333, Tab.1)

277は滑石製の勾玉で、頭部には径2mmの円孔を穿孔する。全長3.9cm、全厚0.5cm、重量5.3gを測り、全面を研磨する。

278~333は滑石製の白玉で、すべて調査区北西隅から出土した。これらは径0.40~0.60cm、全厚0.20~0.50cm、孔径0.15~0.25cm、重量0.05~0.22gを測り、円筒形や白形、樽形、算盤玉形など形態は様々で、側面は垂直方向に研磨する。

鉄製品 (Fig.47-334)

334は鉄鏃で、茎部の一部を欠損する。鏃身部は方頭形を呈し、先端部は刃状に細くする。鏃身部は平造、茎部は断面方形を呈する。

性格不明遺構**SX - 1** (Fig.48)

調査区北西部で検出した遺構で、板状の木製品と木の枝及び周辺から出土した土師器からなる。板状の木製品は全長1.52m、全幅27cm、全厚約2~3cmを測り、表面は多少凹凸するが、湾曲せず平らに加工されている。木の枝は2本あり、全長2.15mと3.27m、断面は円形で径約2~7cmを測る。孔が見られるが、人為的なものではないとみられる。西方約40mの地点(Ⅲ-1区)では、杭で固定された板状の木製品が側面を立てた状態で直線的に並んで検出され、土層の盛り上がった箇所に設置されていたことや遺物の出土状況などから畦畔の可能性も考えられている。また、北方約200mに位置するV区の調査においても弥生時代終末から古墳時代初頭とされる同様の遺構が確認されており、木道または畦畔の可能性が指摘されている。今回出土した木製品は直線的には並んでおらず、杭で固定もされていないため畦畔であるとは断定できないが、土壌分析では古墳時代の遺物包含層より上位からは湿地的環境になり、古代の遺物包含層を挟む上下層付近では水田耕作を行った可能性が高いという結果が出ている。また、祭祀関連遺構が調査区東半の地形が高い部分に多く、SX-1の周辺には遺物が少ないという状況からも、地形が低い後背湿地を利用した水田が存在した可能性は捨てきれず、SX-1は水田耕作に伴う何らかの施設である可能性も残される。出土遺物には土師器片10点があり、板材の北側で出土した土師器1点(335)が図示できた。

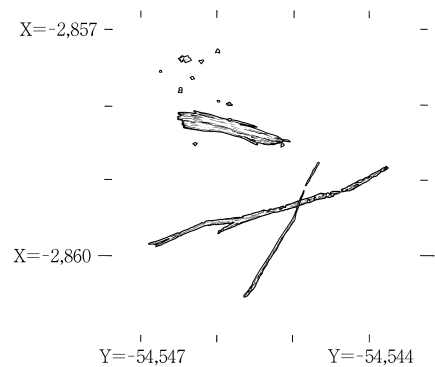


Fig.48 SX-1

出土遺物**土師器** (Fig.49-335)

335は2②類に分類できる甕で、口径18.2cmを測る。口縁部外面には煤が付着し、色調は、外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。

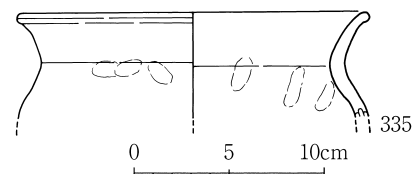


Fig.49 SX-1出土遺物実測図

Tab.1 白玉計測表

番号	直径	全厚	孔径	重量	番号	直径	全厚	孔径	重量
169	0.50	0.40	0.15	0.07	301	0.55	0.28	0.19	0.12
170	0.50	0.40	0.25	0.09	302	0.60	0.28	0.20	0.16
171	0.50	(0.30)	0.22	0.05	303	0.60	0.28	0.20	0.15
172	0.50	(0.30)	0.24	0.08	304	0.40	0.30	0.18	0.08
173	0.50	0.30	0.15~0.22	0.09	305	0.60	0.36	0.20	0.19
174	0.47	0.35	0.20	0.10	306	0.60	0.40	0.19	0.19
175	0.50	0.30	0.20	0.08	307	0.60	0.40	0.21	0.19
176	0.50	0.50	0.20	0.11	308	0.60	0.40	0.20	0.22
177	0.50	0.35	0.20	0.10	309	0.60	0.30	0.20	0.13
278	0.50	(0.28)	(0.16)	0.09	310	0.60	0.30	0.15	0.08
279	0.50	0.30	0.15	0.15	311	0.60	0.30	0.20	0.17
280	0.55	0.29	0.15	0.09	312	0.60	0.40	0.18	0.15
281	0.60	0.25	0.20	0.12	313	0.60	0.32	0.15	0.15
282	0.60	0.20	0.20	0.12	314	0.60	0.34	0.20	0.19
283	0.60	0.50	0.18	0.21	315	0.56	0.30	0.20	0.12
284	0.60	0.40	0.20	0.19	316	0.55	0.31	0.21	0.12
285	0.59	0.40	0.20	0.16	317	0.60	0.35	0.20	0.14
286	0.60	0.40	0.25	0.14	318	0.60	0.30	0.20	0.16
287	0.58	0.32	0.20	0.15	319	0.60	0.40	0.17	0.15
288	0.60	0.40	0.19	0.15	320	0.60	0.32	0.20	0.15
289	0.60	0.41	0.20	0.21	321	0.58	0.42	0.20	0.16
290	0.60	0.42	0.20	0.18	322	0.59	0.35	0.18	0.19
291	0.58	0.35	0.20	0.17	323	0.58	0.48	0.21	0.15
292	0.58	0.45	0.20	0.13	324	0.60	0.30	0.20	0.12
293	0.60	0.36	0.20	0.12	325	0.60	0.30	0.20	0.12
294	0.56	0.40	0.20	0.18	326	0.60	0.25	0.23	0.12
295	0.58	0.42	0.20	0.18	327	0.60	0.30	0.20	0.16
296	0.56	0.35	0.19	0.15	328	0.56	0.31	0.17	0.13
297	0.60	0.42	0.18	0.19	329	0.58	0.41	0.20	0.14
298	0.59	0.32	0.20	0.11	330	0.45	0.30	0.15	0.09
299	0.60	0.38	0.20	0.15	331	0.57	0.40	0.17	0.15
300	0.60	0.30	0.20	0.15	332	0.60	0.38	0.20	0.18
					333	0.55	0.40	0.20	0.16

- 註 1. 番号は遺物番号を示し、本文、挿図、図版の番号と同じである。
 2. 直径、全厚、孔径の単位はcmで、重量の単位はgである。
 3. 計測数値の中で () 表示のものは残存長を示す。

A 古代 柵列

SA - 1 (Fig.51)

調査区中央部の第Ⅲa層上面で検出した柵列である。検出面の標高は4.020~4.110mで、SF-5の西側に位置し一部重なる。柵は3本検出し、柱間寸法から4本で構成されていた柵列とみられるが、西から2本目の柵は確認できなかった。全長2.88m、柵間寸法は0.90~0.98mを測り、N-63°-Wを示す。柵は残存状態が良好なもので、全長19cmを測り、先端を細く加工するものも見られた。出土遺物は皆無であったが、SF-5と一部重なるため、SF-5に付随するものとみられる。

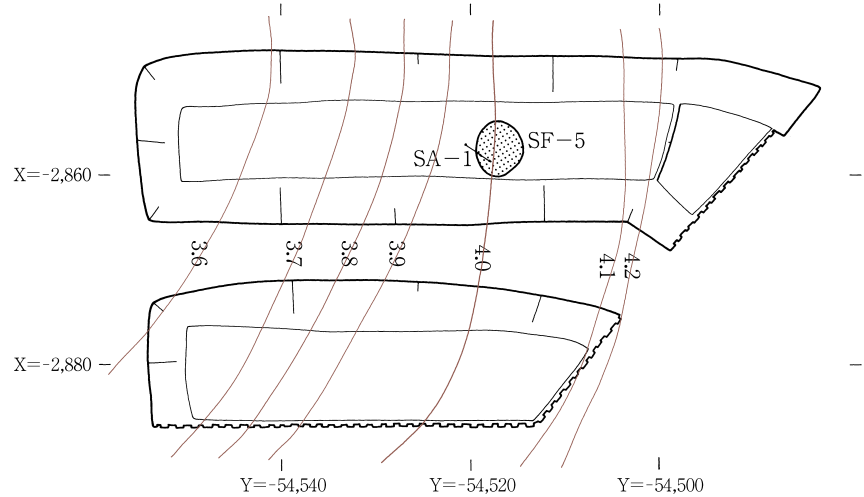


Fig.50 古代遺構配置図 (S=1/800)

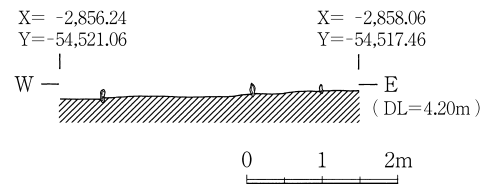


Fig.51 SA-1

祭祀関連遺構

SF - 5 (Fig.52)

調査区の中央部で検出した遺物集中で、東西4.5m、南北6.3mの範囲から遺物がまとまって出土している。検出面は標高4.270~4.464mを測り、東から西に緩やかに傾斜する。出土遺物には祭祀遺物はみられないものの須恵器の甕と土師器の甕の細片がわずかにみられる他は、すべて須恵器の壺で構成され、かつ、炭化物の集中箇所が検出されていることや比較的限定される範囲から遺物がまとまって出土していることなどから何らかの祭祀に関連したものではないかと判断される。SF-5の西方約8mの地点からは丸軋が出土しており、役人が関与したことが推測される。また、SF-5と重なって検出されたSA-1も祭祀に関連したものではないかと考えられる。出土遺物では須恵器5点(336~340)、石製品1点(341)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.53-336~340)

すべて壺である。336は双耳壺の耳部で、長さ8.8cm、全幅4.8cm、全厚1.7cmを測り、肩部とみられる湾曲する器面に貼付けられる。焼成は非常に甘く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。337は長頸壺で、口径15.1cmを測る。頸部は上方に立ち上がり、口縁部は外反して、端部を上方に若干拡

張する。口頸部外面は回転ナデ調整，胴部内面は部分的にナデ調整の痕跡が残るが，その他は摩耗が著しく調整は不明である。焼成は甘く，色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。338は底部の破片で，底径16.2cmを測り，337と同一個体の可能性がある。円盤状の底部に直線的にのびる体部を接合しており，接合部で剥離する。底部外面と内面にはわずかにナデ調整が残る。焼成は甘く，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。339はほぼ完存する長頸壺で，口径9.3cm，底径12.6cm，器高23.8cmを測る。胴部はやや肩が張り，底部にはハの字形に開く高台が付く。頸部はほぼ垂直に立ち上がり，

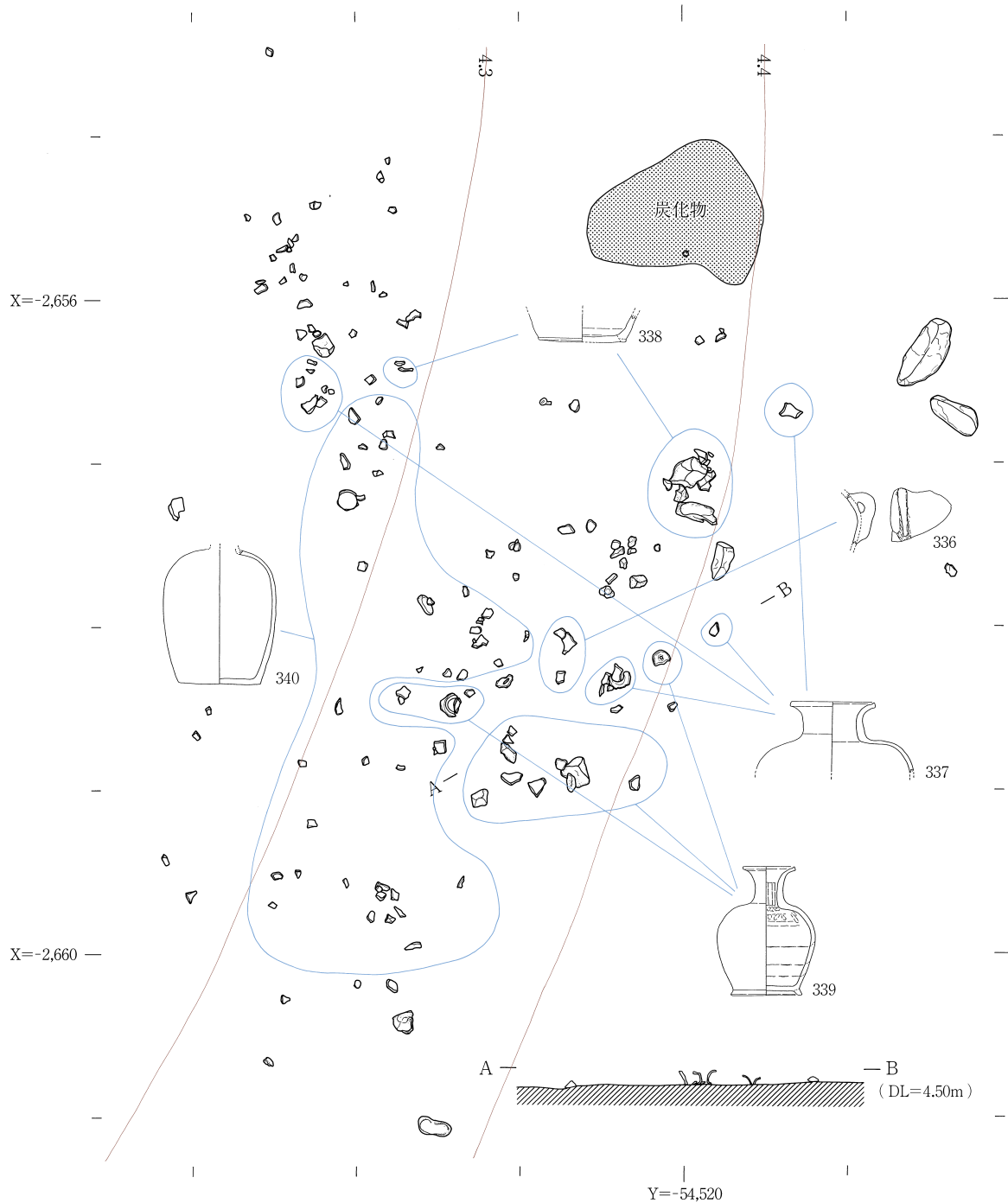


Fig.52 SF-5遺物出土状態

口縁部は外反し、端部を上方に拡張する。頸部内面にはヘラナデ調整、胴部内面と底部にはナデ調整、それ以外は回転ナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。340は口頸部を欠損するもので、底径15.3cm、残存高24.8cmを測る。底部は平底で、胴部は肩が張る。胴部外面には回転ナデ調整を施す。焼成は甘く、色調は、外面が灰色、内面がにぶい橙色を呈する。

石製品 (Fig.53-341)

341は砥石で、一部のみ残存する。残存部で4面を使用し、条痕が残る。石材は砂岩である。

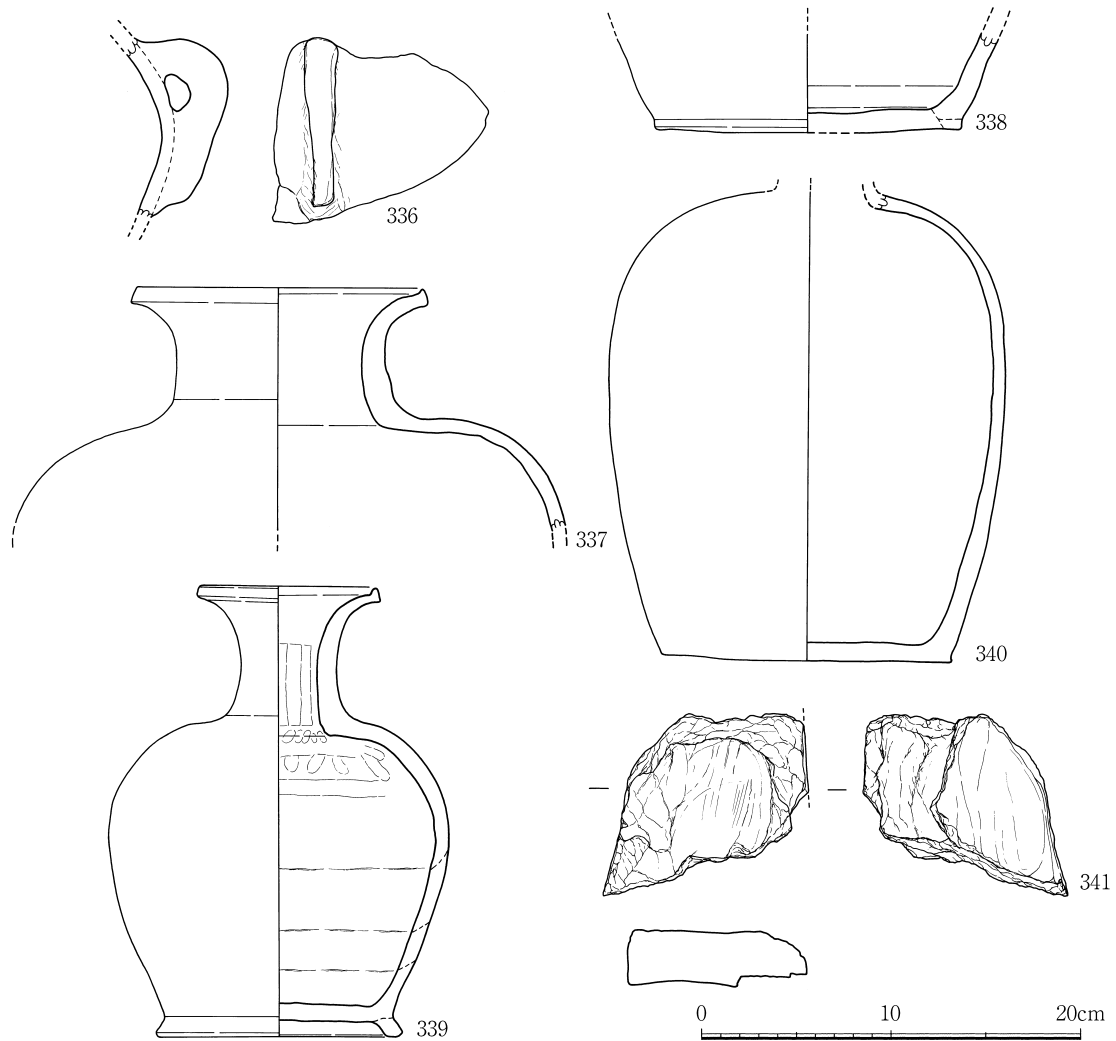


Fig.53 SF-5出土遺物実測図

註

(1) 堆積層の分層については高橋学氏の方法を取り入れた。なお、土壌化作用とは、堆積が終了した後に地表面ができ、植物が繁茂したり、人間活動などによって有機物などが混入し、堆積構造が乱されることである。つまりa層とb層は同時期に堆積した層で、元々はすべてb層であったが、土壌化が表面近くから進行し、b層の上部がa層に変質したと考え、a層とb層をセットとして捉えた。そのためa層とb層の境界は土壌化の及んだ範囲とそうでない部分を示し、遺物包含層はa層に当たる。しかし、a層が削平された場合や、地表

面であった時間が短く十分に土壌化が生じなかった場合にはa層は見られない。また、地表面として安定した時間が長いほど、土壌化が顕著となり、岩屑が薄い場合にはすべて土壌化し、b層が残らない場合もある。さらに、土壌化が複数の層に及び、ある場所で1層だったものが、別の場所で細分されることも考えられる。a'層についてはa層とb層の漸移層である場合と、短い期間の地表面に形成されたa層であった場合がある。c層については岩屑であるがb層とは異なる地層で、a層が削平された場合や、地表面であった時間が短く十分に土壌化が生じなかった場合があるとみられ、b層とは同時に堆積していない可能性も考えられる。

以上の観点を考慮し、今回の調査ではできる限り同時に堆積した層をセットで捉え、さらに土壌化の有無によってa層とb層に分層するように努めた。

また、以下の報告書等を参考とした。

高橋 学『高知県埋蔵文化財センター研修資料』1998

財団法人大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要Ⅻ』1998

第 章 自然科学分析

- 具同中山遺跡群における低地の土地利用状況に関する自然科学分析調査 -

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

具同中山遺跡群は四万十川の支流である中筋川の氾濫原に位置する縄文時代から近世の複合遺跡である。今回の調査区は、本遺跡群東部の自然堤防から後背湿地に向かう斜面に位置する(Fig.54)。発掘調査の結果、古墳時代および古代の遺構・遺物が確認されており、古墳時代に祭祀が行われていたことが推定されている。

本遺跡群の発掘調査では、これまでも当時の土地利用状況や古環境に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査が応用されている。その結果、弥生時代の遺物包含層から少量ながらも栽培種のイネの植物珪酸体が検出されており、調査域ないし集水域近辺で稲作が行われていたことが推定されている。そこで、今回は、これまで実施してきている微化石分析や土壤理化学分析による調査だけでなく、土壤微細形態学的手法を応用することで、より具体的な調査区内の土地利用状況に関する情報を得ることを目的とする。同時に調査区内の遺構から出土した木材の放射性炭素年代測定を実施し、遺構の年代観に関する情報も得る。なお、この木材に関しては、樹種同定も併せて実施する。また、本報告では、今回の調査区の成果と過去の調査成果を総合的に評価し、具同中山遺跡群における古環境変遷について考察を行う。

1. 調査地点の層序

今回の調査区は中筋川の自然堤防から後背湿地にかけての緩傾斜地に位置している。調査区内の堆積物は、主に微粒砂～粘土質シルトからなるが、それぞれの単層は、側方への連続性が高い。これらの堆積物の成因としては、河川氾濫時に溢流堆積したか、あるいは四万十川増水時に中筋川合流点が閉塞してダム化することにより堆積した可能性が高い。発掘調査の成果をみると、調査区の中心から微高地側にかけては祭祀行為が行われていたと推定されており、自然堤防側に生活の中心があったと考えられる。

今回は、低地側(2地点)と微高地側(1・3地点)それぞれ地点を設定し、分析を実施する。各地点の柱状図をFig.55に示す。

後背湿地側の地点(2地点とする)は、調査区北側断面の西端に設定した。2地点は断面の途中から下端まで約2m分を採取している。全体的に青灰色の粘土質シルトからなる。下端に近い古墳時代の堆積層とされる部分では、炭化物や腐植が多くなり土壤化の傾向が窺われる。また、古代の堆積物とみられる層位(試料番号11)の上位でも、生物擾乱や土壤化の傾向が下部で明瞭ではないが現れている。

微高地側(1・3地点とする)は、調査区北側断面の東側に設定した。試料採取の都合上(堆積層の安

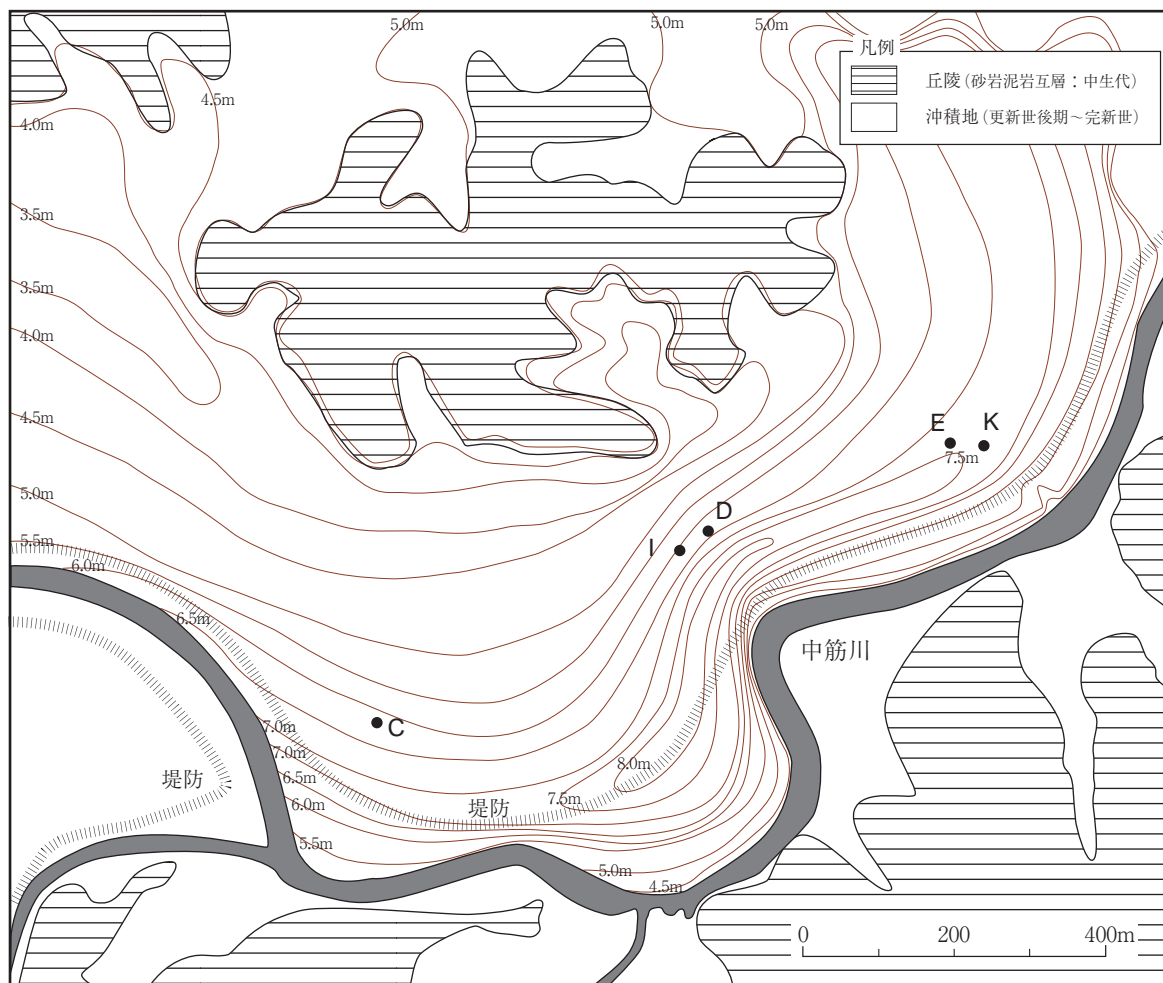


Fig.54 既往調査地点位置図

アルファベット記号は既往の調査場所を示す。各記号名は、具同中山遺跡群Ⅱ-2 (廣田・畠中編2000) に記載されている場所の記号名を踏襲。今回の調査区はKに当たる。(提出された図を修正した上で、現在の等高線などを書き加えた。-廣田)

定を図るため発掘調査において堆積層の途中に段差をつけているため)、上部が3地点、下部が1地点と便宜上している。これらの地点も全体的に粘土質シルトからなるが、後背湿地側に比較して砂質が強い。生物擾乱は低地側(2地点)よりも顕著であるが、上部(3地点)では特に明瞭にみられる。微高地側でも、古代・古墳の堆積層とされる層位付近では炭化物片や腐植の集積がみられる。

2. 試料

土壌試料は、2地点と1・3地点からそれぞれ採取した。試料の採取層位はFig.55に示す。試料は、軟X線写真撮影を行うことを考慮し、できるだけ長さ20cmの柱状の試料を連続して採取した。これらの試料は持ち帰って整形し、軟X線写真撮影用の試料とした。残りの部分から微化石や土壌理化学分析用試料を採取し、分析に用いた。軟X線写真撮影は試料の状態が良好なものについて、可能な限り実施した。また、微化石分析や土壌理化学分析に関しては、目的を考慮して、腐植が多く、土壌化している層を中心に分析を行った。分析を行った試料については、柱状図などとともにFig.55に示した。

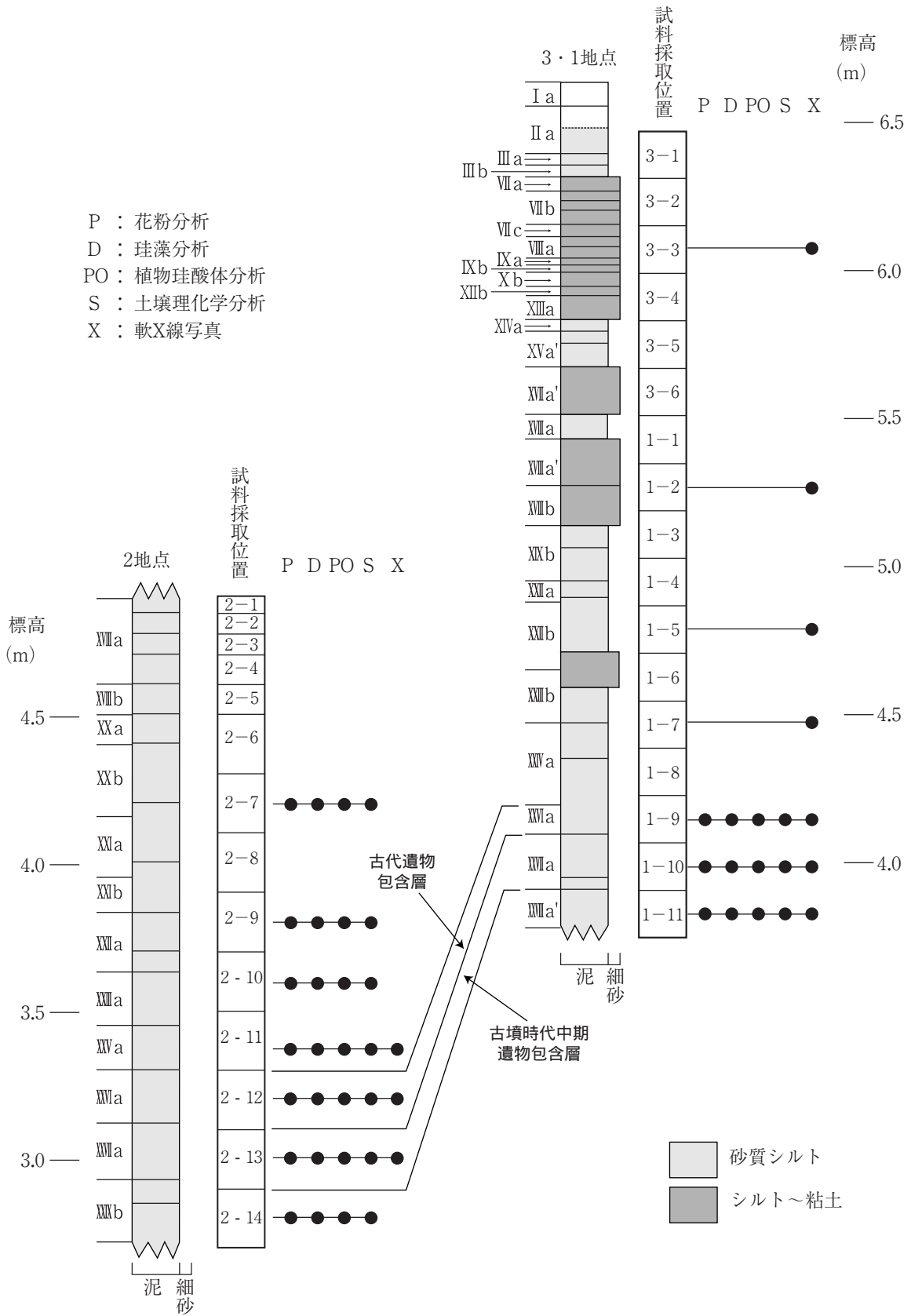


Fig.55 調査地点の層序

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、(株)地球科学研究所に依頼した。前処理として、酸-アルカリ-酸洗浄を行い、測定は加速器質量分析(AMS)を用いている。

(2) 堆積物微細構造軟X線分析

土層断面より採取したブロック状の試料から、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料を分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影は、ニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に同定・計数する。種の同定は、Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1986,1988,1991a,1991b), Krammer, K. (1992), Reichardt, E. (1995), Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996), Lange-Bertalot, H.etal. (1996), Metzeltin, D. & Witkowski, A. (1996)などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。

(4) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、図示する。図・図版・表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(5) 植物珪酸体分析

試料約7gを秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステイト、比重2.4)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しや

すい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリユラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

(6) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。

(7) 土壤理化学分析

今回の分析調査では、土壤理化学分析として腐植含量, リン酸, 鉄, マンガンの含量を測定する。腐植含量はチューリン法, リン酸分析は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法, 鉄とマンガンは, DCB溶液抽出-原子吸光光度法で行った。

試料を風乾後, 軽く粉碎して2.00mmφのふるいを通過させる(風乾細土)。この一部を細かく粉碎し, 0.5mmφのふるいを全通させる(粉碎土)。さらに, 風乾細土試料の一部をタングステンカーバイド粉碎機で粉碎し, 微粉碎試料を作成する。なお, 風乾細土試料について, 加熱減量法により分析試料水分を求める。

腐植含量の測定は, 粉碎土0.100~0.500gを100ml三角フラスコに秤りとり, 0.4Nクロム酸・硫酸混液 10mlを正確に加え, 約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後, 0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に, 0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から, 乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求め, 1.724を乗じて腐植含量を算出する。

リン酸の測定には, 風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し, はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後, 過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後, 水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し, リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)を求める。

鉄とマンガンの測定には, 粉碎土0.50gにDCB抽出液30mlを添加して, 16時間振とうする。振とう後, 0.4%高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後, 遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し, 干渉抑制剤を加えた後, 原子吸光光度計により鉄とマンガンの濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から, 乾土あたりの鉄(Fe₂O₃%)とマンガン(MnO%)の含量をそれぞれ求める。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果をTab.2に示す。この中で¹⁴C年代は、試料の¹⁴Cと¹²Cの比から単純に現在(西暦1950年)から何年前(BP)かを計算した年代を示す。半減期としては5,568年を用いている。補正¹⁴C年代は、試料の炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で、算出した年代である。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料の測定¹⁴C/¹²Cを補正するための¹³C/¹²Cの比率(千分偏差)である。暦年代は、過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動に対する補正を行った値である。補正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの測定、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代との比較により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。なお、補正に用いたデータベースは、INCAL98 Radiocarbon Age Calibration(1998年版)である。

分析した3点はいずれも値が近似し、補正前の年代で約1,650年前、同位体補正を行った年代値では約1,600年前を示している。

Tab.2 放射線炭素年代測定結果

番号	試料の質	¹⁴ C年代 (B.P)	$\delta^{13}\text{C}$ (Permil)	補正 ¹⁴ C年代 (B.P)	暦年代 (95%区間推定)		Code No.
					cal AD	cal BP	
SB-1 P-1	炭化材	1690±40	-27.9	1650±40	cal AD 330~465 cal AD 480~520	cal BP 1620~1485 cal BP 1470~1430	Beta-140037
SB-1 P-2	炭化材	1630±40	-28.6	1570±40	cal AD 410~585	cal BP 1540~1365	Beta-140038
SB-1 P-3	炭化材	1660±40	-29.2	1600±40	cal AD 390~550	cal BP 1560~1400	Beta-140039

(2) 堆積物微細構造軟X線分析

軟X線写真をPL.43~52に示す。以下に軟X線写真で観察された主な構造について記載する。

3地点・1地点

試料番号3-3(PL.43)：微~細粒砂混じり粘土・シルトの泥質堆積物からなり、上方細粒化の級化を示す数cmの堆積ユニットが確認される。泥質堆積物全体に擾乱作用が及んでおり、不明瞭なベッド状の構造が認められる。ベッド状の構造の大きさは比較的揃っており、3~5mm前後の球形を呈するが、ほとんどのものが崩れている。この構造は上位から3cm, 11cm前後の層準で顕著に発達し、腐植の集積がみられる。また、これらの層準直下の堆積物はベッド状の構造がやや不明瞭となり、点状の無機成分の沈着が認められる。試料中全体にやや斜めに傾斜する縦方向の細い植物根が多数認められる。この植物根の形状は栽培種のイネの根茎に近似する。

試料番号1-2(PL.44)：粘土・シルトを主体とする泥質堆積物からなるが、微粒砂を含む層準も確認される。試料全体に擾乱作用が及び、上部の2層準で著しい。不明瞭なベッド状の構造が認められるが、全体に崩れている。植物根の形状は細いもののほかに太いものも認められるようになる。また、植物根に沿って無機成分が沈着する状況が捉えられる。

試料番号1 - 5(PL.45)：粘土・シルトを主とする泥質堆積物からなる。塊状構造を呈する。試料上部で有機物を多く含み、下部で碎屑物が卓越する。上部の有機物の多い層準では堆積構造が変形している。下位の堆積物が上位堆積物中に混入するロード構造が確認される。この変形構造の原因としては、地震動の可能性がある。堆積物中には植物根が一部確認されるが、これらは経年変化の過程で無機成分に置き換わっており、写真上は白くみえる。また、それ以外の植物根は経年変化の過程で不明瞭となっている。

試料番号1 - 7(PL.46)：基本的には泥質堆積物からなり、上部で微粒砂および無機成分の沈着が認められる。全体に弱い葉理構造が認められる。この葉理を断絶するように縦方向および横方向の不明瞭な植物根あるいは植物遺体が認められる。上部の砂・細礫が混じる層準は擾乱作用の影響が及んでおり、葉理は著しく乱れる。このような構造から、本堆積物は池沼のような場所で水成堆積物とみられる。また、層準によって細粒砂が混じることから、氾濫の影響が及ぶことがあったと考えられる。当時の池沼には水生植物類が分布していたことが推定される。

試料番号1 - 9(PL.47)：シルト・粘土の泥質堆積物からなり、中部・上部層準で微粒砂～細粒砂が混じり、無機成分が沈着する。また、砂が多くなる層準直下では腐植の量比が高くなる。これらの堆積物は変形しているようにみえる。層位的には後述する2地点試料12～11で認められる変形構造に対比される可能性がある。また、生物擾乱作用が及んでいる。試料全体に不明瞭な葉理が認められるが、擾乱作用により乱れる。全体に縦方向・横方向の植物根・植物遺体が認められる。植物根の径は太く7mm前後のものから、1mm以下のものまで認められる。

試料番号1 - 10(PL.48)：シルト・粘土からなり、粘土分の卓越する層準とシルト分の卓越する層準とが認められる。全体に葉理構造が認められるが、生物擾乱作用により多少乱れる。全体に縦方向・横方向の植物根・植物遺体が認められる。基本的な構造は試料番号1-9に類似するが、試料最下部では擾乱作用が顕著になる。この層準を境に環境が多少変化した可能性がある。また、本層準前後が古代の遺物の出土層準に相当する。

試料番号1 - 11(PL.49)：微粒砂混じりのシルト・粘土からなる泥質堆積物からなる。葉理構造が認められるが、生物擾乱作用により乱れる。また、生物擾乱作用は最上部・中下部で顕著であり、特に上部で顕著である。これらの層準では腐植が集積し、ベッド状の構造が認められるが、いずれも崩れている。全体に植物根が認められる。これらの層準は水成堆積後に離水し、当時の地表面となっていた可能性が高い層準である。このうち、最上部の擾乱作用はベッド状の構造が比較的揃っていることから、人為的な影響も及んでいる可能性があり、当時の地表面に相当する可能性がある。

試料番号2 - 11(PL.50)：上部は無機成分の沈着する微粒砂～泥からなり、その下位は有機物を多く含む泥質堆積物からなる。これらの堆積物には弱い葉理構造が認められるが、擾乱作用により乱れる。特に、下部の泥質堆積物は擾乱作用が及んでいる上に、さらに変形している。この変形は下位層準に連続しており、フレーム構造を呈する。また、縦方向にのびる植物根が比較的密に認められる。

試料番号2 - 12(PL.51)：上部は泥質堆積物，下部が砂混じり泥質堆積物からなる。全体に擾乱作用が及んでおり，特に，中下部で著しくなる。上部の泥質堆積物は変形している。この変形は上位より連続するフレイム構造であり，その下位にロード構造が認められる。これら変形構造は一連のものと考えられ，その原因としては，地震動による変形の可能性がある。

試料番号2 - 13(PL.52)：泥質堆積物からなる。下部で砂質分が多くなる。葉理構造が認められるが，生物擾乱作用の影響等で不明瞭である。縦方向・横方向の植物根が認められる。

(3) 珪藻分析

珪藻分析結果をTab.3に示す。珪藻化石は，いずれの試料からもほとんどみられない。珪藻化石の少ない理由は，花粉化石・植物珪酸体など他の微化石が産出することから，堆積後に何らかの理由で選択的に溶解したと思われる。わずかに産出した珪藻化石の中には，好止水性種(止水域で生育する)のAchnanthes crenulata や好流水性種(流水域で生育する)のAchnanthes inflata が含まれる。本遺跡が中筋川の氾濫原に位置することから，1地点9～11層と，2地点7・9・10～14層の堆積物は，なんらかの水の影響を受けた可能性が指摘できる。

Tab.3 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	1地点			2地点						
	塩分	pH	流水		9	10	11	7	9	10	11	12	13	14
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	1	4	3	1	-	-	1	-	2	3
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	-	2	-	-	1	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性	pH：水素イオン濃度に対する適応性	C.R.：流水に対する適応性
Ogh-ind：貧塩不定性種	al-bi：真アルカリ性種	l-ph：好止水性種
Ogh-unk：貧塩不明種	al-il：好アルカリ性種	ind：流水不定性種
	unk：pH不明種	r-ph：好流水性種
		unk：流水不明種

環境指標種群

S:好汚濁性種, T:好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T., 1986)
 R:陸生珪藻 (RA:A群, 伊藤・堀内, 1991)

註

試料番号については地点番号を省略しており，実際は1-9等となる。

(4) 花粉分析

結果をTab.4・5, Fig.56に示す。1地点では花粉化石は全く検出されず，シダ類孢子がわずかに認められる程度である。2地点も全体的に保存状態が悪いが，特に，試料番号2-13, 2-14で顕著であ

り、花粉化石の検出数が少ない。試料番号2-7~2-12はシダ類胞子の割合が高い。木本花粉と草本花粉の比率は、ほぼ同じか、やや木本花粉の方が多い。木本花粉は、ツガ属、モミ属、マツ属、コウヤマキ属など針葉樹の割合が高いのが特徴である。広葉樹花粉は、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属などが検出される。草本花粉・シダ類胞子では、イネ科とカヤツリグサ科の割合が高く、

Tab.4 花粉分析結果1

種 類	1 地点			2 地点							
	試料番号	1-9	1-10	1-11	2-7	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14
木本花粉											
マキ属	-	-	-	5	5	3	2	-	1	-	-
モミ属	-	-	-	36	29	12	47	17	1	-	-
ツガ属	-	-	-	86	86	73	58	65	12	1	-
トウヒ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	-	-	-	25	18	18	10	9	1	-	-
マツ属(不明)	-	-	-	29	24	4	20	8	3	-	-
コウヤマキ属	-	-	-	13	12	6	25	9	2	-	-
スギ属	-	-	-	5	4	-	3	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	4	3	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	4	1	5	1	-	1	-	-
サワグルミ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	1	2	2	3	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	11	6	1	4	6	1	-	-
ブナ属	-	-	-	-	3	-	1	2	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	39	13	11	27	34	10	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	10	4	3	3	4	2	-	-
シイノキ属	-	-	-	5	20	2	10	6	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-
キハダ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-
ミズキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	4	1	2	3	2	-	-	-
ハイノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-

サナエタデ節ーウナギツカミ節，イノモトソウ属などもみられる。また割合は低いが，ガマ属，ミクリ属，ミズワラビ属などの水生植物も検出される。

Tab.5 花粉分析結果2

種 類	1 地点			2 地点							
	試料番号	1-9	1-10	1-11	2-7	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14
草本花粉											
ガマ属		—	—	—	3	36	9	—	2	—	—
ミクリ属		—	—	—	—	11	1	—	—	—	—
イネ科		—	—	—	260	65	61	83	22	10	1
カヤツリグサ科		—	—	—	23	87	30	18	9	7	—
サナエタデ節ーウナギツカミ節		—	—	—	18	18	39	8	8	5	1
ソバ属		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
アカザ科		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
ナデシコ科		—	—	—	3	2	—	4	1	—	—
キンポウゲ科		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
アブラナ科		—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
バラ科		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
マメ科		—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
アカバナ属		—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
アリノトウグサ属		—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
セリ科		—	—	—	15	2	1	1	—	1	—
ヨモギ属		—	—	—	3	1	3	2	1	—	—
オナモミ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
キク亜科		—	—	—	1	—	—	7	—	—	—
タンポポ亜科		—	—	—	2	—	—	—	1	1	—
不明花粉		—	—	—	12	8	4	6	1	3	—
シダ類胞子											
イノモトソウ属		15	5	12	80	80	80	99	125	68	41
ミズワラビ属		—	—	—	48	9	31	73	19	4	—
他のシダ類胞子		23	31	65	687	375	224	401	446	125	51
合 計											
木本花粉		0	0	0	287	233	147	220	164	35	3
草本花粉		0	0	0	333	223	144	126	45	26	2
不明花粉		0	0	0	12	8	4	6	1	3	0
シダ類胞子		38	36	77	815	464	335	573	590	197	92
総計 (不明を除く)		38	36	77	1435	920	626	919	799	258	97

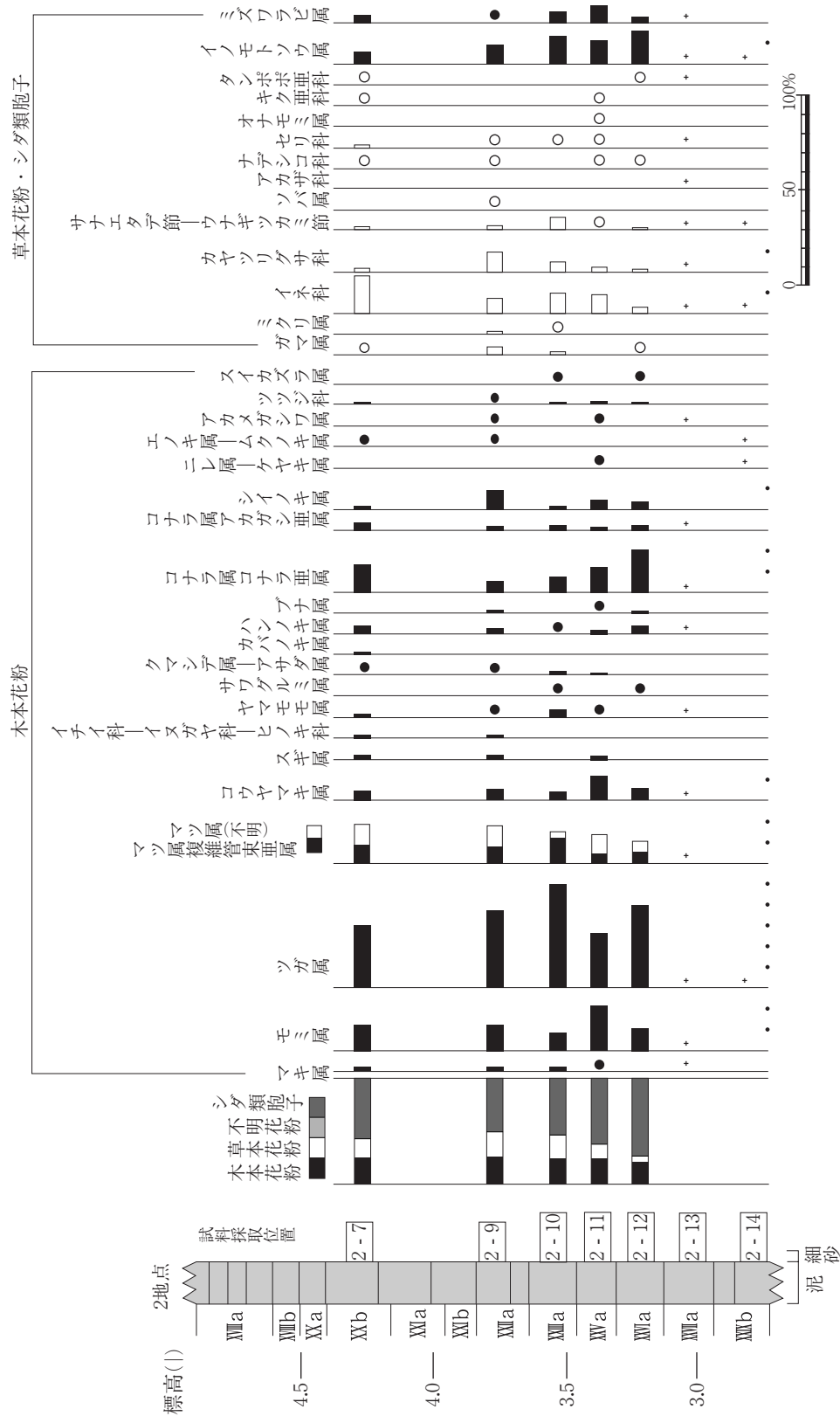


Fig.56 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(5) 植物珪酸体分析

結果をTab.6, Fig.57・58に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

・1・3地点

タケ亜科の割合が非常に高く、その他ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。その他樹木起源の植物珪酸体である第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン, 1981)が検出される。古墳時代の試料番号2-11では第Ⅲグループ、古代の試料番号9中では第Ⅳグループの検出個数が多い。第Ⅲグループは「Yの字」状あるいは「くの字」状、第Ⅳグループは不規則な紡錘形を呈する。

・2地点

試料番号2-14~2-11ではタケ亜科の産出が顕著であり、ススキ属やイチゴツナギ亜科がわずかに、ヨシ属が稀に認められる。また、栽培植物のイネ属が試料番号2-14から出現するが、試料番号

Tab.6 植物珪酸体分析結果

種 類	1 地点			2 地点							
	試料番号	1-9	1-10	1-11	2-7	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	—	—	—	2	—	—	1	—	—	—	1
タケ亜科	174	186	262	17	9	2	26	36	66	212	
ヨシ属	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ウシクサ族コブナグサ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	
ウシクサ族ススキ属	2	9	10	4	—	—	2	—	2	10	
イチゴツナギ亜科	1	1	—	1	2	2	—	—	2	10	
不明キビ型	12	26	22	10	4	2	5	4	8	15	
不明ヒゲシバ型	24	12	21	1	1	—	7	1	9	11	
不明ダンチク型	4	1	14	1	2	2	3	1	4	4	
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	—	—	—	62	15	19	48	23	—	—	1
タケ亜科	106	102	108	17	10	19	71	118	101	96	
ヨシ属	6	—	2	1	—	—	2	2	—	—	
ウシクサ族	2	—	—	14	4	6	9	1	4	—	
不明	6	15	5	64	16	20	33	14	2	7	
合 計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	221	235	329	36	19	8	44	42	91	263	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	120	117	115	158	45	64	163	158	107	104	
総 計	341	352	444	194	64	72	207	200	198	367	
樹木起源珪酸体											
第Ⅲグループ	—	11	44	106	59	13	159	47	22	18	
第Ⅳグループ	16	2	—	2	—	—	3	3	—	3	

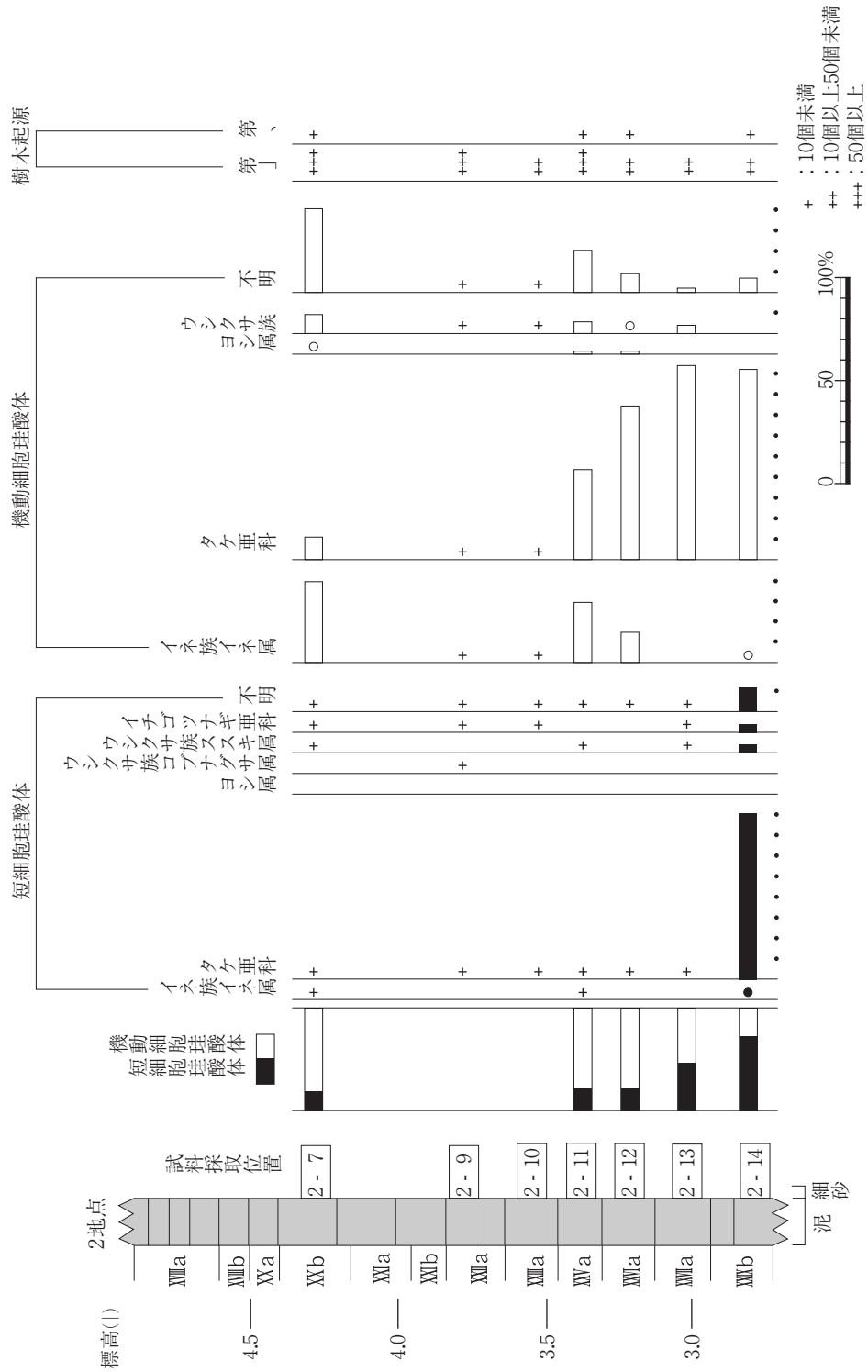


Fig.57 2地点植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

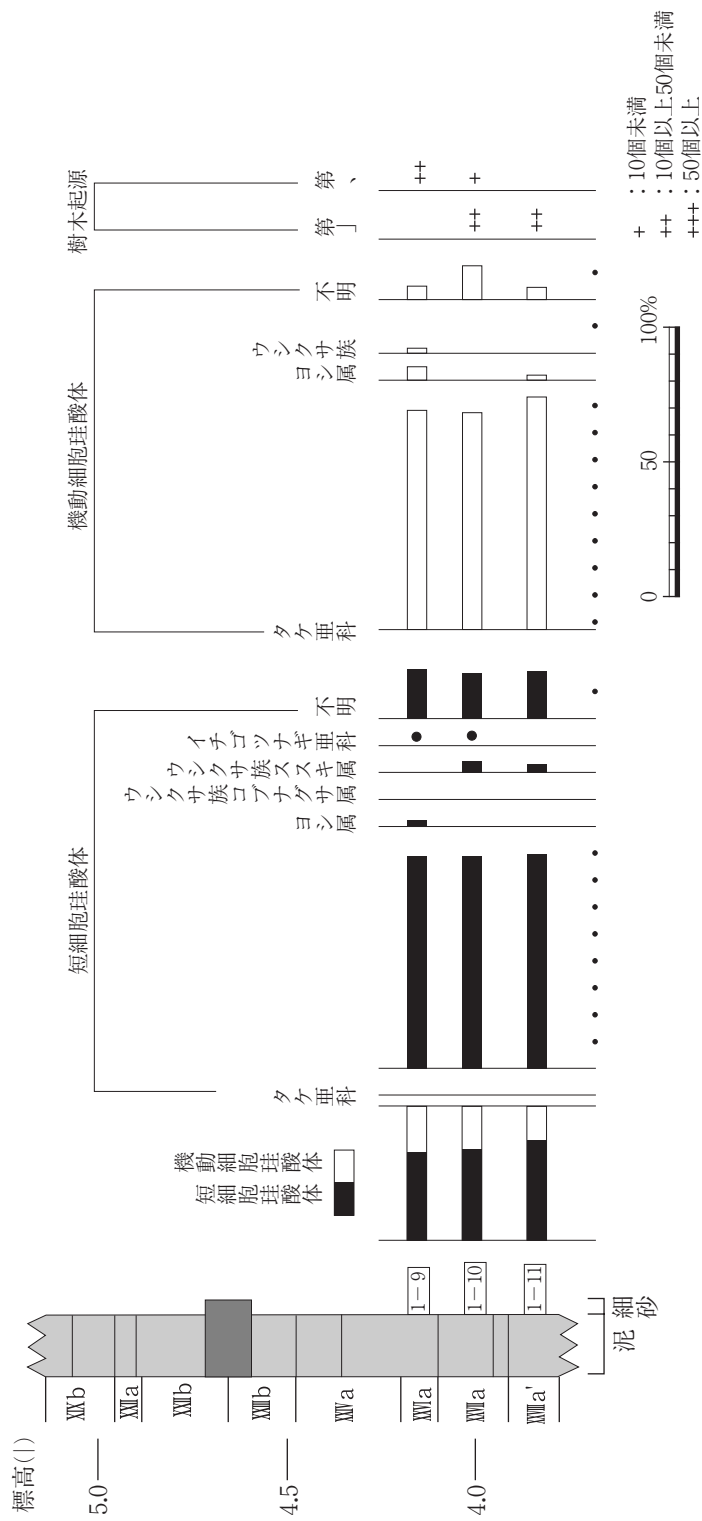


Fig.58 3・1地点植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

2-12より上位でイネ属機動細胞珪酸体が多くみられ、特に試料番号2-7中で顕著である。

本地点でも、前述の樹木起源第Ⅲグループや第Ⅳグループが検出され、特に第Ⅲグループが試料番号2-11・2-7で多い。

(6) 樹種同定

柱材は全て広葉樹のアワブキ属に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・アワブキ属 (Meliosma) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2~6個が宝珠方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5前後、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で異性Ⅱ型、1~4細胞幅、1~50細胞高。

(7) 土壤理化学分析

結果をTab.7に示す。どの試料も層位ごとに変化がみられるが、極端に変化はしていない。腐植含量は、ほぼ肉眼観察に呼応している。植物遺体がみられる層位や腐植質で黒っぽくなっている層位で値が高く、特に、古墳時代とされる層位で高くなっている。リン酸は、古代や古墳時代の遺物が検出される層位で高くなっており、特に、古墳時代の層位で高くなっている。鉄は、堆積物中に酸化鉄斑がみられる試料でいずれも高くなっているが、特に試料番号2-10で高い。また、マンガンは、全体的に少なく大きな変化はないが、鉄が多い試料で高くなる傾向がある。

Tab.7 土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量 (%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	DCB可溶		備考
					Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	
1地点							
1-9	HC	5Y4/2 灰オリーブ	1.01	1.44	1.18	0.04	
1-10	HC	5Y4/2 灰オリーブ	1.19	1.17	0.95	0.04	
1-11	HC	5Y4/2 灰オリーブ	0.94	1.83	1.11	0.04	

2地点							
2-7	HC	5Y4/2 灰オリーブ	1.20	0.71	1.14	0.02	
2-9	HC	5Y5/2 灰オリーブ	1.33	0.72	1.31	0.02	酸化鉄斑有り
2-10	HC	5Y4/3 暗オリーブ	1.15	1.65	3.73	0.05	酸化鉄斑富む
2-11	HC	5Y4/2 灰オリーブ	1.12	0.99	1.54	0.02	
2-12	HC	5Y4/2 灰オリーブ	1.30	0.67	0.77	0.01	
2-13	HC	5Y4/1.5灰~灰オリーブ	1.41	1.97	1.60	0.03	
2-14	HC	5Y4/1.5灰~灰オリーブ	1.24	0.92	0.49	0.01	

? 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖による。

@ 土性：HC・・・重埴土(粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%)

5. 考察

(1) 調査区近辺の環境

今回の調査地点の堆積物は、軟X線写真観察の結果から水成堆積した堆積物であることが確認される。しかし、珪藻化石はほとんど検出されなかった。これは堆積時に珪藻化石があまり取り込まれない環境下におかれていたか、あるいは堆積物の風化が進む際に溶解したなどの理由が考えられるがはっきりしない。ここでは堆積物の成因については、主に堆積構造に基づいて推定する。

堆積物の層相をみると、微高地に近い1・3地点と低地側の2地点では若干異なり、1・3地点は、全体的に生物擾乱の痕跡が認められるが、古墳時代と古代の包含層、および最上部で特に明瞭で、腐植も形成されている。また、古墳時代と古代の包含層ではタケ亜科の植物珪酸体が多く検出される。このことから、1・3地点は基本的には草地であったが、古墳時代と古代の包含層では堆積速度が遅かったため、長期間にわたって地表面であったと考えられる。このため、タケ亜科などのイネ科植物が生育して腐植が作られたと考えられる。

一方、後背湿地に近い2地点ではやや様相が異なる。最下部にあたる古墳時代の包含層は花粉の保存が悪く、腐植が発達する。リン酸の値は高く、生物擾乱の痕跡が認められる。また、植物珪酸体ではタケ亜科が多産する。このような状況からすると、1・3地点と同様長期間にわたって地表面であったことが考えられる。しかし、古墳時代包含層より上位では、湿地的環境になり、水生植物なども認められるようになったと推測される。特に古代包含層およびその上位層では、栽培種のイネ属植物珪酸体も多産しており、水田耕作土であった可能性が高いと思われる。

草本類の花粉化石には、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節が検出される。これらは遺跡周辺に草地を作っていたものと考えられる。また、ガマ属、ミクリ属などの水生植物は、後背湿地などに生育していたと考えられる。なお、花粉化石が少ない1地点や2地点の下部ではタケ亜科の植物珪酸体が多産する傾向にあり、これらは負の相関関係にある。花粉化石の保存が悪い理由の一つに好氣的状況下による酸化分解があることから、花粉化石が分解される乾燥した時期には水生植物などはなく、タケ亜科が地表を覆っていた可能性が考えられる。

栽培のために渡来した種類は、イネ属とソバ属である。イネ属の植物珪酸体は2-7~2-12で多産することから、低地で水田耕作が行われていた可能性がある。特に試料番号2-10では、腐植やリン酸、鉄、マンガンが高く、植物根の跡や酸化鉄がみられ、生物擾乱が著しい。このことから、試料番号2-10付近は地表面であった可能性があり、水田耕作が行われていた可能性がある。また、ソバ属の花粉化石がみられることから、当時のソバ栽培も推定される。

(2) 周辺森林植生

これまで行われた花粉分析の成果をみると、アカガシ亜属・シイノキ属が多産し、この他にもマキ属・コウヤマキ属・ヤマモモ属・アカメガシワ属・ハイノキ属・テイカカズラ属など暖温帯を中心に分布する種類が検出されていた。しかし、今回の結果は、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などが多い。針葉樹花粉やシダ類胞子は、広葉樹花粉と比べると風化に対して強い(徳永・山内, 1977)。

今回は全体的に保存が悪いことから、風化に対して強い針葉樹花粉やシダ類胞子が多く残った可能性がある。

検出された針葉樹花粉は温帯性針葉樹に由来すると考えられるが、これらは暖温帯上部から冷温帯下部にかけて森林を構成する種類である。高知平野では、約4,000年前以降になると気温の低下・多雨化・人間活動などを原因としてモミ属・ツガ属・アカガシ亜属・シイノキ属の花粉化石が変動するとされている(中村, 1965; 中村・山中, 1982)。また, 山中ほか(1992)は、過去にはモミ・ツガが暖温帯にもかなり広く分布していたと考えられるとしている。現在でも四国地方には、海拔300~1,000mにカシ類とともにモミ・ツガから構成される林分が認められており、本地域でも今ノ山山頂部にこのような植生(コガクウツギーモミ群集典型亜群集)が残存するとされている(宮脇編著, 1982)。このことから、周辺の森林植生は、基本的にはアカガシ亜属・シイノキ属などからなる暖温帯性の広葉樹林であったが、山地を中心に、モミ・ツガなどの温帯針葉樹林が分布していたと考えられる。

なお、植物珪酸体分析では、広葉樹起源の植物珪酸体が検出されている。このうちⅢ型はY字型の珪酸体でブナ科、タイザンボク、イスノキなどみられる。また、Ⅳ型は表面が網目状になる塊状の珪酸体で、モクレン属、シイノキ属、ツツジ科などにみられ、タブノキもⅣ型に類似する珪酸体を作る(近藤・ピアスン, 1981)。今回検出された珪酸体は、当時生育していたアカガシ亜属・シイノキ属をはじめとする樹木に由来すると考えられる。なお、杉山・早田(1994)は、九州各地でシイノキ属やクスノキ科の植物珪酸体を検出している。この中でもクスノキ科は花粉化石では検出されない種類なので(花粉外膜が風化に対して非常に弱い)、今後樹木珪酸体の分類が進めば、花粉分析と組み合わせることによってより詳細な植生復元が可能になることが期待される。

照葉樹林や温帯針葉樹林の林床は薄暗くて湿気も多いため、シダ類が多く生育する。シダ類胞子が多産するのは、先に述べたような保存状態によると考えられるため、結果に現れているように優占していたとは考えにくい、林床を中心にシダ類が生育していたものと考えられる。

なお、SB-1から検出された柱材は全てアワブキ属であった。このような産状は選択的に利用された可能性がある。アワブキ属のうち、落葉広葉樹のアワブキはやや重硬であるが、狂いやすく、また脆い。一方、常緑広葉樹のヤマビワは、比較的軽いが緻密で折れ難い。そのため、いずれも建物の柱材としては適材とはいえない。このような材質にも関わらず利用されている背景には、建物の性格が関係していると考えられる。しかし、同様の調査事例が少ないため、現時点では断定できない。今後さらに資料を蓄積したい。

6.まとめ (具同中山遺跡群の古環境変遷)

具同中山遺跡群は、中筋川北側の自然堤防から後背湿地にかけて立地しており、ここでは過去に調査が行われてきた地域の古環境変遷に関する情報に基づいて、本地域における古環境変遷について説明する。本遺跡群において自然科学分析調査が行われた地点の層序を模式柱状図としてFig.59に示す。

(1) 層序

各地点で認められた堆積層は、珪藻化石の産状および岩質と考古遺物からⅠ～Ⅷ層に区分される。以下にⅠ～Ⅷ層の推定される堆積環境を述べる。

層(中世～現代)：自然堤防と考えられる砂質シルトと、これと同時異相である後背湿地堆積物のシルト～粘土質シルトで構成される。自然堤防堆積物はK・E・C地点で顕著に観察される。D・I地点では、自然堤防堆積物を構成する砂質シルト層が認められず、後背湿地泥層が累重している。これらのことから、K・E・C地点は自然堤防に、D・I地点は後背湿地に位置していることがわかる。

層(古代)：後背湿地泥層で構成される。相対的に高所に位置するL地点で遺構・遺物が検出されている。

層(古墳時代)：後背湿地泥層で構成される。層厚は、相対的に高所に位置するL地点に向かって減少していく傾向が認められる。

層(弥生時代)：後背湿地泥層で構成される。

V層(縄文時代晩期?)：後背湿地を構成すると考えられる有機質泥層で構成される。上位のⅣ層および下位のⅥ層が灰色を呈する後背湿地泥層であるのに対し、V層は有機質を多量に含む黒色泥層からなる。この時期、堆積環境が変化したことが推定される。

層(年代不明)：珪藻化石の産状および岩質から、干潟の潮間帯上部～潮上帯に位置する塩性湿地の堆積物と推定される。

層(年代不明)：珪藻化石の産状および岩質から、干潟の潮間帯を構成する堆積層と推定される。

(2) 古環境変遷

本遺跡群の層序は、上記の通り、大きく6つの層に区分することが可能であり、各層堆積期の古環境について述べる。

層堆積期：今回の調査区の西側に隣接するE地点標高-1.2m以深の堆積物の堆積期が相当する。当時の調査地域は中筋川河口に広がる干潟の潮間帯に位置していたことが推定される。現段階では年代に関する情報が不足している。縄文時代前期には中筋川上流の有岡付近まで海が進入していたことが推定されている。このことから、本層は海退期に形成されたものの可能性が強い。

層堆積期：本時期の堆積物は有機物に富んだ堆積物からなる。この堆積物中の珪藻化石群集は淡水性種が卓越するが、その構成種には好塩性の種類が数種認められる。このことから本時期には、調査地域一帯は河川堆積が進行し、干潟後背の塩性湿地のような場所となっていたことが推定される。

層堆積期：河川の堆積作用が卓越する時期である。この時期には河道に近いE地点では河川の氾濫堆積物が厚く堆積し、河道より離れた場所にあるI・D地点側は後背湿地の様相を呈しており、そこにはヨシ属などの大型の抽水植物が繁茂しており、自然堤防側の比較的乾燥した場所にはス

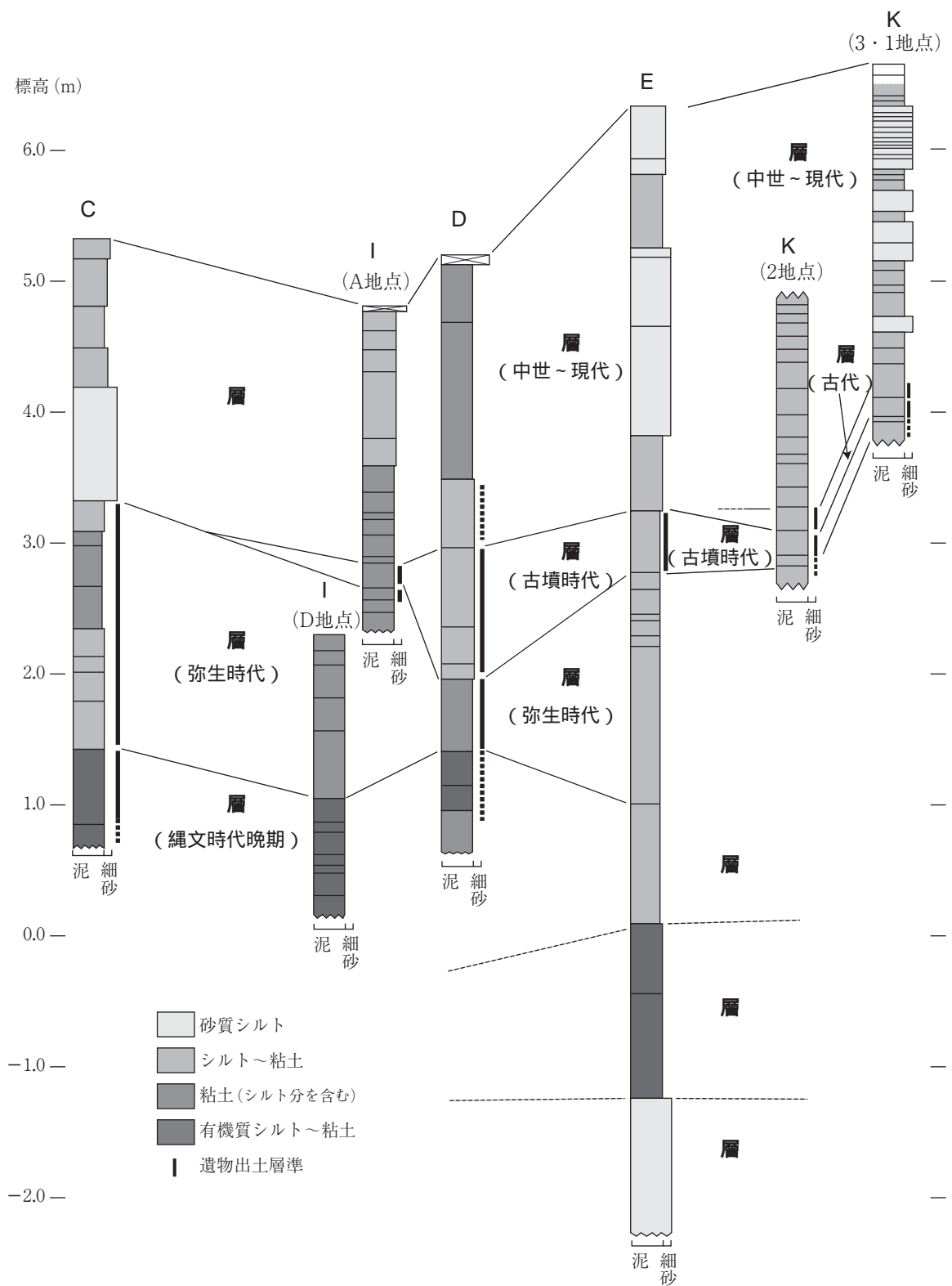


Fig.59 具同中山遺跡群調査地域の層序

スキ属などが繁茂している。年代観は上限が縄文時代晩期であり、本時期に現在と同様な地形が広がっていたことが推定される。

層堆積期：本時期には、弥生時代も基本的には河川の後背湿地のような状態となっており、流路に近いC・E・K地点では、河川により運ばれてきた浮遊物質(シルト・粘土)が流出し堆積し、堤防を形成していった。ただし、E地点ではこの段階で河川の流路変更や流水の流入より一時的に浸食されている可能性もある。一方、後背湿地側にも逸流堆積物が堆積しており、下位層の時期に比較して堆積速度が速く、泥質堆積物の堆積が進行し、自然堤防が発達している状況が窺える。时期的には、出土遺物の時代性から弥生時代頃と推定される。

本時期の堆積物からは、栽培種のイネ属の植物珪酸体が検出されるようになる。ただし、検出される地点は自然堤防から後背湿地にかけての斜面付近に位置し、後背湿地奥部にあたるD地点では稲作が行われていた形跡は認められていない。これは、堤防斜面に比較して後背湿地の方が排水不良の土地条件となっており、そのため稲作を行うことができなかったことを示している可能性がある。いずれにしても、本時期には中筋川流域において稲作が行われるようになった可能性は高い。考古学調査でも、C地点付近で石包丁など、農耕に伴う遺物が出土していることから窺える。

層堆積期：本時期はV層堆積期と同様な環境が継続している時期である。遺物の出土状況から古墳時代と推定される。この時期、C・E・K地点が位置する微高地は浮遊物質が堆積するが、堆積後は比較的乾燥した場所へ変化したと思われる。このことは本時期のK地点の堆積物の構造において、ベッド状の構造が発達することからも窺える。また、花粉化石の種類において、草本植物の種類には人里植物の種類が目立つようになることから土地条件の変化に伴い、植生が大きく変化した可能性がある。また、栽培種のイネ属は自然堤防に近い地点では検出されず、後背湿地に近い地点でのみ検出される。このことは稲作地としての土地利用が弥生時代の頃に比較して、より低地側に広がったことを示唆するのかもしれない。ただし、現状では空間的な調査事例が少なく、今後の課題として残される。

層堆積期：本時期もまたⅢ層堆積期と基本的には同様な景観が広がっていたと見られる。遺物の出土状況から古代と考えられる。

層堆積期：遺物の出土状況から古代以降近世の時期である。基本的な景観は前時期と類似するが、この時期よりE・K地点が位置する自然堤防側では砂質堆積物の堆積が卓越する状況がある。このような堆積層の層相変化は環境変化に起因している可能性があるが、詳細については今後の課題である。また、今回の調査区であるK地点では本時期堆積物中に最下部と中部層準において、堆積物の変形構造が確認されている。これらの変形構造は地震動に起因するものの可能性が強い。本遺跡と中筋川を挟んで対岸に位置するアゾノ遺跡でも地震の痕跡が確認されている。今回の変形構造との関係については情報が不足しており不明であるが、層位的・時的に対比されるときも矛盾はしない。いずれにしても、地震による変形は調査地域において、層序対比を行っていく上で重要な情報となり、今後の調査でも着目していきたい。

以上、本遺跡周辺では、現地表面下-2m付近に干潟を構成すると考えられる堆積層が存在していることが明らかとなった。その後、干潟は、陸化に伴い塩性湿地へと変化する。河川による埋積

はさらに進み、古墳時代頃まで遺跡周辺では後背湿地の堆積環境が維持される。但し、縄文時代晩期には、有機質泥層が形成されるような堆積環境であったことが窺える。現在、観察されるような河川沿いの自然堤防は、発掘調査の結果、古代以降に形成されてきたことが明らかとなった。今後、このような環境変化に伴う人間活動を考察すると共に、年代が得られていない下部の堆積層について年代測定を実施し、より精度のある環境変化を論じていくようにしたい。

引用文献

- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution@ Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*,10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 珪藻学会誌6 p.23-45.
- 近藤鍊三・ピアスン友子(1981)樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について 帯大研報12, p.217-229.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析, その特性と応用 第四紀研究25 p.31-64.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26 ,p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Lange-Bertalot, H., Kuelbs, K., Lauser, T., Noerpel-Schempp, M. & Willmann, M. (1996) Dokumentation und Revision der von Georg Krasske beschriebenen Taxa. *Iconographia Diatomologica* 3,358p., Koeltz Scientific Books.
- Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996) Oligotrophie-Indikatoren 800 Taxa repraesentativ fuer drei diverse Seen-Typen. *Iconographia Diatomologica* 2,390p., Koeltz Scientific Books.
- Metzeltin, D.&Witkowski, A. (1996) Diatomeen der Baeren-Insel, Suesswasser-und marine Arten. *Iconographia Diatomologica* 4,287p., Koeltz Scientific Books.
- 宮脇 昭編著(1982)「日本植生誌 四国」 539p 至文堂.
- 中村 純(1965)高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷 第四紀研究4 p.200-207.
- 中村 純・山中三男(1982)花粉分析学的研究よりみた四国地方の洪積世後期以降の植生変遷.「日本植生誌 四国」 p.76-83 至文堂.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843) *Iconographia Diatomologica* 1,107p., Koeltz Scientific Books.

- 杉山真二・早田 勉(1994) 植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定(第2報)－九州南部の台地上における
照葉樹林の分布拡大の様相－ 日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集 p.53-54.
- 山中三男・伊藤由美子・石川慎吾(1992) 高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析.日本生態学会誌42
p.21-30.

第 章 考 察

1. 弥生時代

本調査では、弥生時代の中期に比定される土器片が約800点まとまって出土している。大部分が粘土帯貼付口縁を有するもので、一括性の高いSF-1からの出土である。細片のため壺か甕かの判断は難しいが、口縁部が確認できるものは約47点あった。口縁部の特徴は、口縁部外面に粘土帯を貼付しているものが大部分を占め、器形としては甕が多く、口径が16cm以下の小型であることが挙げられる。17・18・20～22は頸部の短い甕で、15・16は胴部からそのまま口縁部に繋がる。また、口縁端部に刻みを有するものは壺と甕に各1点見られる。口縁部外面に貼付した粘土帯の幅、厚み、口縁部と胴部の粘土接合部分の調整方法から3つのタイプに分類できる。

Aタイプ 口縁部外面の粘土帯の幅が1～2cmを測るもので、粘土帯の段部が明瞭で、指頭圧痕などの調整が残らない。

Bタイプ 口縁部外面の粘土帯に厚みがなく扁平なもので、粘土帯に指頭圧痕が残り、接合痕が線状となって残る。

Cタイプ 口縁部外面の粘土帯に粘土接合痕が線状に残るものもあるが、ナデ調整が施されているため、指頭圧痕や粘土接合痕がほとんど残らないものである。

3タイプの割合は、Fig.61が示すようにAタイプが17%、Bタイプが77%であり、A・Bタイプが大部分を占める。Cタイプはわずかに6%である。県中央部では貼付口縁を有する土器が弥生時代後期前半まで残る例がみられるものの、これらの時期差については判断資料が少ないことや切り合い関係をもつ遺構、搬入資料等が検出されていないことから明確ではない。

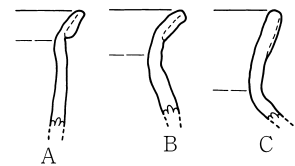


Fig.60 口縁部形態

次に、具同中山遺跡群のこれまでの調査で出土した弥生土器のうち本項に関連するものを挙げてみることにする。

平成元年から3年にかけて行われた後川・中筋川河川改修工事に伴う調査では、数基の弥生時代の祭祀遺構⁽¹⁾が検出されており、今回検出されたSF-1もまた祭祀関連遺構であるとみられる。平成6年度に調査されたI区では弥生時代前期末の微隆起帯を有する土器及び弥生時代中期の口縁部外面に粘土帯を貼付した土器が出土している⁽²⁾。続いて平成7年度に調査されたII-1区では櫛描直線文と波状文が交互に施される細頸壺や口縁部粘土帯に刻み目を持ち、その下部に微隆起帯と楕円浮文を有する弥生時代中期中葉の土器が出土している⁽³⁾。平成8年度に調査されたIII-1区では凹線文土器が1点出土している⁽⁴⁾。平成9年度に調査されたIV区では弥生時代後期を中心とした一括性の高い遺物が出土している⁽⁵⁾。そして、平成12年度には本調査区に隣接するIII-3区の調査で、同じく貼付口縁を有す

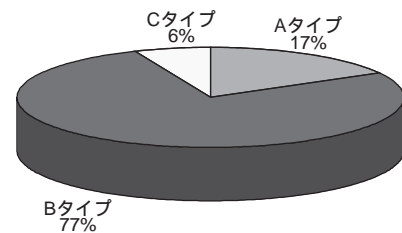


Fig.61 口縁部形態の出土比率

る弥生土器が出土している⁶⁾。以上が本調査区に関連する具同中山遺跡群出土の弥生土器である。

一方、県西部の遺跡出土の弥生土器については、岡本健児氏の文献を初めとして、多くの論文や報告書が出されている。近年では、『具同中山遺跡群Ⅱ-1』のなかで、弥生時代の具同中山遺跡群で調査された当該期の遺物や周辺遺跡の紹介さらに高知県内出土の弥生中期土器の研究史がまとめられている。また、『具同中山遺跡群Ⅱ-2』で、同時期の近辺の遺跡と遺物を紹介している。

次に、本調査区に関連する周辺の遺跡に関しても少し触れてみたい。弥生時代前期の遺物が出土している遺跡には入田遺跡、西の谷遺跡、江ノ村遺跡、国見遺跡などがある⁷⁾。同様に弥生時代中・後期の遺物が出土している遺跡には大方町早咲遺跡、中村市船戸遺跡、宿毛市芳奈遺跡、芳奈向山遺跡、神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡などがある⁸⁾。特に、サンナミ遺跡からは本調査区の土器に類似したものが出土している。平成12年に中村市が調査した古津賀遺跡群では、複合口縁を有し、口縁端部に粘土帯が貼付された弥生時代中期の土器が出土し、住居跡からは九州で見られる磨製石鏃も出土している。また、同遺跡群の西中野地区からは弥生時代中期に九州で隆盛する須玖式土器が出土している⁹⁾。さらに広域に目を移すと愛媛県の南予地方で弥生時代中期の土器が出土している遺跡には拝鷹山古墳、岩木赤坂遺跡、田苗遺跡、三崎・中村遺跡などがある¹⁰⁾。

最後に、今回の調査で出土した粘土帯貼付口縁を有する土器群がどのような系譜を持つものであるか少し考えてみたい。具同中山遺跡群の弥生土器には、弥生時代前期末に微隆起帯を有するものがあり、中期中葉からは櫛描文の細頸壺に始まり、後期末まで各時期ごとに在地性の強い特徴的な土器が連綿と受け継がれていく。ところが、弥生時代中期前葉の土器は現在のところ未発見であり、中期中葉から粘土帯貼付口縁を有する土器が出現する。このことは本調査区出土の粘土帯貼付土器の系譜を探る上で重要な意味を持つものと考えられる。また、弥生時代の中期中頃に朝鮮半島から北九州に伝来した粘土帯土器が、九州では須玖式土器と伴出する遺跡や本調査区と3km程離れた古津賀遺跡群から出土した須玖式土器を考慮し、九州からの影響を視野に入れる必要はないだろうか¹¹⁾。

今回の資料は少量であるため可能性として指摘するにとどめて、資料の増加を待ち、本地域の今後進展するであろう弥生土器研究に委ねたい。そして県西部及び西南四国の弥生時代の様相を明らかにする上で、本調査区出土の弥生土器が有意義な資料となることを願いたい¹²⁾。 (小島)

2. 古墳時代

(1) 祭祀関連遺構について

古墳時代の遺構では祭祀関連遺構3ヵ所と掘立柱建物跡1棟を検出した。今回の調査区は現在の中筋川の堤防から東へ約100mの地点にあり、遺構検出面は東から西へ緩やかに傾斜している。祭祀関連遺構は、調査区中央部で検出した小規模なSF-3を除いて、調査区東部の標高が高い部分で広範囲に拡がっており、地形が高い部分で祭祀が行われたものとみられる。これまでの具同中山遺跡群の調査においても、自然堤防から後背湿地にかけての緩斜面で祭祀遺構が多く確認されている。

SF-2は調査区の南東部で検出した祭祀関連遺構で、広範囲に拡がり、また他の祭祀遺構よりも

遺物が密集して出土した。遺物は等高線に沿って北東から南西に帯状に伸び、出土状況からみると標高3.75～3.80m, 3.80～3.90m, 3.90～4.00mの3ブロックに分かれる。いずれのブロックにおいてもわずかではあるが須恵器が出土しており、陶邑³³のTK216～MT15に併行するもので、これまでの範疇に収まる³⁴。土師器は壺、甕、高杯、椀があり大半を甕が占める。祭祀遺物には土製模造品(土製円板)、石製模造品(勾玉、白玉)、手づくね土器がみられ、特に、標高3.80～3.90mのブロックで多く出土している。ここでは赤色塗彩された土師器壺(55)と白玉が入っていた土師器甕(122)に隣接して畿内からの搬入品とみられる布留式土器の甕が2点(128・129)出土しており、搬入品を意図的に祭祀に用いていることが伺われる。また、標高3.75～3.80mからは畿内からの搬入品とみられる土師器壺(57)が出土している。

SF-3は調査区中央部で検出した祭祀関連遺構で、他の祭祀関連遺構とは位置が離れており、また、古墳時代の祭祀関連遺構の中では規模が最も小さく、一括性が高いとみられる。出土遺物には祭祀関連遺物は含まれていないが、祭祀遺物が出土しているSF-2・4と同様の出土状態であり、ここでは祭祀関連遺構として捉えた。出土遺物は須恵器の大型甕(194)が1点みられるほかはすべて土師器で、そのほとんどを甕が占める。須恵器の大型甕はTK208に併行するものとみられる。

SF-4は調査区の北東部で検出した祭祀関連遺構で、今回確認した祭祀関連遺構の中では最も広範囲に拡がり、更に調査区外へ続いている。遺物はSF-2と同様、等高線に沿って帯状に北東から南西にのび、出土状況から標高3.95～4.05mと4.05～4.15mの2つのブロックに分かれ、いずれもSF-2より標高が高い位置から遺物が出土している。須恵器には杯蓋、杯身、甕があり、TK216～TK47に併行するものとみられる。土師器には壺、甕、高杯、椀があり、半数を高杯が占め、他の祭祀関連遺構とはやや異なる。祭祀遺物には石製模造品(白玉・勾玉)、手づくね土器がみられ、須恵器と共に標高の高い4.05～4.15mのブロックからの出土が多く、鉄鏃(334)1点も出土している。具同中山遺跡群I³⁵でも同様のものが出土しており、鏃身部が方頭形を呈するもので、5世紀前葉のものともみられる。

今回の調査で確認した祭祀遺構はすべて土師器と須恵器を伴っており、須恵器は5世紀後半から6世紀前葉のものが出土している。これまでの具同中山遺跡群の調査でも同時期の祭祀遺構が多数確認されており、この時期が祭祀の最盛期であったものと考えられている。しかし、今回の調査で祭祀関連遺構から出土した須恵器は各ブロックにおいても数型式に及び、時期幅が認められることから一回の祭祀であったとは考え難く、また、祭祀関連遺構から出土した須恵器は約5%と少なく、須恵器が出現する以前から祭祀が行われていた可能性が十分考えられる。

一方、土師器は各ブロックで器種構成や形態に差異は認められないものの、小型三種など古い様相をもつものも出土している。小型丸底壺は2点出土しており、遺物包含層から出土した9は口縁部が上方に短くのび、SF-4出土の195は口縁部が外上方に長くのびるもので、いずれも布留式の新相に相当すると考えられる。また、小型丸底鉢(19)は遺物包含層からの出土ではあるが、丸底で体部は浅く、口縁部は頸部から屈曲して外上方に直線的にのび、内外面にヘラ磨きを施すもので、矢部遺跡³⁶の布留1式とされるものに類似する。その他の器種についても古い様相がみられるものが存在する。高杯(241)は杯部が内湾し、脚部は中実でハの字状に広がり、拝原遺跡³⁷で出土している

ものに似る。甕はA～D類のいずれも内外面ともヘラナデ調整を多用するが、109は胴部が球形を呈し、外面はタタキ、内面はヘラナデ調整を施している。しかし、今回出土した甕は胴部にタタキが施されるものは109のみである⁸⁸。県中央部では古式土師器Ⅰ期以降はタタキが減少する傾向がみられ⁸⁹、古式土師器Ⅱ期頃に位置づけられるものと考えられる。また、壺は直口壺のみがみられ、直口壺の増加という布留式の新相の様相と合致する。これらの遺物はいずれも布留式の範疇で捉えられるものであり、土師器は新しくとも5世紀前半或いはそれ以前のもが含まれていると考えられ、須恵器の時期と考え合わせると少なくとも100年以上の時期幅をもつことになる。土壌分析においても今回の調査区は古墳時代には堆積速度が遅く非常に安定し比較的乾燥していた土地であったとの結果が出ており、同地点で比較的長い期間祭祀が行われていたものと判断される。

今回の調査ではSF-2に隣接して掘立柱建物跡(SB-1)を確認した。検出した3個の柱穴は掘立柱建物の梁部分とみられ、いずれも柱根が遺存しており、樹種同定の結果、すべて広葉樹のアワブキ属アワブキ科であることが判明した。脆く、狂いが生じやすい材質ゆえに薪炭材に使用されることが多く、建築材としては適さないとされる。このような材質の木を敢えて使用したのは、使用目的が限定され、かつ使用期間が一時的または短期間であったためではないかと推察される。祭祀関連遺構であるSF-2に隣接していることを考え合わせると住居等ではなく、祭祀に関わるものであった可能性が高いのではなかろうか。また、各材の放射性炭素年代測定も実施しており、補正¹⁴C年代(B.P)で1690～1530年前という結果が出ている。暦年代に置き換えると260年から420年に当たり、年代幅が最大160年あり、放射性炭素年代測定のみで時期を決定することはできないものの、概ね4世紀を中心とした時期が推察される。土師器については前述のとおり、5世紀前半を上限とし、4世紀までをその範疇に入れることができるものも含まれており、今回の調査地区は少なくとも4世紀代に祭祀が行われていたものと考えられる。

また、平成12年度に行われた東隣の調査区でも掘立柱建物跡2棟さらに竪穴式住居1軒が確認され⁹⁰、比較的狭い範囲に上部構造を持つ施設が存在したことになる。土壌分析では自然堤防に近い地点ではイネ属は検出されておらず、後背湿地に近い地点でのみ確認されるという結果が出ており、そのことを考え合わせると標高の高い自然堤防上は祭祀空間あるいは居住域であり、標高の低い後背湿地では水田耕作を営んでいたものと推測される。

(2) 搬入品について

搬入品は壺(57)、甕(128・129)の3点が確認され、いずれもSF-2から出土している。甕は胴部が球形を呈し、口縁部が直線的にのび、端部は若干内面を肥厚するか、丸く仕上げている。また、外面は肩部のハケ調整が消失し、内面にはヘラ削り調整が見られず、全面にナデ調整を施している。いずれも畿内系で、布留4式に位置付けられ、ほぼ5世紀前半に帰属するものとみられる⁹¹。壺は小型のもので、胴部はやや扁平な球形を呈し、口縁部は頸部からくの字状に屈曲し、短く外上方にのび、外面には斜め方向のハケ調整、内面には全面にナデ調整を施している。調整は甕と同様であり、胎土も同一とみられ、甕と同時期の畿内系と考えられる。ただし、3点とも直接畿内から搬入されたかは胎土分析等を経て考慮する必要がある。

布留式土器は県内では出土例が少なく、数遺跡で見られるのみであるが、今回の祭祀遺構で畿内系の土器が出土したことの意味について若干考えてみたい。

具同中山遺跡群においては平成9年度のⅣ区の調査で祭祀遺構から甕が1点出土している²³。胴部が球形を呈し、口縁部がやや内湾して立ち上がるもので、外面には斜め方向のハケ調整、内面は全面に指ナデ調整を施している。Ⅲ-2区で出土したものと酷似しており、同時期のものと考えられる。伴出している小型丸底壺にはタタキ目が残るものが1点あるが、甕はヘラナデ調整を施し、タタキ目が残るものは見られないという点でもⅢ-2区と同様である。具同中山遺跡群の南西に隣接する船戸遺跡²⁴からは甕が1点出土している。布留式土器は約10個体の土師器の壺、甕、杯などと共に出土しており、具同中山遺跡群と同様の出土状態であり、祭祀跡の可能性も考えられる。布留式土器は胴部が球形を呈し、口縁部は内湾するもので、胴部外面にはハケ調整、内面上半にはヨコ方向のヘラ削り調整を施しており、Ⅲ-2区で出土したものよりは古い様相がみられるが、布留式の新相におさまるものであろう。松ノ木遺跡²⁵では住居跡から甕が1点出土している。松ノ木遺跡は高知県中央山間部の本山町に所在する遺跡で、吉野川上流域に当たり、畿内系、吉備型、東阿波型などの搬入品がみられ、畿内系は庄内式と布留式がある。布留式土器は内湾して立ち上がる口縁部を有し、肩部にはヨコ方向のハケ調整を施すものである。この他にもいくつかの遺跡で散見される。

一方、庄内式土器は県内の比較的多くの遺跡で出土している。それは当該期の遺跡数の増加にも起因すると考えられるが、出土遺跡は今のところ県中央部を中心に西は窪川町までであり、具同中山遺跡群がある幡多地域では確認されていない。それに対し布留式土器は幡多地域でも一定量認められ、布留式土器が庄内式土器より広範囲に拡散して行くという傾向と一致している。

丁度、具同中山遺跡群の上流部には県内では数少ない前期古墳が築造され、具同中山遺跡群を始めとして周辺の古津賀遺跡や早咲遺跡などに初期須恵器や石製模造品が搬入されている。このことはこの地域が少なからず畿内との結びつきがあったことを示しているものと言えよう。（田中）

3. 古代

古代の遺構では祭祀関連遺構SF-5を確認した。祭祀遺物は出土していないものの古墳時代の祭祀遺構と同様に遺物がまとまって出土している。出土遺物は須恵器の甕と土師器の甕の細片がわずかにみられる他は、すべて須恵器の壺であり、特異な状況であるといえる。供膳具は遺物包含層から須恵器皿が1点出土しているのみであり、口縁部端部を内側に折り返すもので、8世紀末から9世紀前葉のもののみとみられる。SF-5より出土した須恵器の壺も肩部が丸く体部が卵形を呈する長頸壺や双耳壺などでほぼ同時期と考えられる。また、SF-5の約8m東の遺物包含層から丸柄が出土している。この丸柄は銅製で細長孔を有するもので、8世紀後半から9世紀のものともみられ、周辺に官衙関連施設が存在し、祭祀に役人が関与したことも考えられる。県中央部の西鴨地遺跡²⁶では流路から出土した8世紀中葉から10世紀末頃の遺物の内、煮沸・貯蔵具の占める割合が非常に高いことから流路の近くで煮沸し、共同飲食を伴った「春時祭田」のような祭祀がなされていた可能性が指摘され、また、人形や斎串といった祭祀遺物、緑釉陶器、黒色土器などの搬入品、丸柄などの帯金具が出土していることから「春時祭田」に見られるような伝統的な祭祀と律令的な祭祀の共存の可

能性も考えられている。SF-5においても貯蔵具が多いこと、丸軋の出土、土壌分析においても調査区の西部では水田耕作を行っていた可能性が高いという結果が出ており、類似する点が多く見られ、西鴨地遺跡と同様な祭祀が行われたとも考えられる。しかし、SF-5は弥生時代、古墳時代と同様な遺物の出土状態を示しており、祭祀対象が異なるとしても、古代以前の祭祀形態の系譜の中に位置付けられるものと考えられる。(田中)

4. まとめ

今回の調査では、報告したとおり弥生時代、古墳時代、古代の三時期の遺構・遺物を確認することができた。なかでも、注目される成果は、具同中山遺跡群の性格、消長について再考を促す資料を得たことであろう。具同中山遺跡群はこれまでの調査によって、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明し、特に古墳時代中期、暦年代では5世紀後半から6世紀初頭を中心とした祭祀跡に特徴付けられてきた。確かに、当該期の石製模造品や古式須恵器が各調査で一定量出土し、畿内政権との関わりの中でも評価されてきた。さらにその立地が中筋川左岸の自然堤防上であるとはいえ、当時の生活面が現地地表下約3mの青灰色粘土層中に存在し、かつ、記録に残る洪水も江戸時代以降数多く、祭祀域と捉えられても、生活域には適さないと判断されることもそれを裏付けていた。実際、集落に関連する明確な遺構が確認されるのは古代以降であり、それ以前については未確認であった。しかし、改めてこれまでの調査区と現在の微地形(Fig.2)を重ねてみると発掘調査を実施した箇所ほとんどが自然堤防の縁辺部に当たり、自然堤防上を調査する機会を得たのは平成9年度のⅣ区と平成11・12年度のⅢ-2・3区に限られている。Ⅳ区の調査では、古墳時代中期に属するとみられるものが多いものの、弥生時代後期後半のものもまとめて出土し、古墳時代前期とみられるものも数基検出され、土器集中を中心とした祭祀跡とみられる遺構の弥生時代後期から古墳時代中期までの変遷が看取されると共に弥生時代後期では竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構も検出されている。Ⅲ-3区では古墳時代中期以前とみられる掘立柱建物跡や竪穴住居跡が確認されている。

一方、これまでに土壌分析を中心とした自然科学分析のデータも蓄積され、今回実施した軟X線写真と併せて当時の様相も一定推察することができるようになった。その詳細については、第3章に記しているとおり、古墳時代は堆積速度が遅く、長期間に亘って地表面であったものと考えられている。また、今回確認した建物跡の柱根の放射性炭素年代測定により5世紀前半以前についても祭祀を行っていた可能性がより強まってきた。発掘成果では、今回の調査区は須恵器より土師器が圧倒的に多く、小型丸底鉢(19)を始めとして底部外面にタタキ目を残すなど形態的にも古相を示す資料も散見され、比較的古くから祭祀が連綿と行われ、かつ、在地の土器と共にその時代を特徴付ける物²⁸を併用していたものとみられる。

このように、具同中山遺跡群では、弥生時代後期前後から古墳時代中期頃まで祭祀行為が連綿と行われていたことが推察されると共に自然堤防上では少なからず集落に関連する可能性のある遺構も遺存しており、集落が営まれていた可能性もあるのではなかろうか。(廣田)

註

- (1) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群 第一分冊』 1992年
高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群 第二分冊』 1992年
- (2) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同遺跡群Ⅰ－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』 1997年
- (3) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同遺跡群Ⅱ－1 －中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ－』 2000年
- (4) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同遺跡群Ⅲ－1 －中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ－』 2000年
- (5) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅳ』 2001年
- (6) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅲ－3 －記者発表及び記者発表資料－』 2001年
- (7) 木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研 1987年
高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西ノ谷遺跡 中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書1 第一分冊』 1993年
中村市教育委員会『国見遺跡』 1994年
- (8) 高知県大方町教育委員会『早咲遺跡』 1991年
高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 船戸遺跡』 1991年
宿毛市教育委員会『芳奈遺跡・芳奈向山遺跡』 1978年
高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ 神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡』 2000年
- (9) 中村市教育委員会『古津賀遺跡群 東ナルザキ地区－現地説明会資料－』 2000年
- (10) 柴田昌児「四国西南部における弥生文化の成立過程－西南四国型甕形土器の成立と背景－」『突帯文と遠賀川』土器持寄会 2000年
- (11) 白井克也「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』第49回 埋蔵文化財研究集会 2000年
- (12) 作成するに当たり、森田尚宏氏、柴田昌児氏、出原恵三氏のご教示を頂いた。
- (13) 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年
- (14) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書－古津賀遺跡・具同中山遺跡群－』 1992年
- (15) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅰ－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』 1997年
- (16) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊 矢部遺跡』 1986年 奈良県教育委員会
- (17) 香我美町教育委員会『拝原遺跡』 1993年
- (18) 底部にタタキが施されるものが若干みられるが、底部にタタキが施されるものは、胴部下から底部に放射状にタタキを施し、その後底部にナデ調整、胴部にヘラナデ調整を施している。126・184などは底部の

器壁が非常に厚く、叩くというよりはむしろ押圧を加えて粘土を伸ばし、胴部と接合するような成形とみられ、弥生時代のタタキとは若干異なるものとみられる。

- (19) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相」『高知県埋蔵文化財センター研究紀要 第1号』1994年 (財)高知県埋蔵文化財センター
- (20) 『具同中山遺跡群Ⅲ-3 記者発表及び現地説明会資料』2000年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (21) (16)に同じ
- (22) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅳ』2001年のSF6から出土した972の甕である。
- (23) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『船戸遺跡』 1996年
- (24) 高知県長岡郡本山町教育委員会『松ノ木遺跡Ⅴ』2000年
- (25) 高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西鴨地遺跡』 2001年
- (26) 布留式土器, 初期須恵器, 石製模造品などその時期を特徴付けるものを併用していたものと考えられる。

参考文献

- 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『檀原考古学研究所論集第八』1988年 檀原考古学研究所
- 奈良国立文化財研究所『研究集会 銚帯をめぐる諸問題 発表要旨と参考資料』2000年
- 松前町教育委員会『出作遺跡Ⅰ』 1993年
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター『中間西井坪遺跡Ⅰ』 1996年

圖 版



調査前全景(東より)



調査前全景(西より)

PL.2



中世遺構検出状態(西より)



中世遺構完掘状態(西より)



1区下層確認トレンチ(西より)



弥生時代遺構完掘状態(西より)

PL.4



1区北壁中央部セクション(南より)



1区下層確認トレンチセクション(北より)



SF-1(北より)



SF-1(南より)

PL.6



SB-1検出状態(西より)



SB-1半裁状態(西より)



SF-2遺物出土状態1(北より)



SF-2遺物出土状態2(南より)



SF-2遺物出土状態3(西より)



SF-2遺物出土状態4(西より)



SF-2遺物出土状態5(西より)



SF-2遺物出土状態6(西より)

PL.10



2区遺構完掘状態(西より)



2区下層確認トレンチ(西より)



2区北壁東部セクション(南より)



2区北壁西部セクション(南より)

PL.12



SF-3(南より)



SF-3(南より)



SF-4(南より)



SF-4(東より)

PL.14



SX-1(北より)



SA-1(南東より)



SF-5(北より)



SF-5(南より)



第 a層銅製品(4) 出土状態(西より)



第 a層土師器(22) 出土状態(北より)



第Ⅲb層鉄製品(28) 出土状態(西より)



SF-1弥生土器(41) 出土状態(西より)



SF-1弥生土器(43) 出土状態(南より)



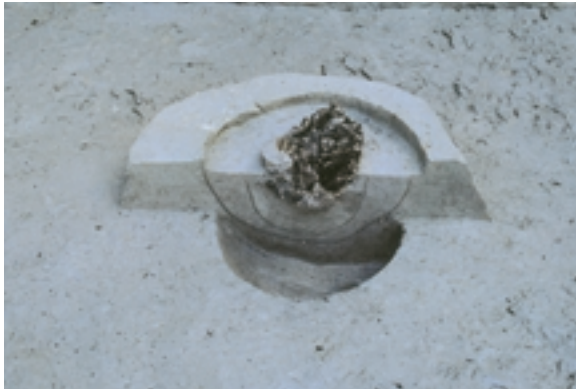
SB-1P-1検出状態(西より)



SB-1P-2(53) 検出状態(西より)



SB-1P-3(54) 検出状態(西より)



SB-1P-1半裁状態(西より)



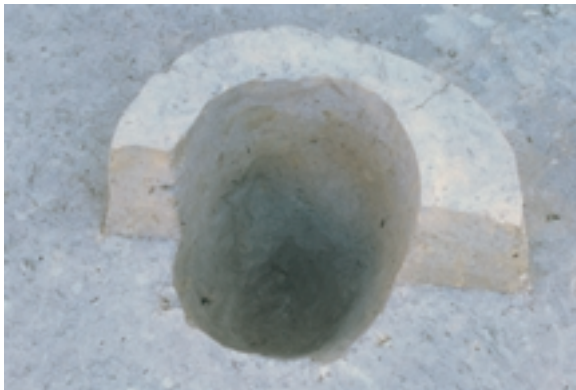
SB-1P-2(53)半裁状態(西より)



SB-1P-3(54)半裁状態(西より)



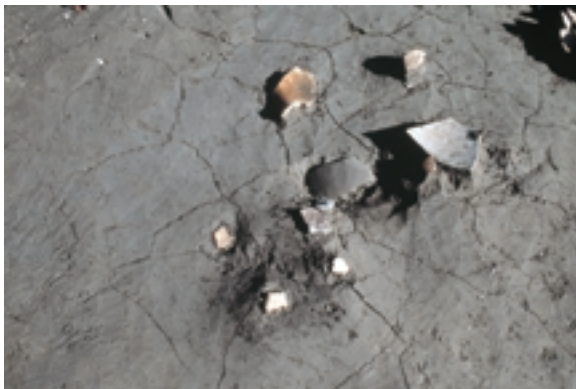
SB-1P-1完掘状態(西より)



SB-1P-2(53)完掘状態(西より)



SB-1P-3(54)完掘状態(西より)



SF-2炭化物集中(北西より)



SF-2土師器(127)出土状態(西より)



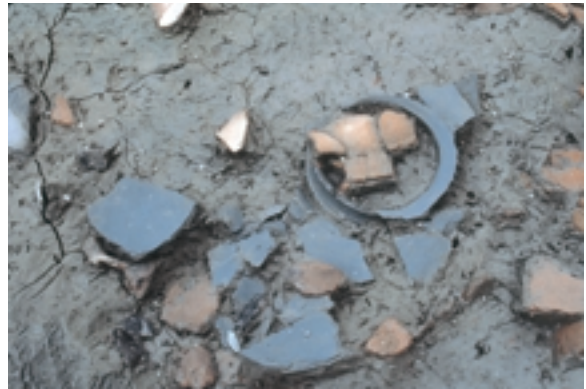
SF-2土師器(137)出土状態(西より)



SF-2手づくね土器(153)出土状態(南より)



SF-2須恵器(160)出土状態(北より)



SF-2須恵器(163)出土状態(南より)



SF-2須恵器(164)出土状態(東より)



SF-2土製模造品(166)出土状態(東より)



SF-2石製模造品(168)出土状態(西より)



SF-2石製模造品(169)出土状態(西より)



SF-4土師器(220・221)出土状態(北より)



SF-4土師器(221)出土状態(北より)



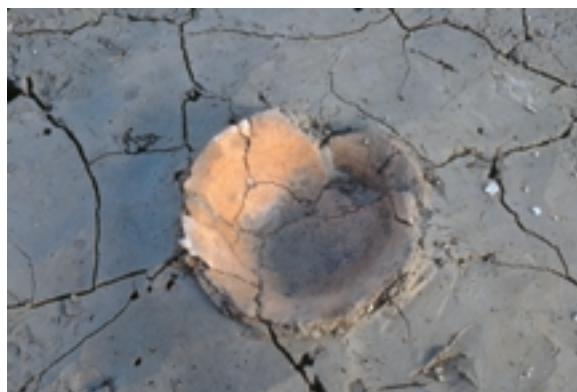
SF-4土師器(227)出土状態(北より)



SF-4土師器(230)出土状態(東より)



SF-4土師器(231)出土状態(北より)



SF-4土師器(239)出土状態(西より)



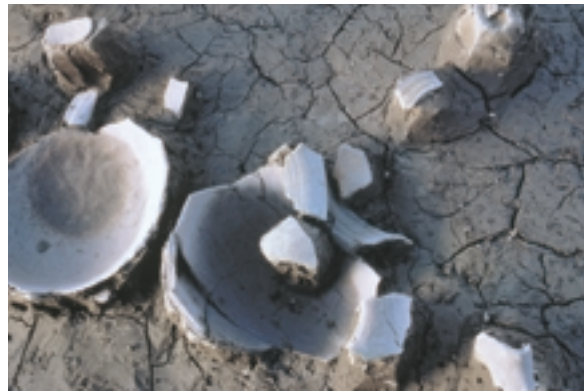
SF-4土師器(263・268)出土状態(北より)



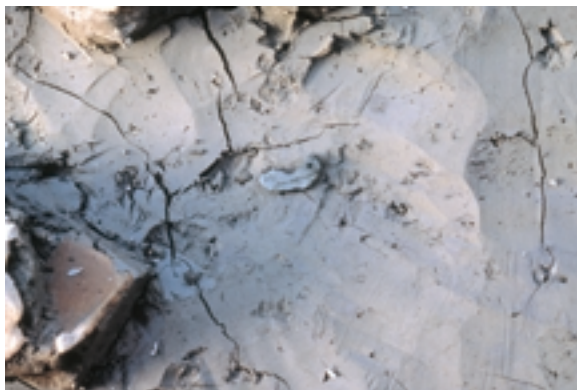
SF-4手づくね土器(269)出土状態(西より)



SF-4須恵器(273) 出土状態(南より)



SF-4須恵器(276) 出土状態(南より)



SF-4石製模造品(277) 出土状態(東より)



SA-1(南より)



SA-1(南より)



SA-1(南より)



SF-5須恵器(336・338) 出土状態(東より)



SF-5須恵器(337・339) 出土状態(西より)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺・甕)



須恵器(甕)



須恵器(甕)

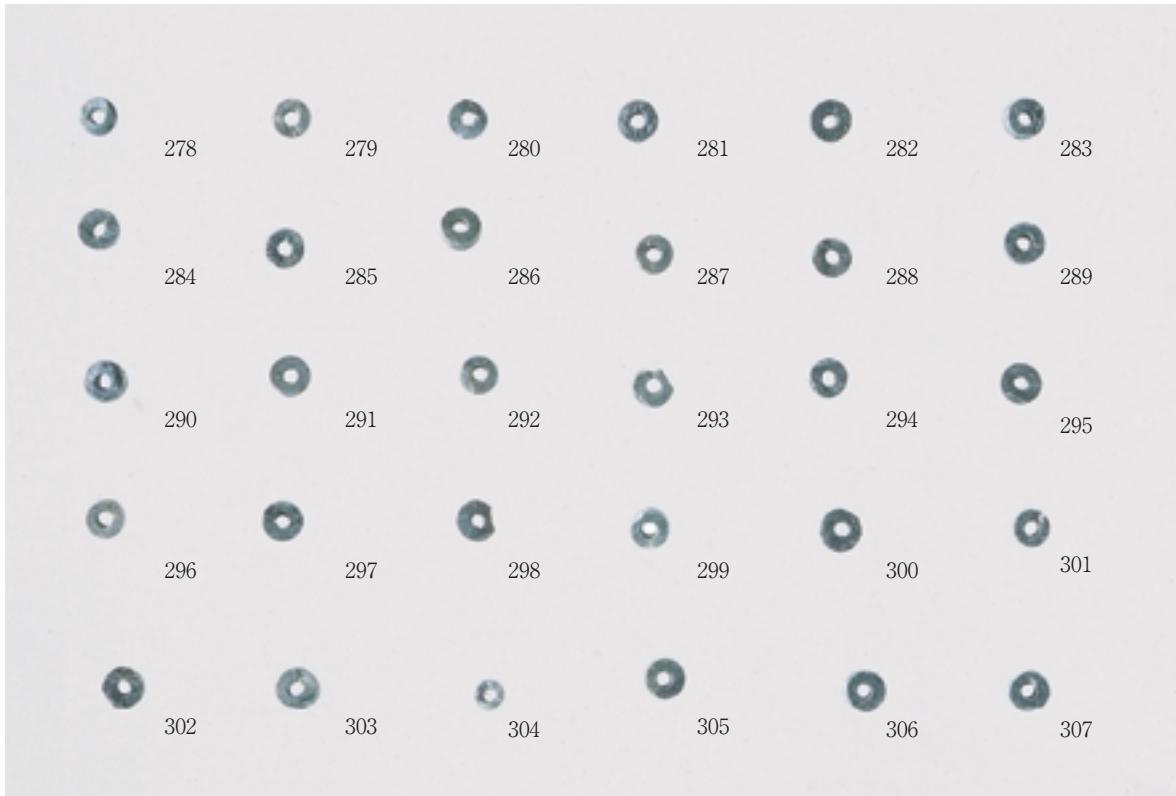


須恵器(甕)

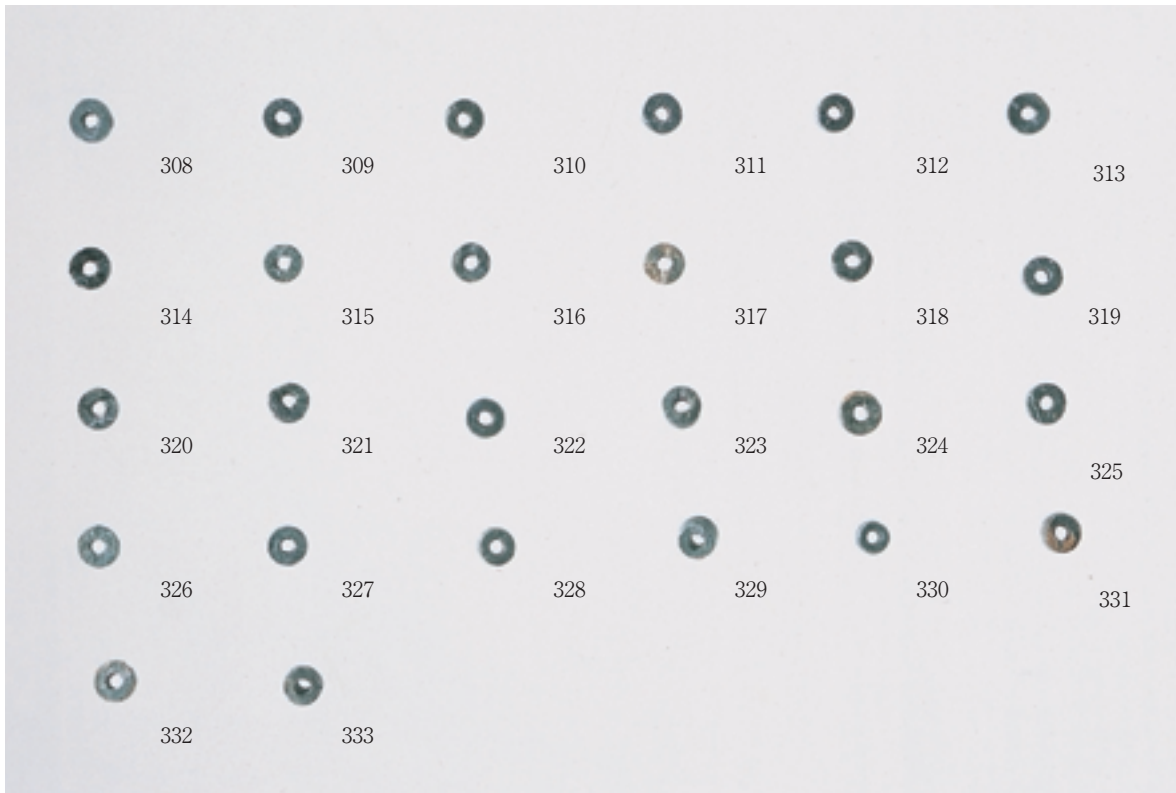


須恵器(甕)

PL.24



石製模造品(玉)



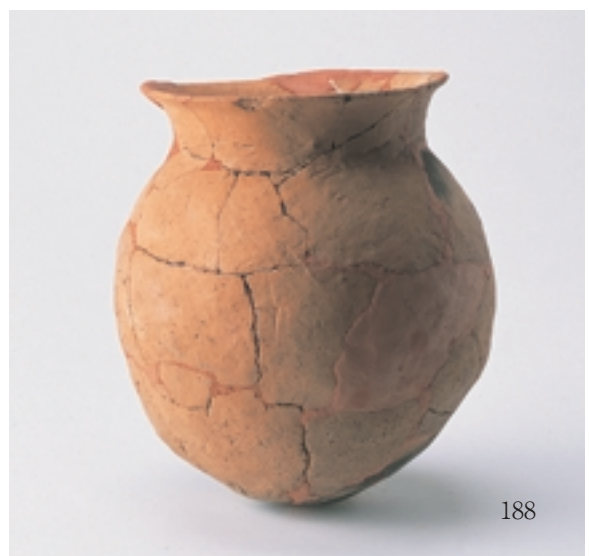
石製模造品(玉)



弥生土器(壺・甕), 土師器(壺・甕)



土師器(壺・甕)



土師器(甕)



土師器(壺・甕), 須恵器()



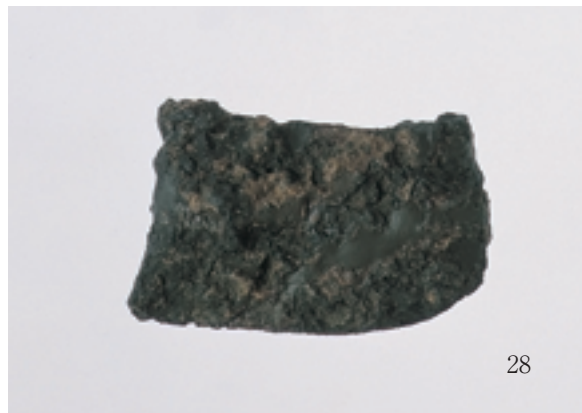
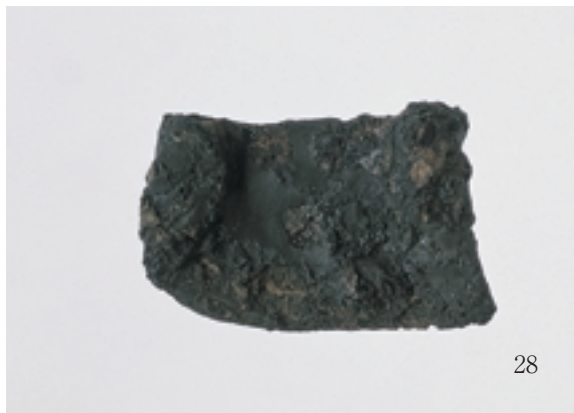
土師器(甕・高杯)



土師器(高杯)



土師器(高杯), 須恵器(壺), 鐵製品(鏃)



弥生土器(壺・甕), 土師器(高杯), 銅製品(丸柄), 鉄製品(鋤先)



弥生土器(甕・鉢), 土師器(甕)



土師器(甕・高杯)



土師器(壺・甕・高杯), 須恵器(), 土製模造品(円板), 石製模造品(斧形)



土師器(壺・甕・高杯)



土師器(高杯)



土師器(高杯), 須惠器(壺・甕), 石製模造品(勾玉)



土師器(鉢・高杯・碗), 手づくね土器, 須恵器(皿)



土師器(器台・碗・台付碗), 手づくね土器



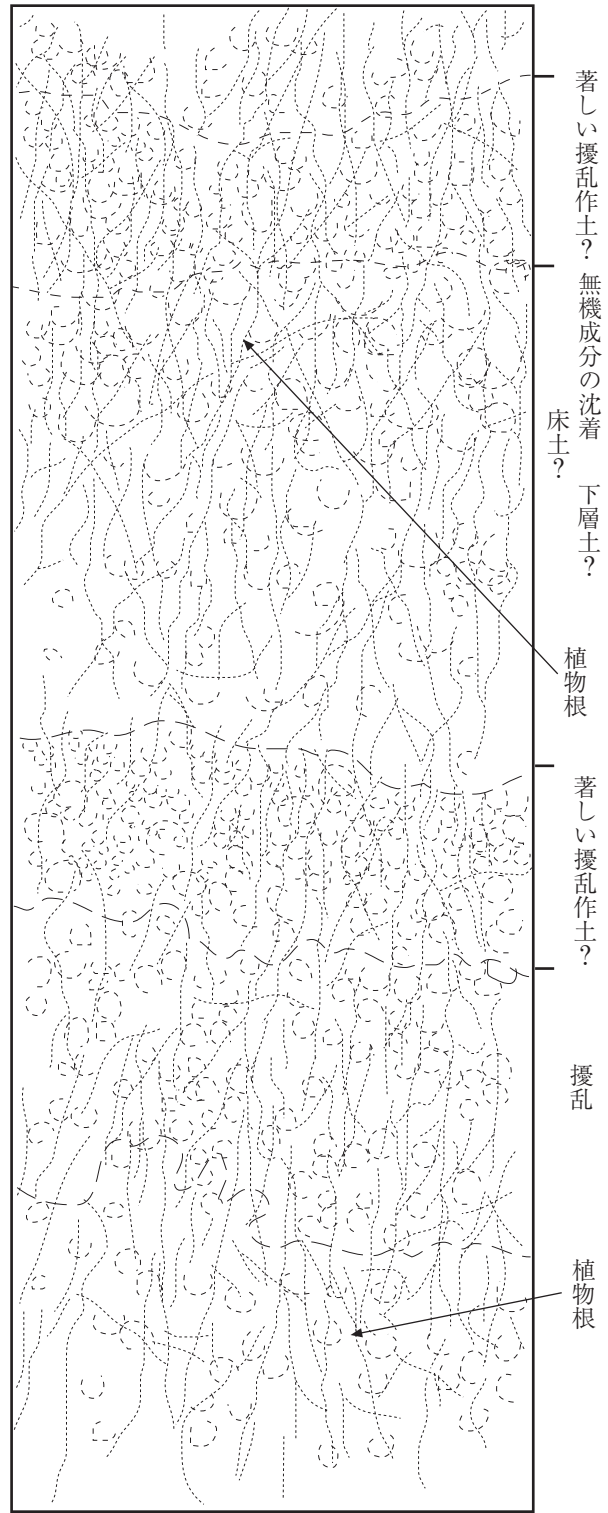
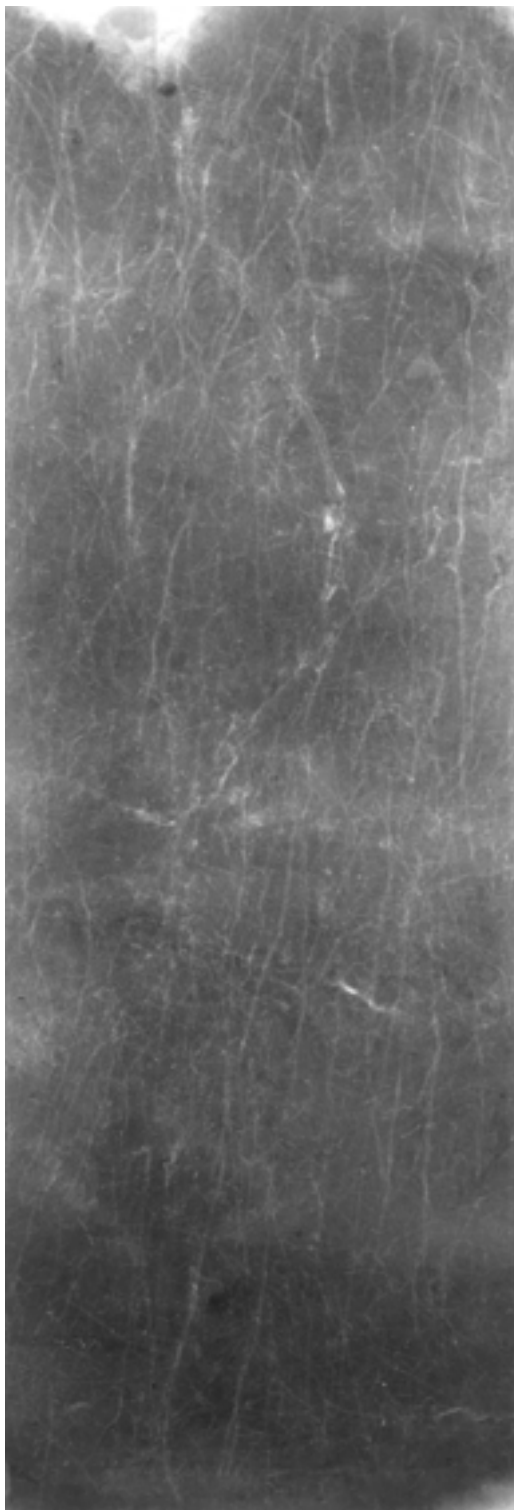
土師器(高杯・碗), 手づくね土器, 須恵器(杯蓋)



土師器(椀), 手づくね土器, 須恵器(杯蓋・杯身)

自然科学分析

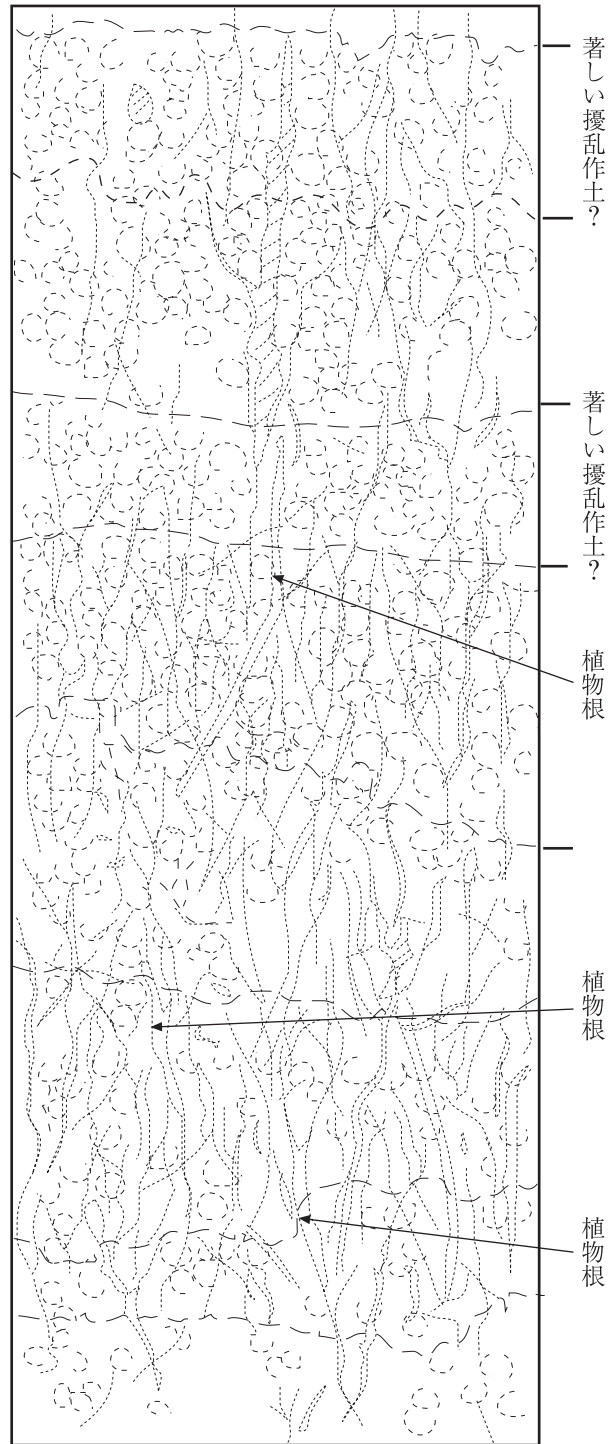
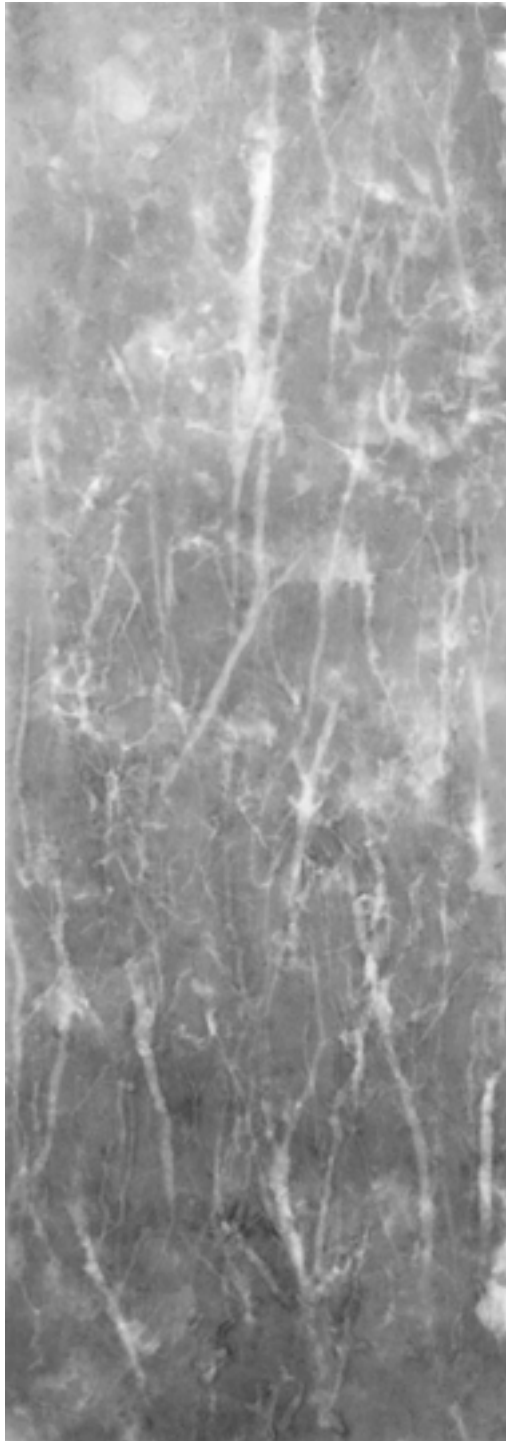
軟X線写真(1)



2 cm

PL.44

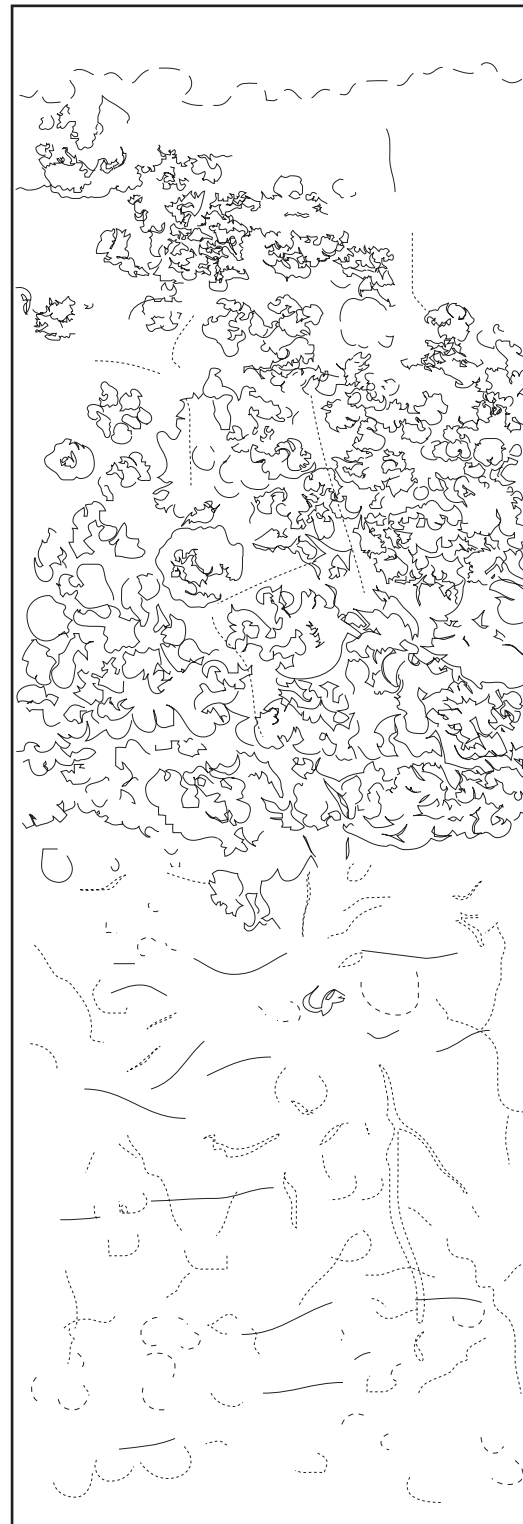
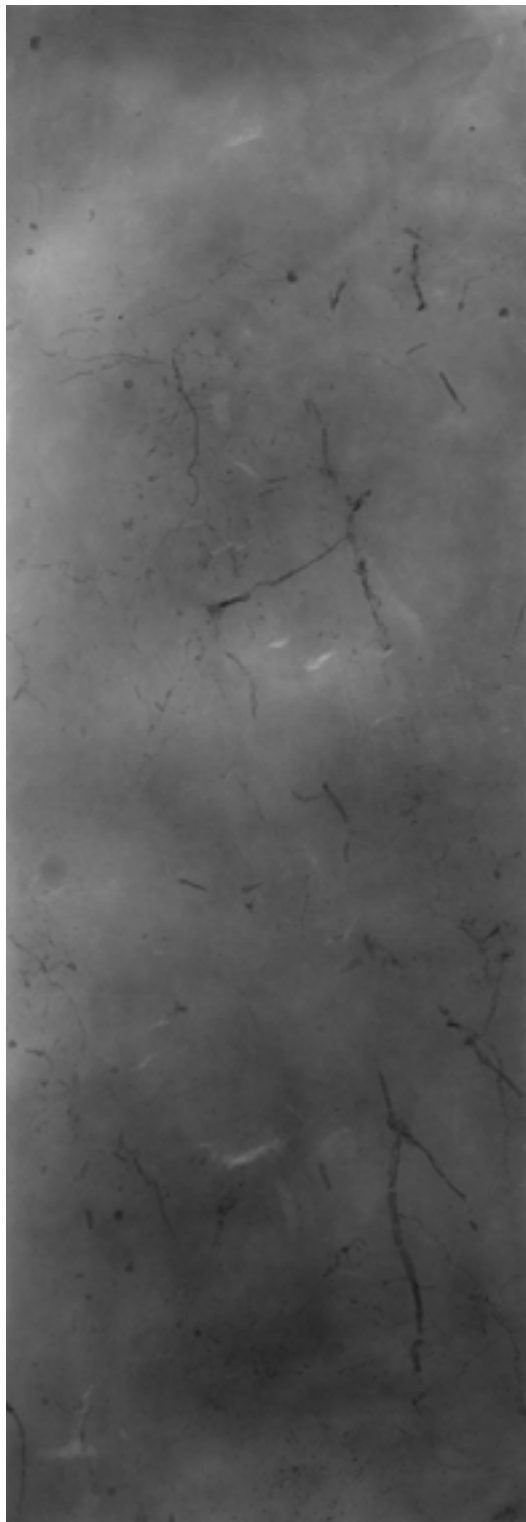
軟X線写真(2)



2 cm

1 地点 試料番号 2

軟X線写真(3)



不明瞭な葉理

変形構造

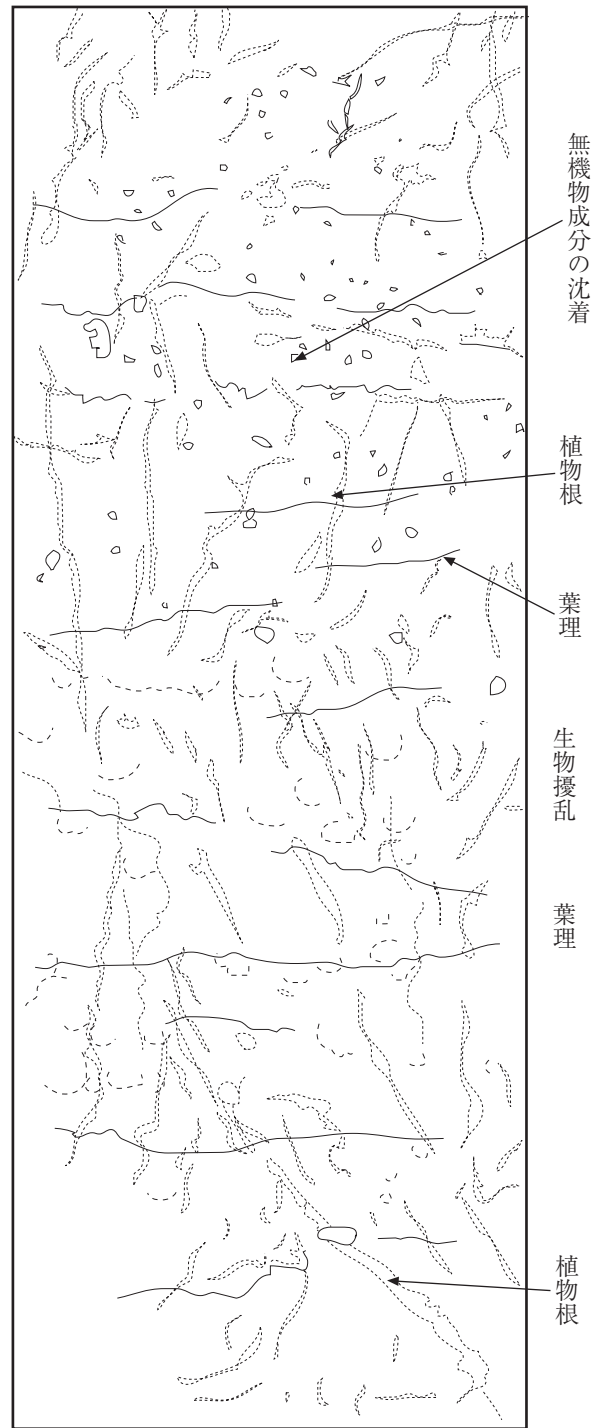
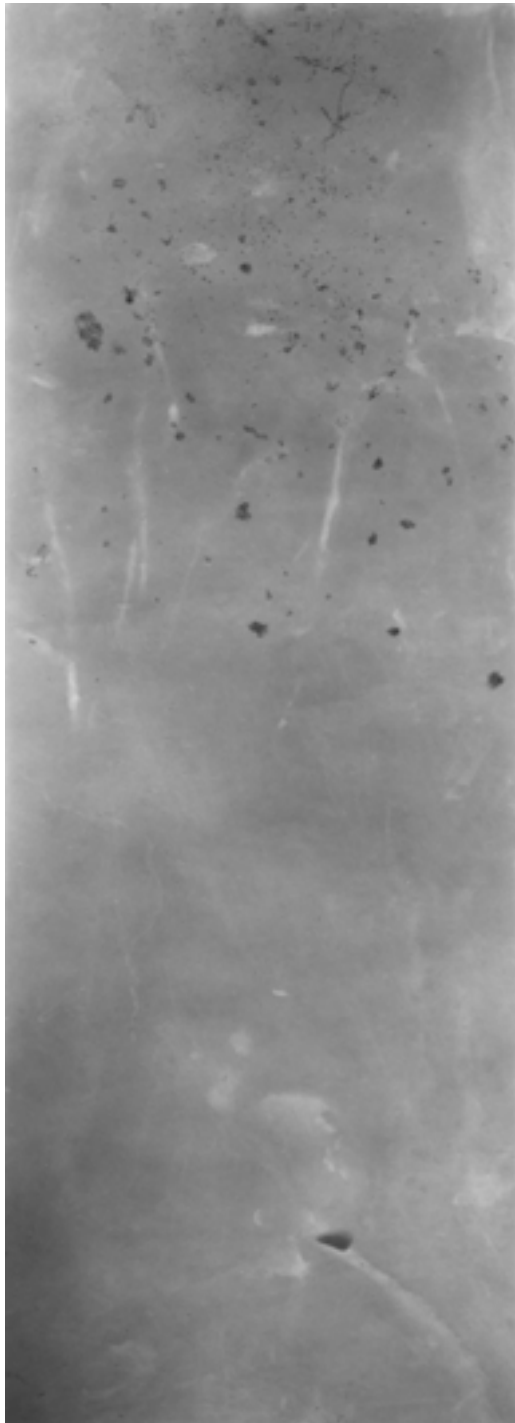
植物根

不明瞭な葉理

2 cm

PL.46

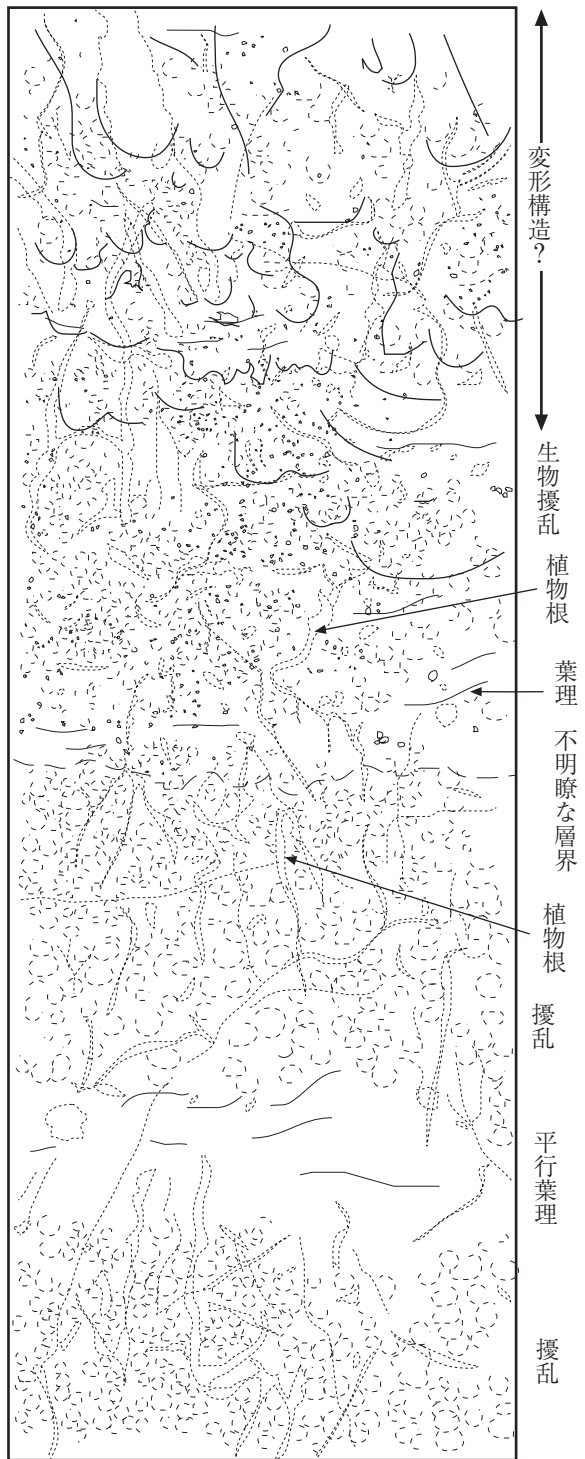
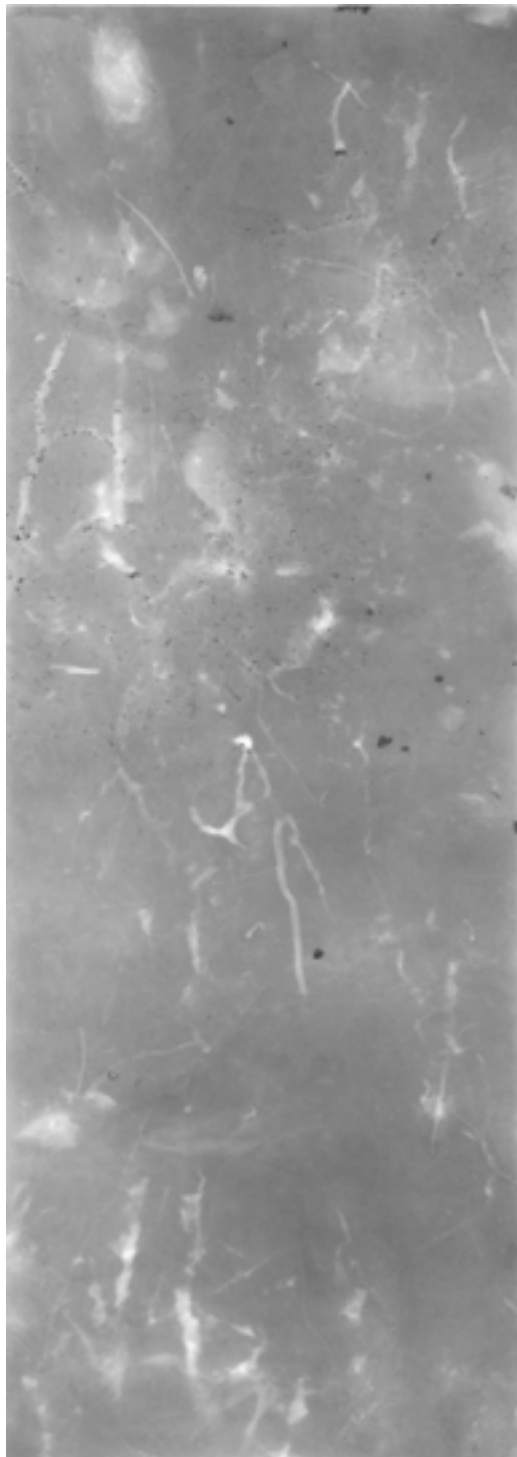
軟X線写真(4)



2 cm

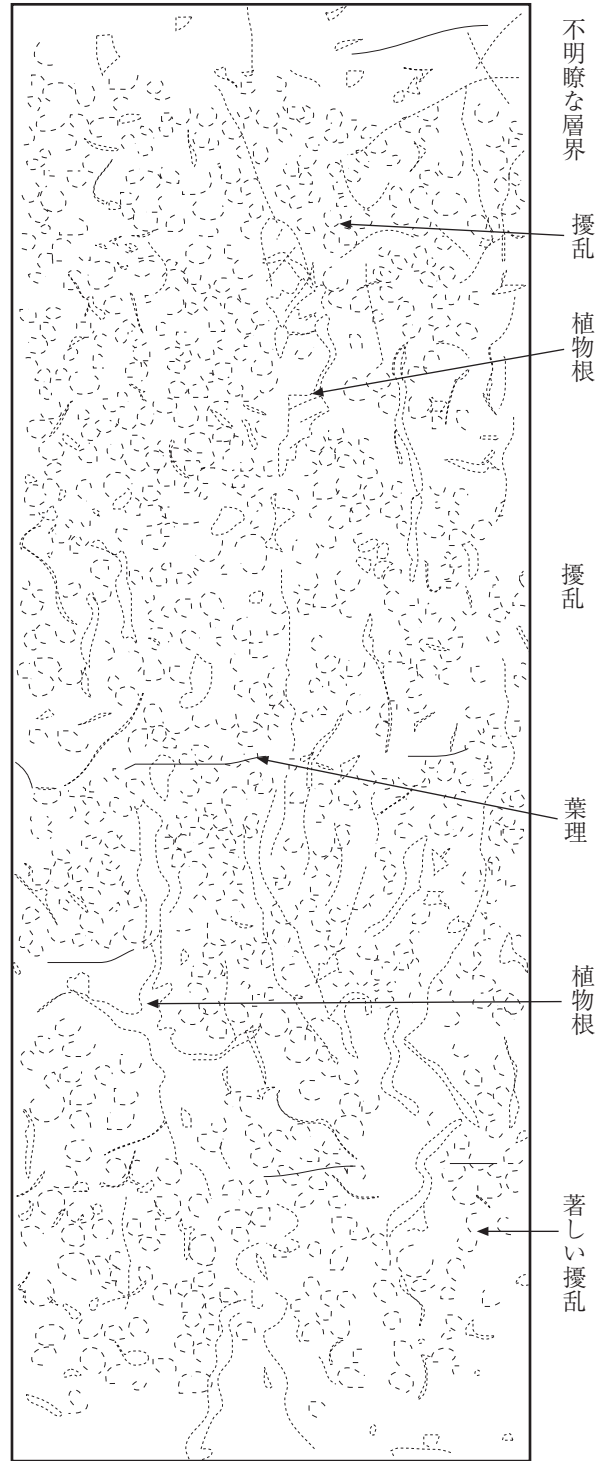
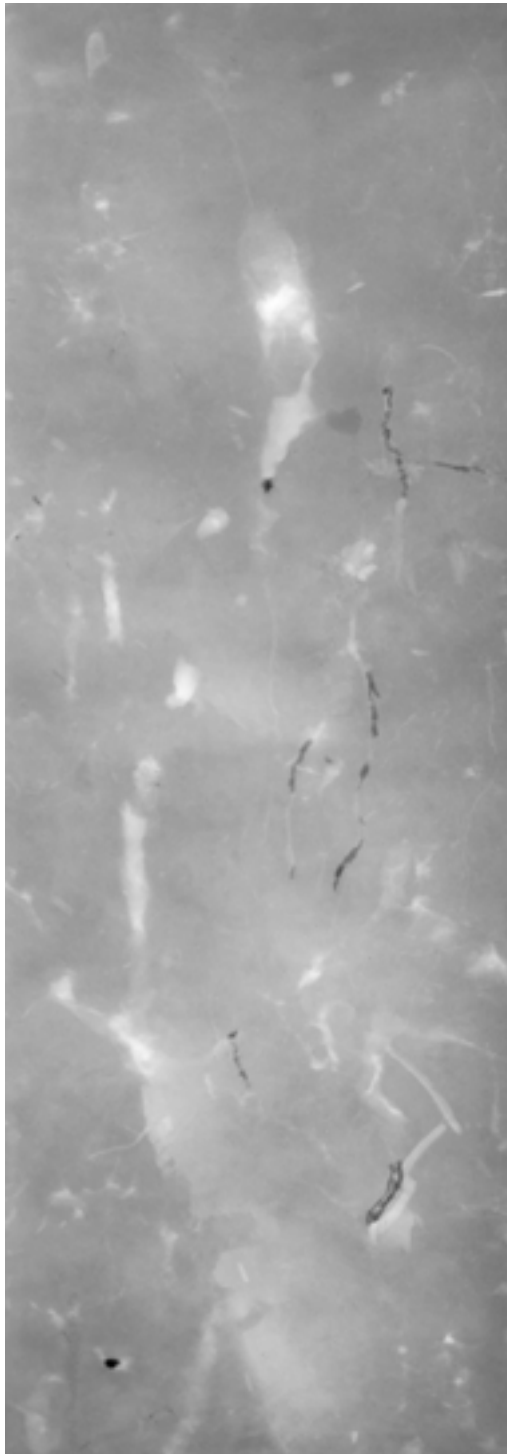
1 地点 試料番号 7

軟X線写真(5)



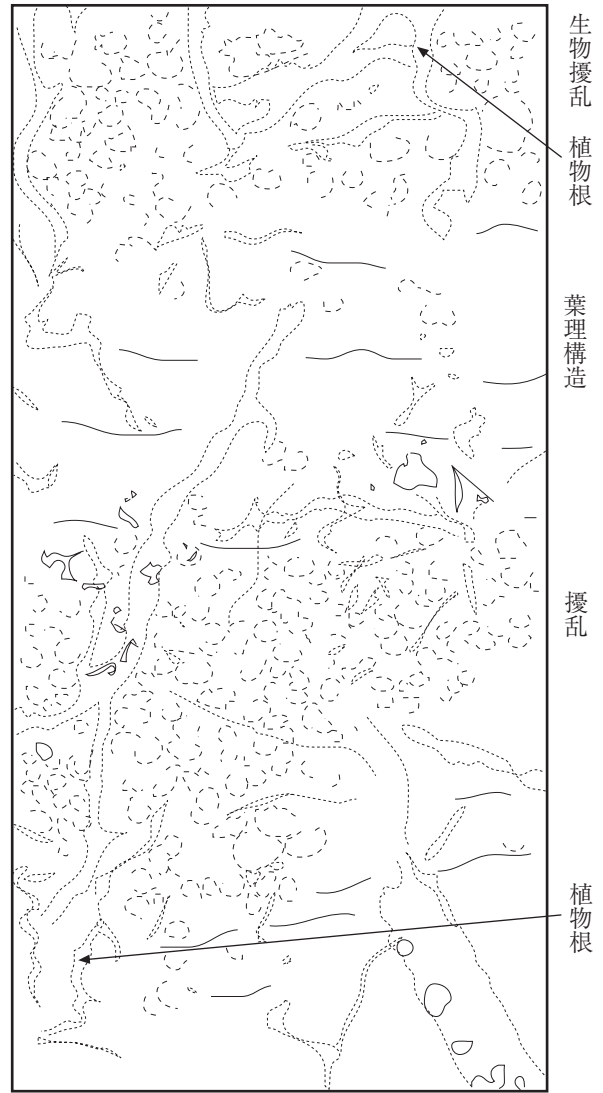
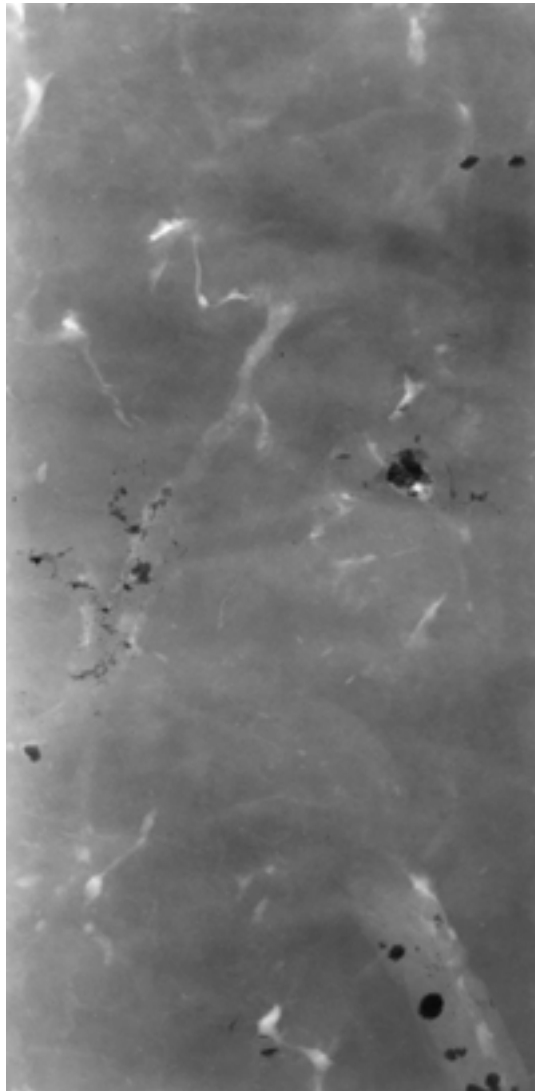
PL.48

軟 X 線写真 (6)



2 cm

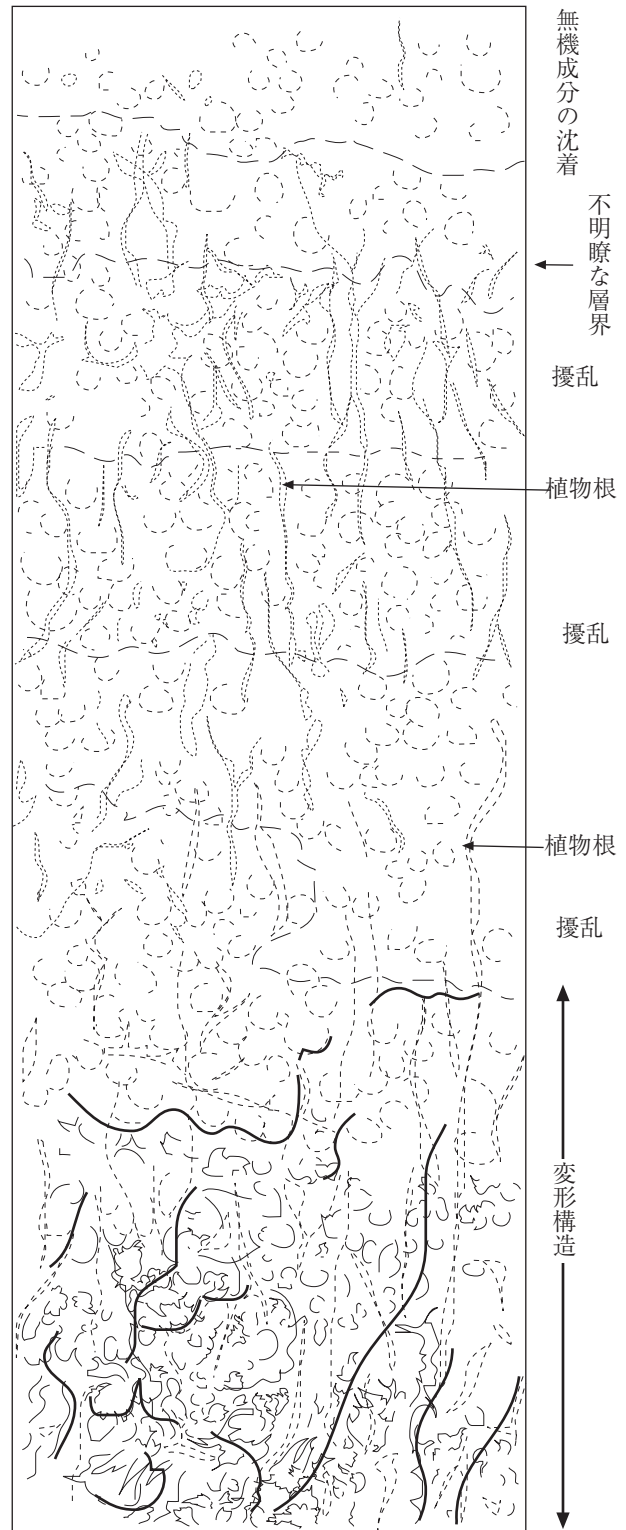
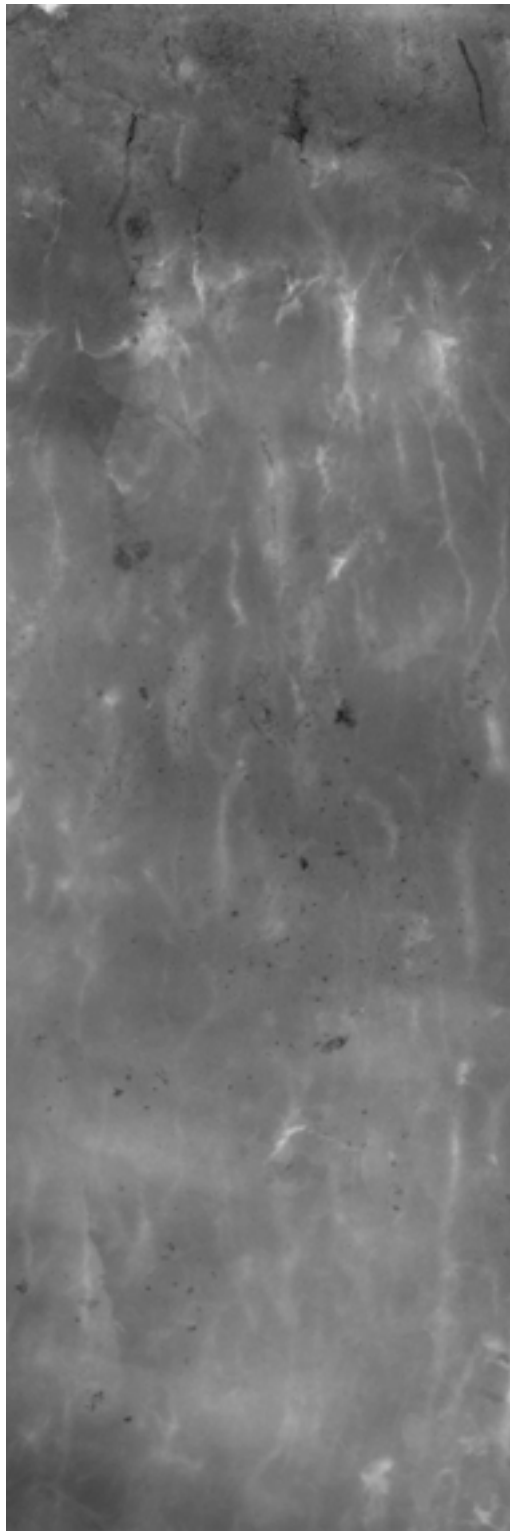
軟X線写真(7)



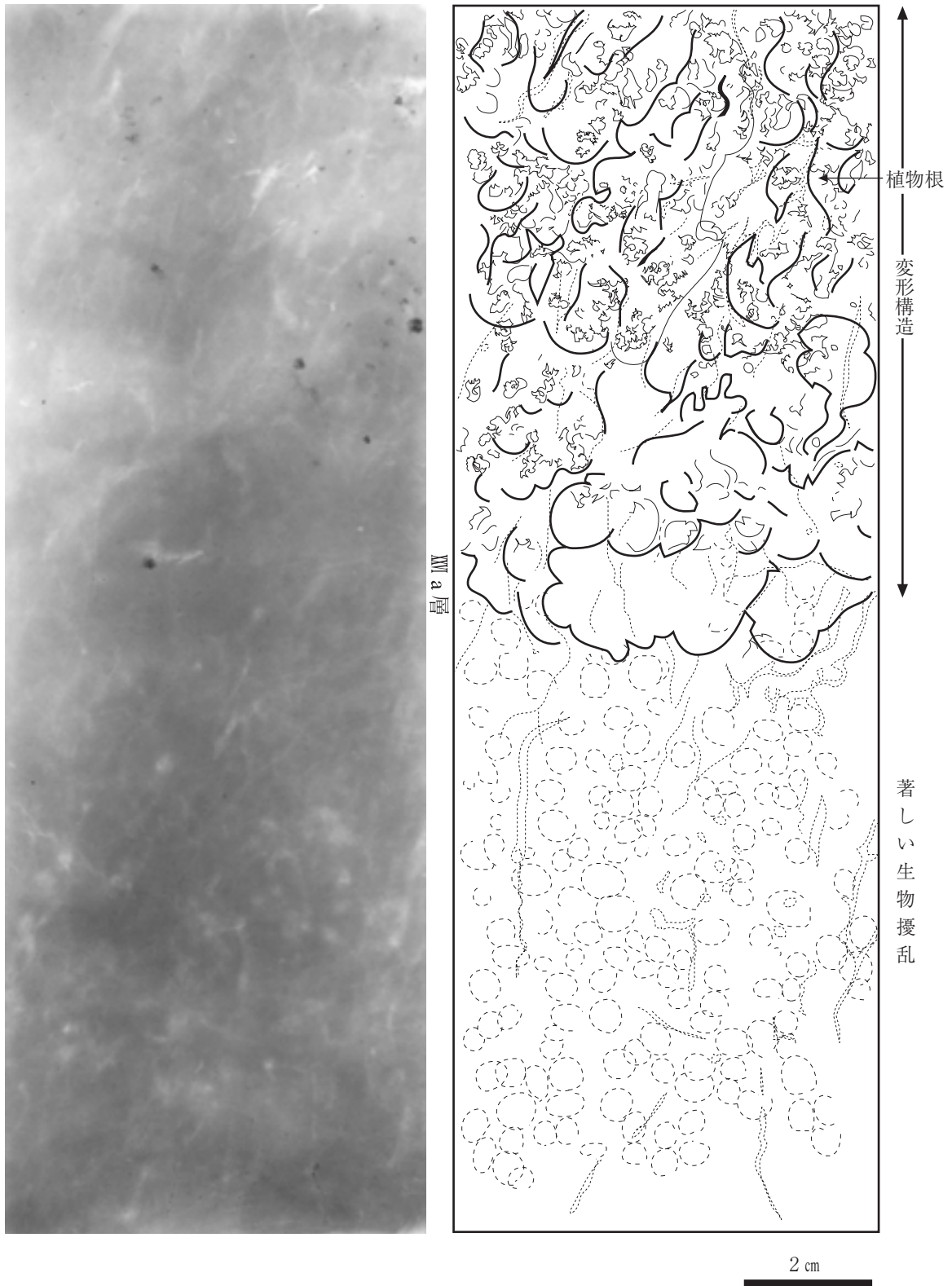
2 cm

PL.50

軟X線写真(8)

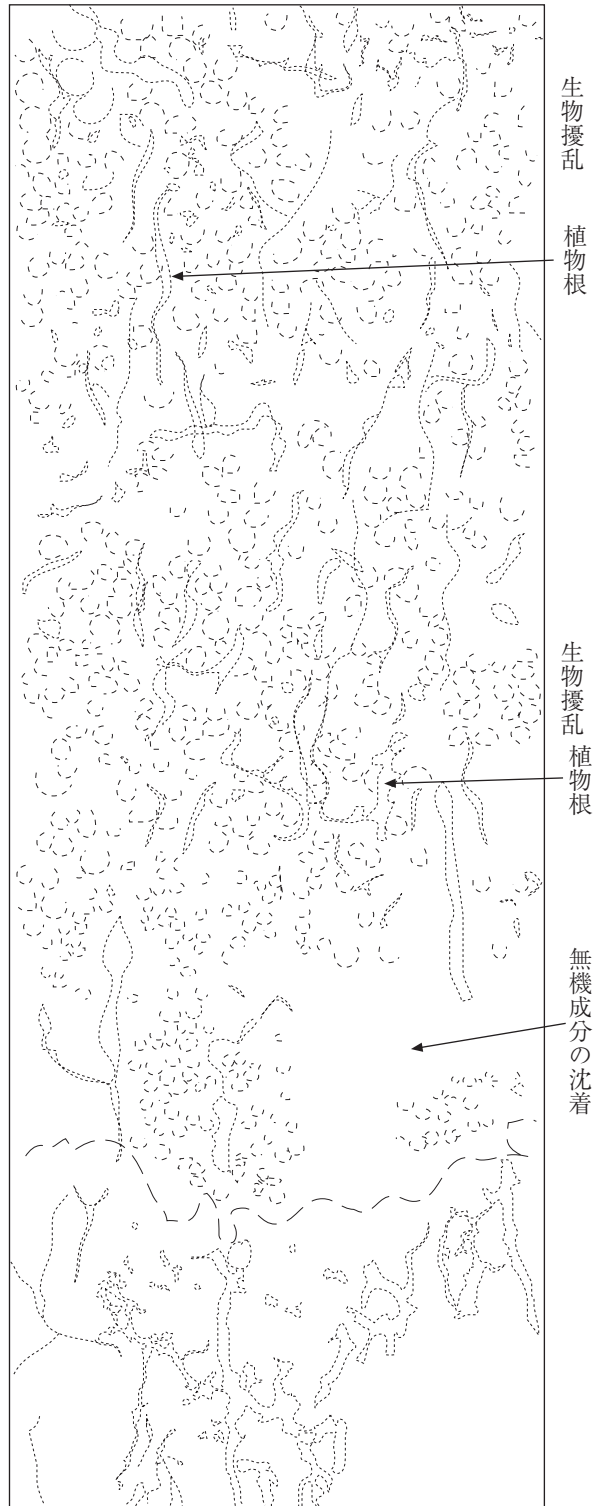
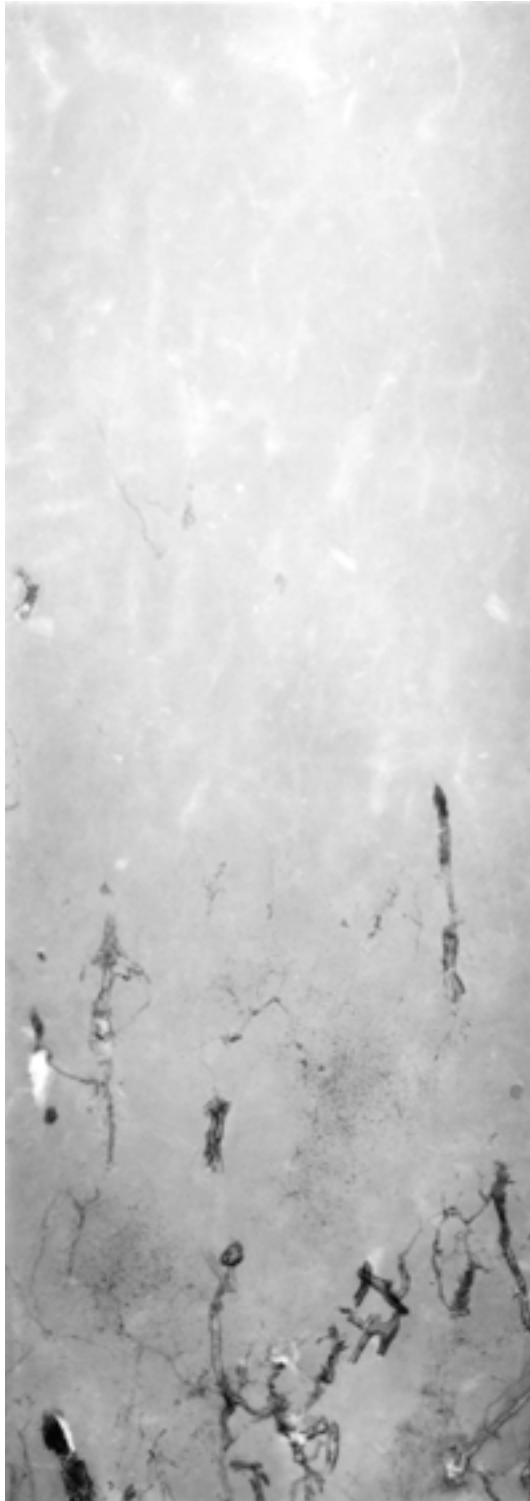


軟X線写真(9)



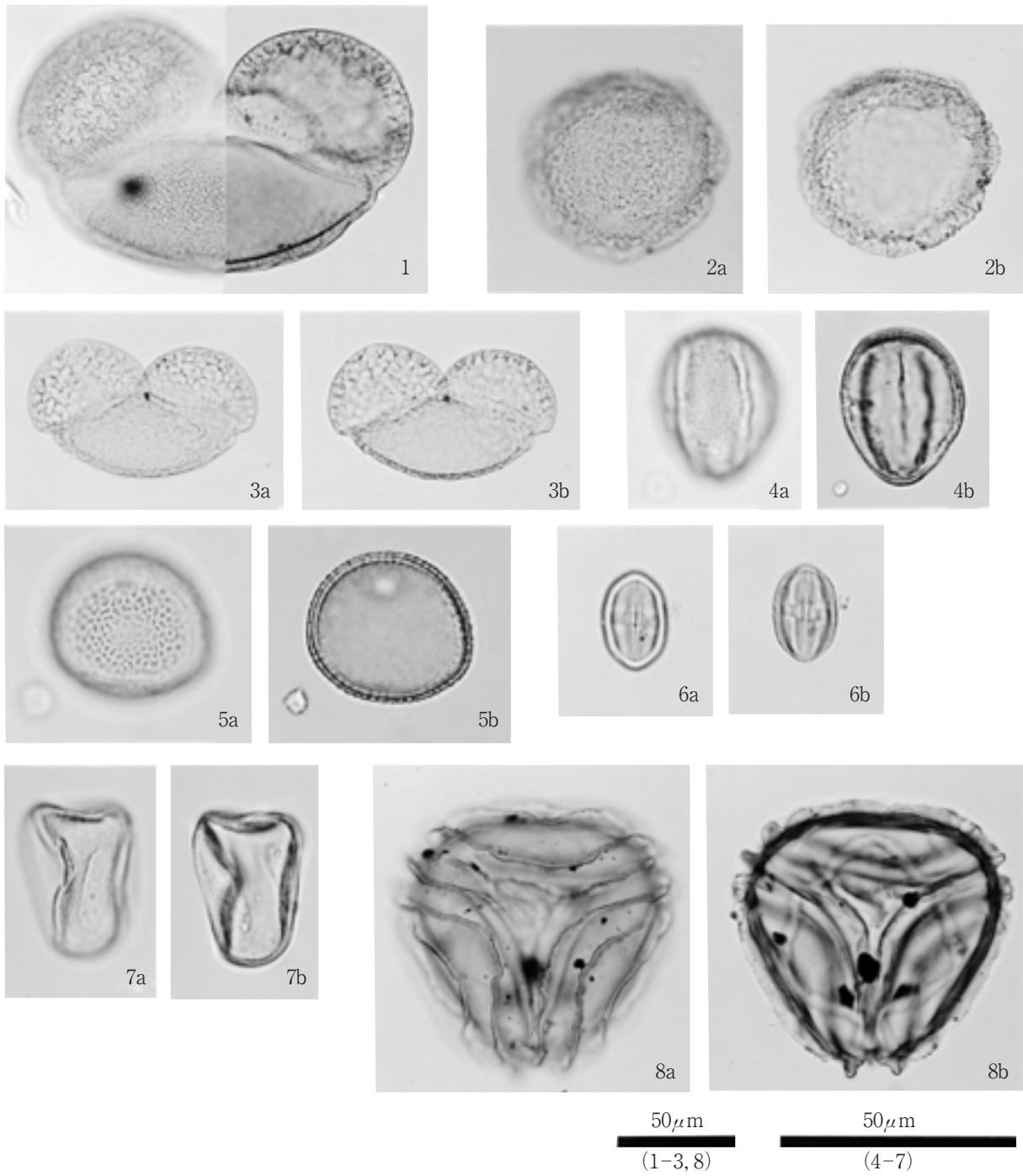
PL.52

軟X線写真(10)



2 cm

花粉化石



1. モミ属 (試料番号2-9)

2. ツガ属 (試料番号2-9)

3. マツ属 (試料番号2-9)

4. コナラ属コナラ亜属 (試料番号2-9)

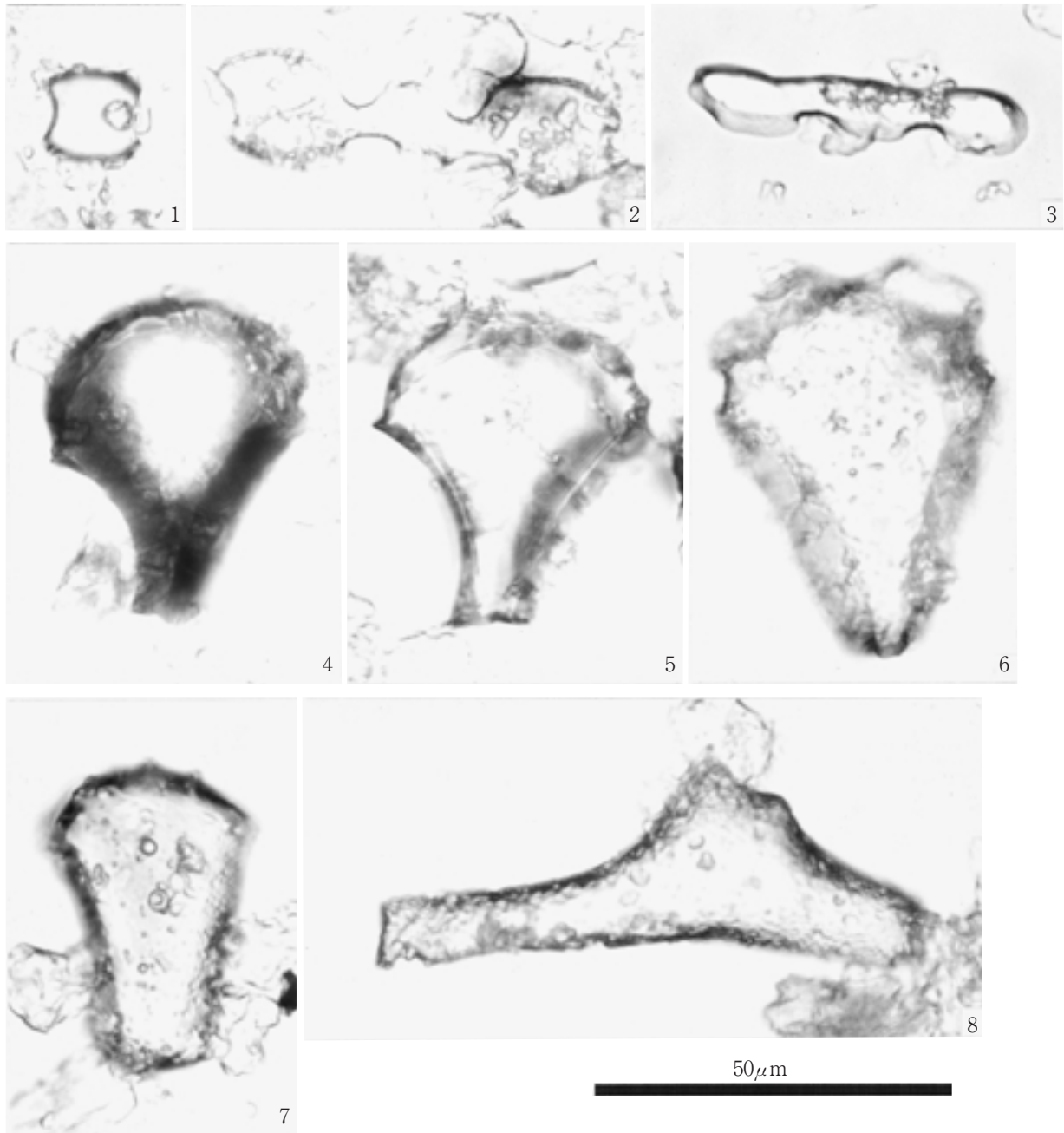
5. ガマ属 (試料番号2-9)

6. シイノキ属 (試料番号2-9)

7. カヤツリグサ科 (試料番号2-9)

8. ミズワラビ属 (試料番号2-9)

植物珪酸体



1. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号1-10)

2. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号2-14)

3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2-7)

4. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号2-7)

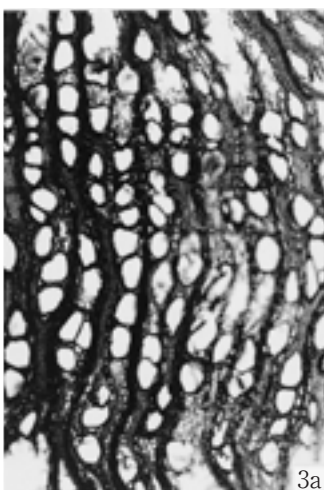
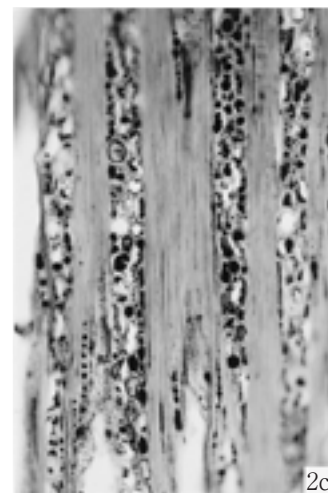
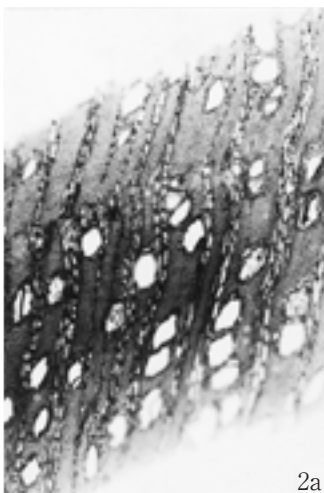
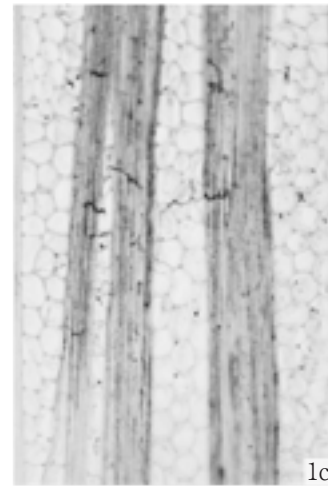
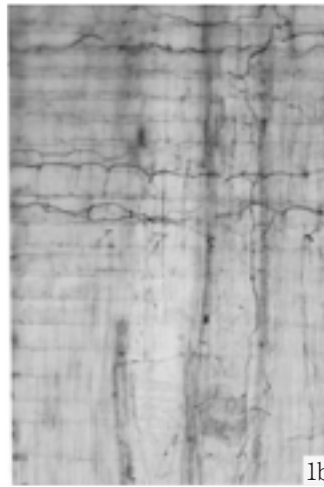
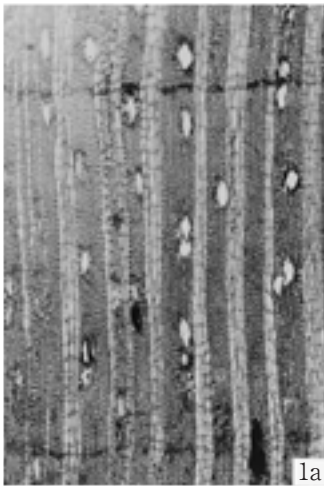
5. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号2-12)

6. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号1-11)

7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号2-9)

8. 樹木」グループ (試料番号2-11)

木材



1. アワブキ属 (SB-1 P-2)
 2. アワブキ属 (SB-1 P-3)
 3. アワブキ属 (SB-1 P-1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

 200 μ m : a
 200 μ m : b, c

報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせきぐんさんのに							
書名	具同中山遺跡群Ⅲ-2							
副書名	中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第65集							
編著者名	廣田佳久, 小島恵子, 田中涼子							
編集機関	(財)高知県埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2001年11月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐどうなかやまいせきぐん 具同中山遺跡群	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 ぐどうなかやま 具同中山	39207	70052	32° 58' 22"	132° 54' 28"	19991013 } 20000207	1,895㎡	中村宿毛 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
具同中山遺跡群	祭祀跡	弥生時代	祭祀関連遺構	1	弥生土器	自然堤防から後背湿地へ向かう緩斜面で祭祀跡を確認すると共に古墳時代の掘立柱建物跡も確認する。		
		古墳時代	祭祀関連遺構	3	土師器			
			掘立柱建物跡	1	須恵器 白玉 勾玉			
古代	祭祀関連遺構	1	須恵器 丸靫					

本書作成データ

本書の作成には、MacOS9.1と以下のハードとソフト及びフォントを使用した。

まず、基礎作業はPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業ではPowerMacintoshG4/733を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit (PPC) 1.08 b とExcel2001を用いた。編集はすべてQuarkXpress4.1r2Jを使用した。なお、表組はExcel2001で作成したものをタブ変換しIllustrator9.02にFlexTableを介して取り込み編集しEPSデータとした。

第Ⅲ章自然科学分析に掲載している表と挿図は納品されたExcelのデータ及びFreehandEPSデータをすべてIllustrator9.02で編集し直し、IllustratorEPSデータとした。ただし、図版データは版面の調整のみを行い納品されたFreehandEPSデータを使用した。

フォントはすべてNewCIDフォントで、和文フォントにモリサワリユウミンL-KL・太ミンA101・中ゴシックBBB・太ゴシックB101・見出ミンMA31、欧文フォントにビブロスRmAlpha、TimeItalic、外字にエヌフォア外字DXを使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

また、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSで印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集

具同中山遺跡群 - 2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年11月18日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

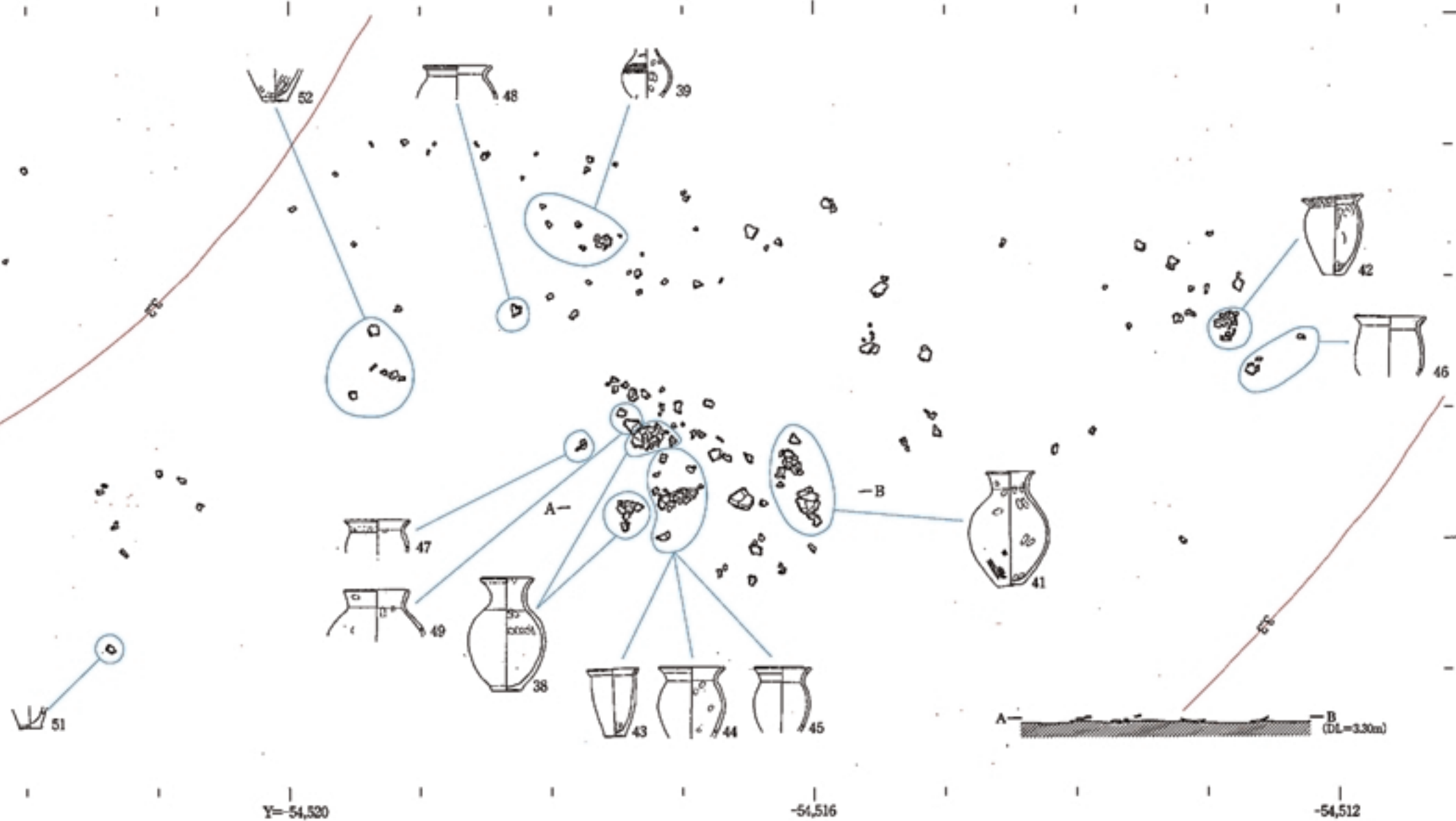
印刷 株式会社 飛鳥

具同中山遺跡群Ⅲ-2

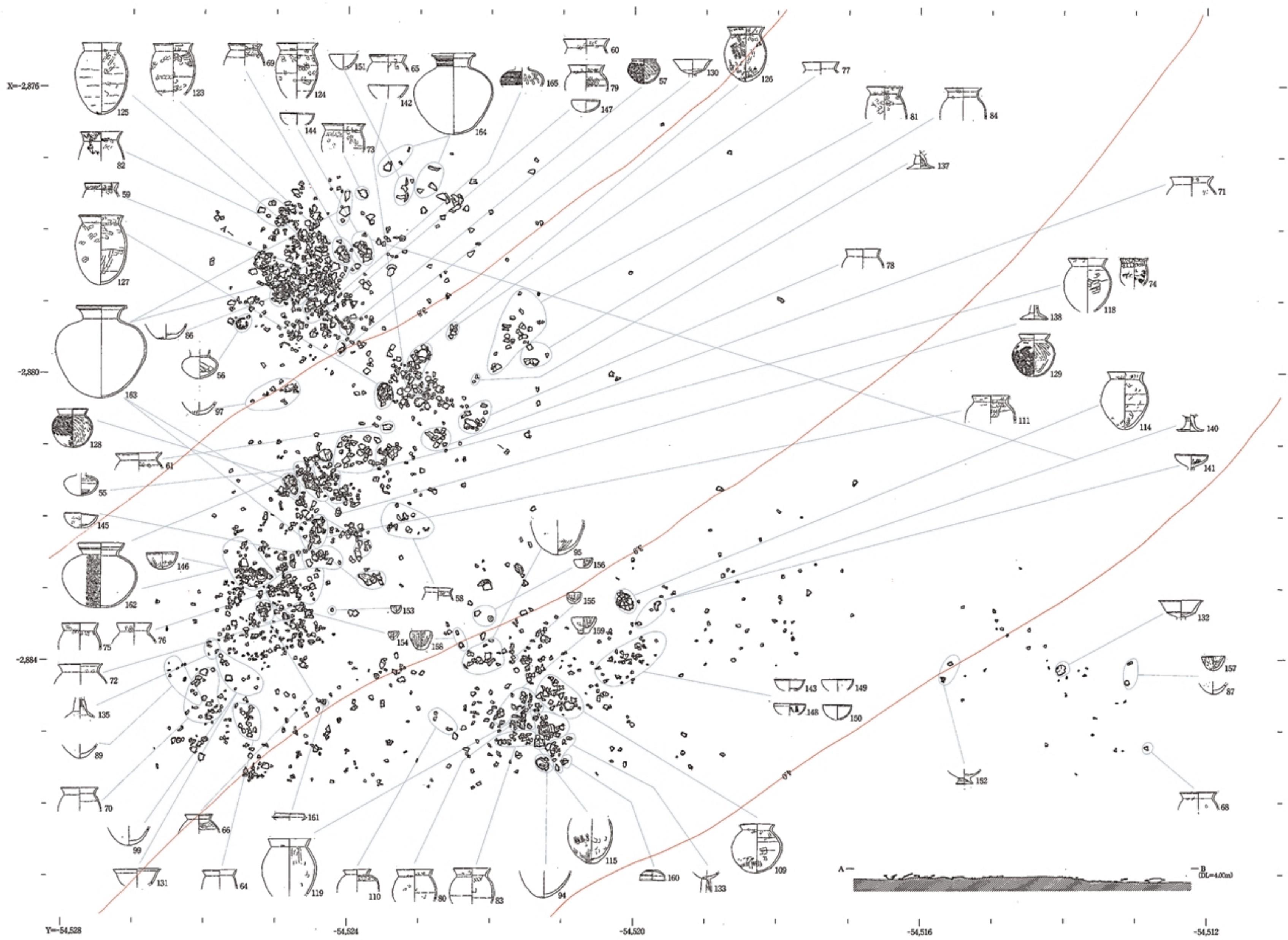
付 図

X=2,876

-2,880



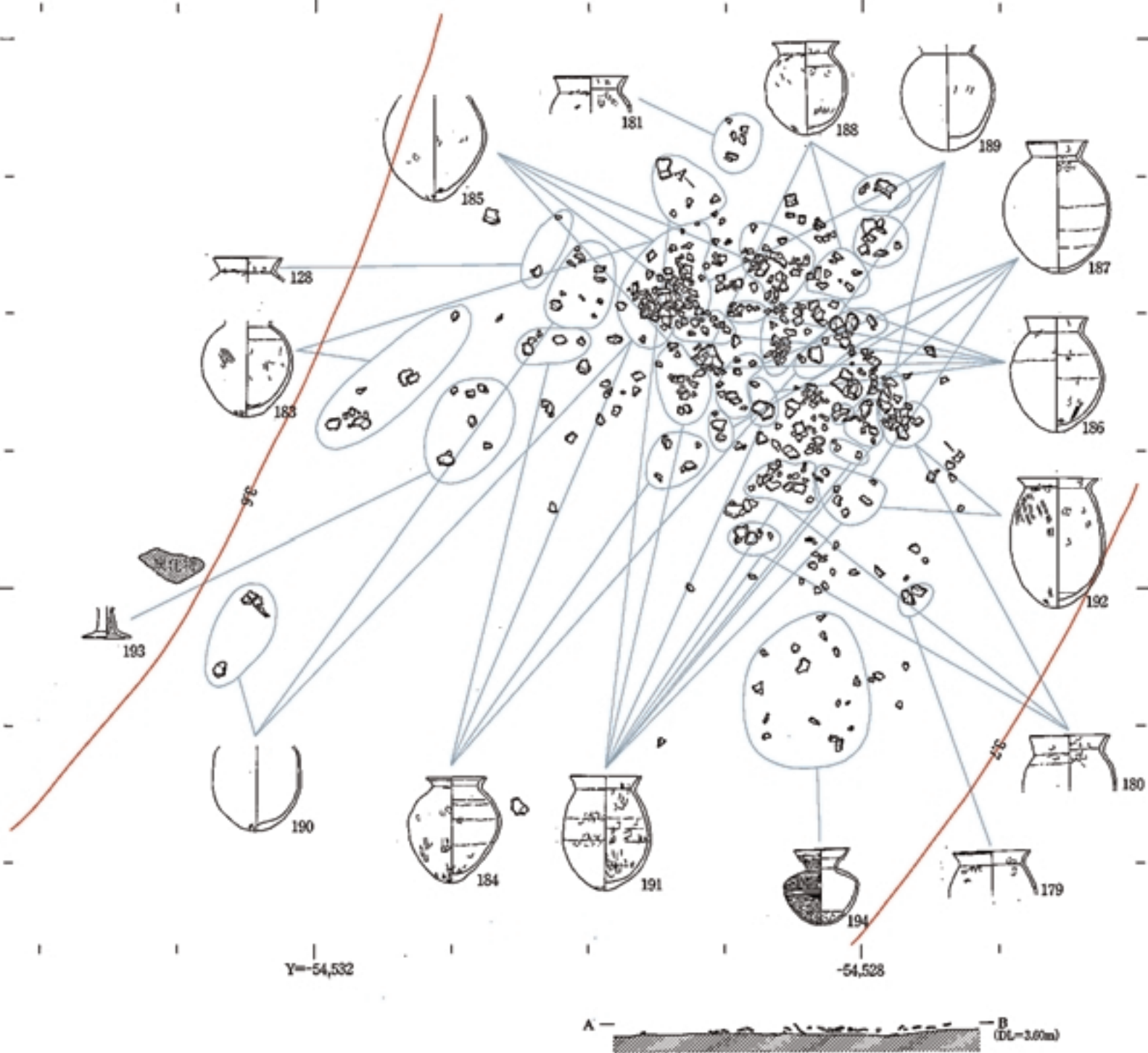
付図1 SF-1 遺物出土状態 (S=1/40)



付圖2 SF-2 遺物出土狀態 (S=1/40)

X=2,832

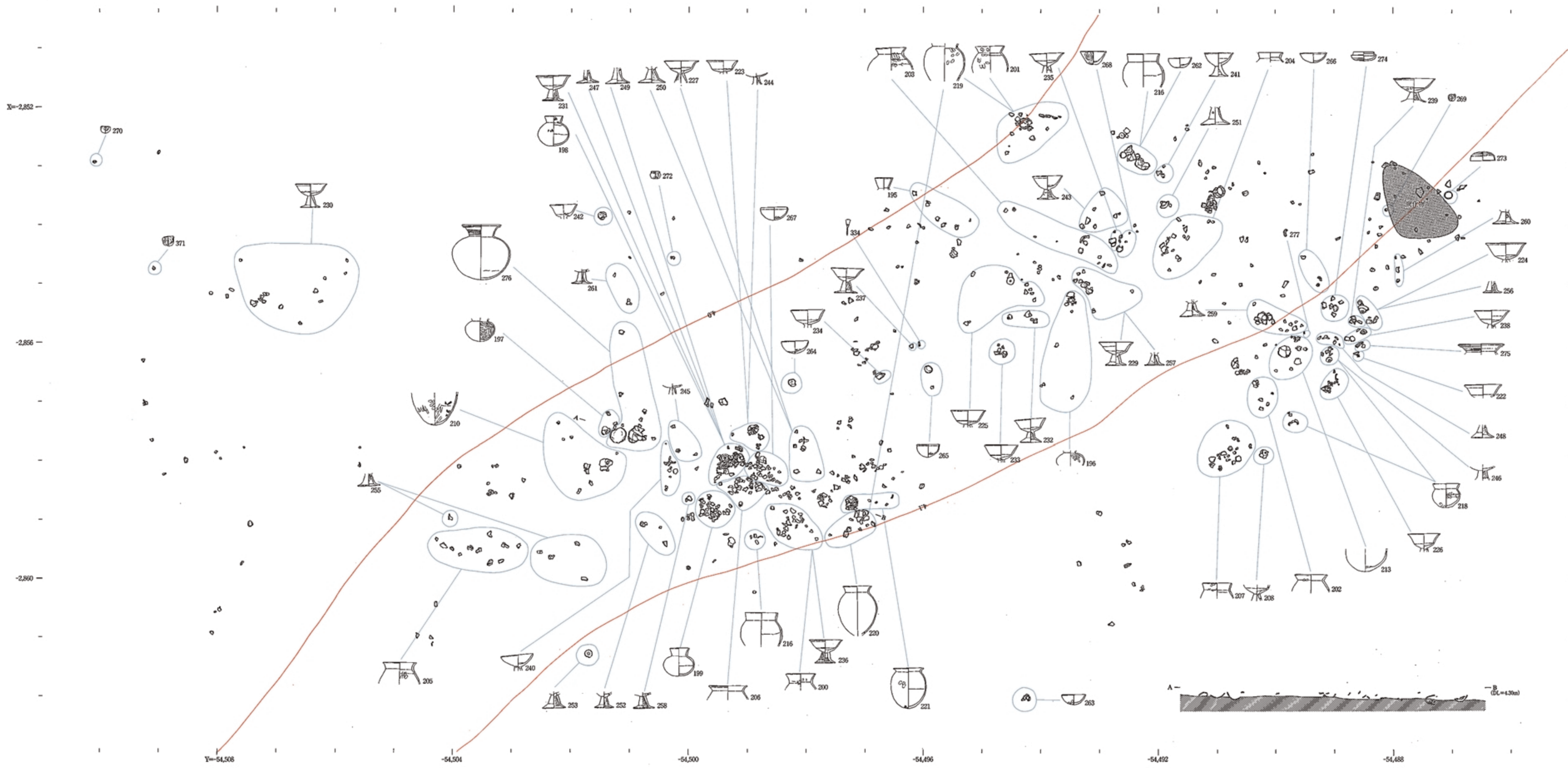
-2,856



Y=54,532

54,528

付図3 SF-3 遺物出土状態 (S=1/40)



付圖4 SF-4 遺物出土狀態 (S=1/40)